

磐城山遺跡（第4・5次）発掘調査報告書
—農地改良工事に伴う緊急発掘調査—

2014年3月

鈴鹿市考古博物館

序

三重県鈴鹿市の北部を流れる鈴鹿川の流域には、縄文時代から中世に至るまで、多くの遺跡が存在しています。三重県は、地理的な要因から、東西の文物が交錯し、時代ごとに様々な様相を呈しています。

ここに報告する鈴鹿市河曲地区は、古代の河曲郡に相当します。壬申の乱の際に、大海人皇子（天武天皇）が通過した、「川曲の坂下」の有力な候補地でもあります。また、天皇家に采女を献上している、古代豪族大龍氏の本拠地ともされています。後に、伊勢国国分寺が建立され、河曲駅が整備されるなど、交通の要衝として栄えた地域です。

磐城山遺跡の発掘調査では、古代を遡る弥生時代や古墳時代の文物が多く確認されました。これらの中の貴重な資料をもとに、鈴鹿市の歴史とその意義を発信し、豊かな地域社会の形成に少しでも貢献できれば幸いです。

発掘調査にあたっては、地元木田町自治会、河曲地区をはじめとし、市民の皆さま、三重県教育委員会等から多くなご協力とともに、暖かいご支援をいただきました。文末となりましたが、皆さまのご誠意ある対応に、心から御礼申し上げます。

平成26年3月

例　　言

1. 本書は、三重県鈴鹿市木田町字上條所在の磐城山遺跡第4次・第5次の発掘調査に係る報告書である。

2. 調査は、平成23年度及び平成24年度に行った農地改良工事に伴う記録保存の緊急発掘調査である。

3. 発掘調査は以下の体制で実施した。

(平成23・24年度)

調査担当	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館	埋蔵文化財 G
組織及び構成	鈴鹿市考古博物 館長	東口 元
	埋蔵文化財 G L	新田 剛
	埋蔵文化財 G	服部真佳
	田部剛士（※現地調査担当）	
	吉田隆史	
	米川梨香	
	吉田真由美	
	小川陽子（平成24年度から）	

4. 現地調査に係る発掘費用は各年度の国庫補助金で負担し、報告書の印刷製本費は鈴鹿市が負担した。

5. 本書の作成及び編集は、考古博物館埋蔵文化財グループの田部が行った。

6. Fig.3では国土地理院発行1:50,000地形図四日市・龜山の一部を使用した。

7. 航空写真撮影については、田部の計画・監修のもと、株式会社イビソクが実施した。

8. 本調査に係る遺物・図面・写真是全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示等をいただいている。記して感謝いたしたい。

伊藤久嗣・伊藤 洋・田村陽一・伊藤裕偉・石井智大・川部浩司・勝山孝文・森 泰道・早野浩二
(敬称略・順不同)

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
1 調査の契機	1
2 調査の経過	1
第Ⅱ章 位置と環境	
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の方法	
1 調査区	9
2 地区割り	9
3 遺構番号	10
4 基本層序	10
第Ⅳ章 検出遺構	
1 積穴住居・土坑	10
2 掘立柱建物	27
3 溝	28
第Ⅴ章 出土遺物	
1 積穴住居・土坑	33
2 溝	50
3 単独ピット	58
4 包含層ほか	58
5 その他	61
第Ⅵ章 調査の成果	
1 環濠について	74
2 集落の継続時期	74
3 古代について	74
4 中世城館にかかる遺構	76

表目次

Tab.1 鷲城山遺跡の発掘調査履歴	5
Tab.2 遺物観察表	61-73
報告書抄録	109

図版目次

Fig.1 鈴鹿市の位置	7
Fig.2 鈴鹿市の地質	7
Fig.3 遺跡の位置	8
Fig.4 調査区の地区割り	9
Fig.5 第3・5次調査区遺構配置図	11-12
Fig.6 第4次調査区遺構配置図	13
Fig.7 第5次調査区遺構配置図	14
Fig.8 SK0474・SH0471/75/88・SH0484・SH0428/29・SH0454平面図	15
Fig.9 SH03134・SH0421/22/23・SH0404平面図	16
Fig.10 SH0455平面図	16
Fig.11 P04242遺物出土状況図	17
Fig.12 SH0462/65平面図	17
Fig.13 SH03111・SH03142平面図	18
Fig.14 SH0406・SH0408・SH03136・SH03138/139・SH0560平面・断面図	19
Fig.15 SH0561・SH0569・SH0559平面・断面図	20
Fig.16 SH0559遺物出土状況図	21
Fig.17 SH0551/53・SH0554平面図	22
Fig.18 SH0547/57・SH0549・SK0550平面図	22
Fig.19 SH0545・SH0535/36・SH0575平面・断面図	23
Fig.20 SH0533/34・SH0441・SH0538平面・断面図	24
Fig.21 SH0517/27・SH0516/30平面図	25
Fig.22 SH0508/14・SH0537/40平面図	26
Fig.23 SH0507/15平面図	26
Fig.24 SH0504/05平面図	27
Fig.25 SH0502平面図	27
Fig.26 SD0453平面図	28
Fig.27 SD0425/27・SD0442/32平面図	29
Fig.28 SD0405/61/68平面図	31
Fig.29 SD0501平面図	32
Fig.30 SD0568平面図	32
Fig.31 SK0474・SH0471/75/88・SH0484出土遺物	34
Fig.32 SH0428/29出土遺物	35

Fig.33	SH0428/29・SH0454 出土遺物	36
Fig.34	SH03134 出土遺物	37
Fig.35	SH0421/22/23・SH0404 出土遺物	38
Fig.36	SH0455/51/56 出土遺物	39
Fig.37	SH0455 出土遺物	40
Fig.38	SH0462/65 出土遺物	41
Fig.39	SH0406・SH0408 出土遺物	41
Fig.40	SH03136・SH0566・SH03138/139・SH0565 出土遺物	42
Fig.41	SH0560 出土遺物	43
Fig.42	SH0401・SH0402・SH0403・SH03111 出土 遺物	44
Fig.43	SH0559 出土遺物	44
Fig.44	SH0551/53・SH0554 出土遺物	45
Fig.45	SH0547/57・SH0549・SK0550 出土遺物	45
Fig.46	SH0545 出土遺物	46
Fig.47	SH0535/36・SH0575 出土遺物	47
Fig.48	SH0533/34・SH0538 出土遺物	48
Fig.49	SH0517/27・SH0516/30 出土遺物	49
Fig.50	SH0510-14 出土遺物	49
Fig.51	SH0507/15 出土遺物	50
Fig.52	SH0504/05 出土遺物	50
Fig.53	SH0502 出土遺物	50
Fig.54	SH0542・SH0548・SH0562・SH0537/40 出 土遺物	51
Fig.55	SD0453 出土遺物	51
Fig.56	SD0425/27 出土遺物	52
Fig.57	SD0442/32 出土遺物	53
Fig.58	SD0430/49/82/77・SD0446/38・SD0441/44・ SD0447・SD0440/86・SD0424/31 出土遺物	55
Fig.59	SD0405/11/61/68 出土遺物	56
Fig.60	SD0409 ほか出土遺物	57
Fig.61	SD0501・SD0568 出土遺物	58
Fig.62	単独ピット出土遺物	59
Fig.63	包含層・表面採取出土遺物	60
Fig.64	サブトレンチ・現代地割溝・表土出土遺物	61
Fig.65	山中式から廻間式期の集落の変遷	75

写 真 図 版 目 次

PL.1	第 5 次調査区航空写真	78
PL.2	第 4 次調査区全景	79
PL.3	第 5 次調査北区全景・中区全景	80
PL.4	第 5 次調査区全景・南区全景	81
PL.5	第 5 次調査西区全景・SK0474・SH0484 完掘	82
PL.6	SH0404 完掘・SH0455 完掘	83
PL.7	SH0428/29 完掘・SH0462/65 完掘	84
PL.8	SH03138/139 完掘・SH0561 完掘	85
PL.9	SH0560/66 完掘・SH0565 完掘	86
PL.10	SH0559 完掘・SH0551/53 完掘	87
PL.11	SH0547/57 完掘・SH0545 完掘	88
PL.12	SH0535/36 完掘・SH0542/44 完掘	89
PL.13	SH0533/34 完掘・SH0517/27・SH0516/30 完掘	90
PL.14	SH0508-14 完掘・SH0507/15 完掘	91
PL.15	SH0504/05 完掘・SD0425/27 ほか完掘	92
PL.16	SD0453 完掘・SD0442/32 ほか完掘・SD0405 鋤削状況・SD0441/44 暗渠完掘	93
PL.17	SD0409 蔓出土状況・SH0428 南辺廻壁溝完掘・ SH0560/66/65 完掘・SH0559 遺物出土状況	93
.....	94	
PL.18	SH0428/29・SH0404・SH03138/139・SH03 136 遺物出土状況	95
PL.19	SH0421/22/23・SH0559・SH0560・SH0566・ SH0547/57・SH0507/15・SD0405 遺物出土状況	96
PL.20	SD0405/11・SD0442・SH0535/36 排水溝・SD 0501 遺物出土状況・第 5 次南西区遺構検出状況 SH0547/57 檢出状況・SH0404 遺物取上風景 SD0441/44 暗渠鋤削風景	97
PL.21	出土遺物（報告番号 1-52）	98
PL.22	出土遺物（報告番号 46-96）	99
PL.23	出土遺物（報告番号 91-156）	100
PL.24	出土遺物（報告番号 146-206）	101
PL.25	出土遺物（報告番号 213-364）	102
PL.26	出土遺物（報告番号 369-441）	103
PL.27	出土遺物（報告番号 442-469）	104
PL.28	出土遺物（報告番号 472-518）	105
PL.29	出土遺物（報告番号 514-552）	106
PL.30	出土遺物（報告番号 553-634）	107
PL.31	出土遺物（報告番号 635-644）	108

第Ⅰ章 はじめに

1 調査の契機

平成 21 年度に、木田町地内で山上の畑を道路面まで床下げるまでの協議があった。その範囲は磐城山遺跡に該当し、過去に発掘調査された隣接地でもあった。そのため、文化財保護法第 93 条による届出を求め、遺跡保護の協議を行った。その結果、農地改良の工事の事前に発掘調査を行って記録を残すことになった。ただし、届出された面積は約 5,000 m² 以上にわたり、単年度の対応が不可能であった。そこで、発掘調査は毎年数百 m² ずつ行うこととした。調査の完了した範囲から工事に着手する工程で進めることになった。なお、現在も発掘調査は継続中である。

発掘調査は過去に南面する道路部分で 2 回（三重県埋蔵文化財センターの調査を併せて 3 回）にわたって行われていたので、今回の農地改良に伴う平成 22 年度の調査を第 3 次調査とした（Tab.1）。なお、第 1 次及び第 2 次調査については概要が報告されており（杉立 1998、岡田 2000）、第 3 次調査の結果は本報告した（田部 2011）。本書は、その後の平成 23・24 年度の第 4 次と第 5 次調査の成果について報告するものである。

第 4 次調査は平成 23 年 4 月 4 日から 10 月 2 日までの約 6 ヶ月間行った。第 5 次調査は、平成 24 年 6 月 25 日から翌年 1 月 11 日までの約 6 ヶ月間である。なお、調査面積は第 4 次が約 315 m²、第 5 次が約 620 m² の、合計 935 m² である。作業は重機にて表土を除去した後、発掘作業員 6 名 / 日によって遺構の検出と掘削を繰り返して行った。

遺構の遺存状況は第 4 次調査区で良好で、深い所で検出面からの深さ（以下、GL・○cm と表記する）が 50～60 cm 程度であった。そのため、第 4 次調査区では面積の割りに調査に手間がかった。反対に、5 次調査区の北側では検出面から数 cm 程度と浅くなり、調査面積を稼ぐことができた。以下、調査日誌を抄録することで、調査の経過とする。

2 調査の経過

調査の経緯や概要については既刊の概要報告がある（田部 2013・2014）、以下調査日誌を抄録することで調査の経過に替える。

【調査日誌抄】

第 4 次調査（315 m²；平成 23 年 4 月 4 日～10 月 2 日）

4 月 4 日 木の根の周りの表土除去、給水タンク設置等の準備作業を行う。4 次調査区の中央に南北方向のサブトレーンを掘削する。

4 月 5 日 サブトレーン完掘。南側は GL-30～40 cm、北側では GL-10～20 cm となる。北東区から上層包含層の掘削を開始する。

4 月 6 日 SD0396、SD03121 の交点を掘削。中世以降と認識する。

4 月 7 日 SD0396、SD03121 完掘後、下面にて SH03142/143/144 等の周壁溝を検出す。北東区で下層包含層の掘削に着手する。一部、地山面まで到達し、その面で焼土 2 ヶ所等を検出す。SH03138 および SH0139 の交點に該当すると想定する。SH03134 埋土完掘後、周壁溝を検出す。

4 月 8 日 隣南のため、終り作業中止。

4 月 11 日 北東区の下層包含層の掘削を完了する。下面で溝柱穴を多数検出し、その掘削に着手する。SH0403 周壁溝が SH03134 に先行することを確認する。SH0401 土壌掘削開始。

4 月 12 日 SH0403 掘削開始。GL-30 cm と深い割りに、遺物はほとんど出土しない。床面到着後、北辺の周壁溝を検出す。SH03134 脊床面撤去。SH0401 土壌掘削後、床面に柱穴、溝を検出するが比較的単純である。SD0404、SD03110 の延長、SH03138/139 西周壁溝等を掘削する。

4 月 13 日 SD0405 掘削。周辺に礫を含むビットが數か所あり、中世の柱穴かと考える。SH03134 下面から SH0403 の柱穴や周壁溝を確認する。SH03136 の床面撤去後、下面検出の溝、ビット等を掘削。ミニチア土器出土。

4 月 14 日 西側へ包含層の掘削範囲を広げていく。平面図作成開始。

4 月 15 日 SH0402 土壌掘削。BF10 の西側や BC10・11 等で地山が高い位置（GL-5 cm 程度）で確認される。その他の地区も包含層掘削を実施。

4 月 18 日 SH0402 掘削継続。黒色土の範囲が東へ移動してきて、竪穴住居でない可能性が出てくる。各包含層掘削継続。地山へ到着した地区から、その面で確認した溝等の掘削を開始する。

4 月 19 日 前夜の降雨による水抜き作業実施。降雨が断続的に続くため、午前中のみで掘削作業を中止し、午後から園芸作業作業。

4 月 20 日 SH0402 と認識していた黒色土の撤去を完了する。その他、下層包含層掘削。下面検出遺構の掘削継続。

4 月 21 日 SH0406、SH0408 を認定し、掘削に着手する。その他、各地区の地山上面遺構の掘削を継続。BE ライン土層断面図作成。

4 月 22 日 SH0406、SH0408 掘削継続。SH0404 土壌掘削後、ビット等を掘削。午後から降雨のため作業中止。

4 月 25 日 先日の降雨のため、遺構掘削を一時中断し、南東区の検出作業を行う。一部、東西方向の現地削除の掘削に着手する。

4 月 26 日 南東区検出作業継続。SD03121 延長掘削。北東区の溝やビット等の掘削を再開し、大部分を終了する。SD0405 は良好な出土状況をもつことを確認し、遺物出土状況図を作成する。

4 月 27 日 本日から 5 月 8 日まで連休にかかるため、作業員を休業とし、図面作成業のみを行う。

5月9日 北東区の遺構掘削を継続する。南東区SD03121及び東西現代溝を掘削。

5月10日～5月12日 降雨のため、終日作業中止。

5月13日 水抜き実施。

5月16日 北東区の遺構掘削を概ね完了する。以後、南東区に集中する。SD0405とSD0411の交点以西を対象として調査していた可能性が高くなる。東西現代溝とSD03121の掘削を完了し、南東区の包含層の掘削に着手する。本日から衣笠土木によって、西側の竹林等の伐採が開始される。

5月17日 包含層掘削継続。午後から降雨のため作業中止。

5月18日 包含層を完掘した箇所から、下面検出の遺構（SD0419～SD0424等）の掘削を開始する。SH0428の掘削に着手する。

5月19日 南東区の各溝が掘削完了した範囲から、ピットの掘削を開始する。SD0405、SD0430、SH0428/29等の掘削を継続する。SD0427の掘削に着手する。

5月20日 北東区のレベリング実施。SD0430、SD0405等の掘削が完了する。

5月23日～5月27日 降雨のため、終日作業中止。

5月30日 水抜き実施。

5月31日 南東区の西側の包含層掘削を開始する。特にBF09区では複数の遺構が著しく重複することを確認する。中でも、SH0404は一番下位にあることを確認する。SH0428/29掘削開始。

6月1日～6月2日 降雨のため、終日作業中止。

6月3日 都合により、終日作業中止。

6月4日 水抜き実施後、掘削を再開する。BE09区にて土坑となると考えていたものが、大型の柱穴になることが判明する。遺物はほとんど出土しないものの、埋土はSH0404にて黄褐色で古そうだと判断する。SH0428/29の内、SH0428完削。下部にあるSH0429が残る。衣笠土木により、西側の表土除去が開始される。北東の一部を除き、届出範囲の大部分の表土除去が行われる。

6月7日 BE09区大型ピット完掘。深さ0.9mと極めて深くなることが確認される。その他、各種遺構掘削を継続する。

6月8日 SH0404周壁溝の掘削を開始する。SD0442、SD0431、SD0427、SD0421、SD0420等掘削。

6月9日 都合により、終日作業中止。

6月10日～SD0424、SD0432、SD0443等掘削。SH0433は床面まで掘削を完了する。衣笠土木による表土除去が完了する。

6月13日 SH0433周壁溝及び、貼床層掘削。SD0424、SD0421、SD0442やその周辺のピットを掘削する。

6月14日 SH0428/29埋土、周壁溝等を掘削する。ピットの掘削が概ね完了し、北西区の包含層掘削に着手する。

6月15日 南東区の残りの遺構掘削を継続する。北西区の包含層掘削を継続する。

6月16日～6月22日 降雨のため、終日作業中止。

6月23日 水抜き実施。

6月24日 平面図作成作業のみ実施。

6月27日 SH0404埋土及び周辺の溝、ピット等を掘削する。SH0404の南北主柱穴に相当する大型ピットの掘削を開始する。完成形の撲滅等、遺物が豊富に出土する。埋土の色調は黒色が基調で南東の主柱穴とは様相が異なる。北西区の包含層掘削を再開する。

6月28日 北西区の包含層掘削がほぼ完了する。SH0428の貼床層撤去後、SH0429の周壁溝、南北主柱穴等を掘削する。レベル移動実施。

6月29日 都合により、終日作業中止。

6月30日 SD0409、SH0451、SD0452、SD0453等を掘削する。BF10区及びSD0440、SD0427/42等の出土遺物のレベリング作業を実施する。

7月1日 平面図作成及びレベリング作業実施。

7月4日 SD0409の西半を完掘し、東側に着手するも礫が多く出土することが判明する。SD0453、SD0456、SH0454、SK0457等の掘削を完了する。SD0456の下部にはSH0455が存在し、一部、先行して掘削を開始する。

7月5日 SD0453の掘削を継続する。下部にてSH0455の周壁溝を検出する。併せて、SH0455の床面はSD0453の基底面とほど同程度と深いことを確認する。SD0460掘削着手。BL13区ではSH0455として掘削した範囲が、他の遺構が重複していた可能性がある。

7月6日 都合により、終日作業中止。

7月7日 降雨のため、終日作業中止。

7月8日 SD0409、SD0453、SD0460等の掘削が完了する。SD0460はSH0454の下部にあることを確認する。SH0454は貼床してあり、SD0460の上位に形成されている。

7月11日 SH0455の埋土及び周壁溝等の掘削を本格的に開始する。床面直上でSD0467を検出し、筒状の高杯等が出土することを確認する。BG12・13の堅穴住居各種を一括して床面まで掘削する。周壁溝が4条あり、東からSH0462～SH0465とする。併せて、周辺のピットやSD0461等の掘削を開始する。先日のSH0455SWとして掘削した分は、埋土が黒色土を呈し、他の遺構が重複していると判断する。

7月12日 SH0455北東部を床面まで掘削し、周壁溝やピット、SD0467等を検出する。SD0467はSH0455に同時期ないし、先行することを確認する。SH0455南東部の埋土掘削を継続する。SH0462～SH0465床面検出のピット等掘削継続。SD0454掘削。SD0454は黒色土の埋土の上部に地山と同色、同質の埋土で覆われており、暗渠状になっている可能性が高い。検出も困難である。SD0466掘削開始。

7月13日 都合により、終日作業中止。

7月14日 SH0455南東の埋土掘削が完了後、東辺の周壁溝を掘削する。SH0454埋土掘削後、下部のSH0428/29と考る埋土の掘削を開始する。SD0462、SD0465、SD0468、SD0469等の掘削に着手する。

7月15日 SH0455 南東ピット、SH0428/29 墓土、SD0467、0470等の掘削を継続する。SD0409以北の遺構掘削はSH0462～SH0465 周壁溝を残さずする。一部、南西区の包含層の掘削に着手。北東区、南東区のレベリング作業終了。

7月19日 7月20日 台風接近のため、終日作業中止。

7月21日 午前に水抜きを実施する。午後から南西区の上層包含層の掘削を再開する。BH12はGL-0～10cm程度で床面に到達。SH0454の理土は残る。

7月22日 BH10及び同11区のGL-0～10cmまで完了する。ともにSH0428/29の理土である。その他も、包含層の掘削を継続する。

7月25日 南西区各グリッドの包含層掘削を継続する。SD0470掘削完了。南西区のSD0453側面に着目。

7月26日～7月27日 降雨のため、終日作業中止。7/26に三重県埋蔵文化財センター石井哲氏来訪。

7月28日 包含層掘削継続。SH0471を認定し、SH0310の延長と判断する。一部、SH0454とSD0453を混在して取り上げていたが、確実に分層できることが判明する。

7月29日 SD0409 磨土状況の図化及び写真撮影後、磚の撤去を開始する。下部のSH0462～SH0465の周壁溝の掘削に着手する。SD0453掘削継続。SH0428/29は床まで到達する。SD0470完結。

8月1日 SH0471下部のSH0475として掘削を開始する。理土は10cm程度である。SH0428/29の内、SD0453以東の掘削がほぼ完了する。SH0462～SH0465周壁溝の掘削を継続する。SD0466からは盤状高杯が出るが、他の場所から目立った出土遺物なし。

8月2日～8月3日 降雨のため、終日作業中止。

8月4日 北西区 SD0409の下面検出遺構の全てを掘削完了する。一番西側の溝の埋土は黄色でSD0460となると判断する。SK0474認定し、飛鳥時代前後大型土坑と判断する。SH0455理土、SH0428/29北辺周壁溝等の掘削を開始する。

8月8日 水抜き作業実施。SH0428/29のSD0453以西、SH0455、SK0474等の掘削を継続する。SD0476認定後、掘削に着手する。SD0476はSH0310の北辺周壁溝に該当すると考える。

8月9日 現地調査会実施のために、全体清掃を実施する。

8月10日 SH0455の北東主柱穴の掘削を開始する。SH0455、SH0428/29、SK0474等の開削を継続する。

8月11日 午前に説明会を実施する。21名の参加者がいる。午後から、通常作業とする。SH0455北西主柱穴及び東辺周壁溝、SD0477、SK0474等の掘削を継続する。SK0474の最下層で須恵器のハウガ等が出土する。

8月12日 これまでに掘削の完了した範囲から、レベリング作業を実施する。

8月14日～8月19日 益休みとして、休業。

8月22日 降雨のため、終日作業中止。

8月23日 水抜き作業のみ実施する。

8月24日 午前中、レベリング及び水抜き作業等を実施する。午後から、博物館実習生5名及びCNS取材を受け入れる。SH0455、SD0453、SK0474等の掘削を再開する。サポート会林歴会長見学。

8月25日～8月26日 降雨のため、終日作業中止。

8月29日 北西区の出土物取り上げ。SH0455南東主柱穴の掘削を開始する。出土遺物が多く、掘削に時間がかかる。SH0471/75、SD0453、SD0477、SD0479等を掘削する。

8月30日 SH0455の理土を完掘する。後は柱穴、溝等の掘削を残すのみとなる。SD0453、SH0428/29貼床層、SH0471貼床層等を掘削する。SH0479未認定。

8月31日 各種豎穴住居内のピット、SH0455南辺周壁溝、SH0471等を掘削する。

9月1日～9月5日 台風の影響のため、終日作業中止。

9月6日 終日、水抜き作業を実施する。

9月7日 都合により、終日作業中止。

9月8日 南西区 SH0471/75及びピット、溝等の掘削を継続する。

9月9日 ピット掘削継続。最南端のSD0453部分の掘削に着手する。

SH0484、SD0488を掘削する。土層觀察用の柱穴撤去を開始する。

9月12日 砖の撤去継続。SH0455の北東主柱穴から盤状高杯等が出土し、黄色の理土のものは他よりも古い遺構だと判断していたことが証証される。SH0484南辺周壁溝、SD0453等を掘削する。

9月13日 砖の撤去継続。南西区の砖の撤去は完了するが、下部から多量の溝、ピット等が検出される。

9月14日 都合により、終日作業中止。

9月15日 砖の撤去継続。北西区が完了した後、中央の南北軸の掘削に着手する。

9月16日 南西区、北西区の砖の下面で検出した遺構の掘削を完了する。中央南北軸の撤去を継続する。一部、その下部の遺構の掘削にも着手する。

9月20日～9月21日 台風の影響のため、終日作業中止。

9月22日 終日、水抜き作業を実施する。

9月23日～9月25日 南西区の平面図作成。

9月26日 降雨のため、終日作業中止。

9月27日 砖の撤去、下面検出の遺構掘削を継続する。SK0474、SH0455南東主柱穴、SH0428等の出土遺物の取り上げ作業を行う。全体清掃を開始する。

9月28日 砖の撤去、砖下面検出の遺構掘削を継続する。全体清掃を完了する。

9月29日 砖の撤去、砖下面検出の遺構掘削を完了する。清掃後、各種遺構完掘状況の写真撮影を実施する。発掘用具等を搬出する。

本日にて、掘削作業が完了し、作業員を終了とする。

9月30日 砖の下面検出遺構の平面図を加筆する。併せて、レベリング作業を実施する。

10月2日 レベリング作業完了。本日にて、現地作業の全てを終了する。

第5次調査(620m²;平成24年6月25日～平成25年1月11日)

6月25日 重機搬入。表土除去開始。
6月26日 莊園場等の草刈、整地作業。
6月27日 重機手配できず、終日休業。
6月28日 表土除去再開。北東では表土直下にて地山面を確認する。いくつかの現代地割溝を確認。
6月29日 表土除去継続。東側から座標設置。
7月2日 作業員導入。北区から検出作業開始。いくつかの堅穴住居を検出。略図作成開始。
7月3日 降雨のため、終日休業。

7月4日 北区検出継続。北区より現代地割溝削除開始。
7月5日 降雨のため、終日休業。

7月6日 現代地割溝削除継続。午後より降雨のため休業。

7月9日 水抜き。東西方向の現在地割溝完掘。南北地割溝削除継続。

7月10日 SD0501からSH0506まで認定。SD0501 剥削開始。SH0504 墓土は2～3cmと浅い。北区は土砂の流出が激しく道構の依存状態がビックであることを再確認する。

7月11日 SH0502 剥削するも、明確な周壁溝を確認できず。

SD0501, SH0503, SH0506 剥削継続。午後より降雨のため休業。

7月12日 降雨のため、終日休業。

7月13日 都合により、終日休業。

7月17日 SH0502をほぼ完掘する。北区の中央に広がる黒色土(後のSH0507～SH0514)に十字ペルトを残し、剥削に着する。

7月18日 SH0502カマド?を剥削。カマドでないことを確認する。SH0504 内ビット剥削完了。中央部の黒色土よりに少なくとも6棟以上の堅穴住居が重複していることを確認する。

7月19日 SH0501カマド?を剥削。中央部の黒色土全体の撤去を完了し、概ね床面まで到達する。

7月20日 降雨のため、終日休業。

7月24日 SH0511～0514南側半分の周壁溝、ピット等を剥削開始。北西区西側にてSH0516～0518を認定。剥削。

7月25日 遺物出土状況等作成。レベリング。

7月26日 SH0511～14内ビット剥削。SH0519, SH0520認定。SD0521 剥削完了。SH0507周壁溝完掘後、ビット剥削に着手。

7月27日 SD0522～0526完掘。SH0516の下部にSH0527を認定。各種堅穴住居のビット剥削継続。

7月30日 SH0508周壁溝完掘。SH0507/15, SH0511～0514内ビット剥削継続。SH0527理土剥削完了。SD0528 剥削開始。

7月31日 SD0528完掘。SH0507/15, SH0511～0514内ビット剥削完了。

8月1日 都合により、終日休業。

8月2日 SH0517及びSH0527, SH0509の周壁溝、ビット剥削継続。

8月3日 SH0527, SH0508～0510内ビット剥削継続。平面図作成開始。

8月6日 平面図作成継続。

8月7日 本日にべルトを残し、北区の剥削が終了する。平面図作成継続。

8月8日 中区の東西現代地割溝の剥削に着手。上部は明らかに現代、下部は黄灰色のしまりのある埋土で中世までさかのぼる可能性がある。

8月9日 北区の全体清掃後、充填の写真撮影。現代地割溝削除継続。

8月10日 現代地割溝完掘後、中区全体の表土埋土の撤去。全体に黒褐色の土で埋められ、地山面は少ないことが判明する。

8月13～18日 盆休みとして、終日休業。

8月19日 午前中、現地説明会開催。午後から、学芸員実習受け入れ。検出、レベル設置、写真撮影等を行う。

8月20日 棚の土を伐採し、その周辺の表土を撤去する。SH埋土一括として、一段下げを実施。

8月21日 都合により、終日休業。

8月22日 SD0501の延長を確認し、剥削に着手する。中央南北ベルトに底を一段下げ。

8月23日 SD0501完掘。羽釜が出土し、中世の溝であることが明確となる。SD0501以東の1段下げ完了。ビットの剥削に着手。

8月24日 都合により、終日休業。

8月27日 SD0532認定し、剥削する。SD0501以西のSH埋土の剥削に着手する。

8月28日 降雨のため、中区の剥削を中断し、南区の跡草、検出作業を行なう。

8月29～30日 都合により、終日休業。

8月31日 午前中、白子遺楽俱楽部発掘体験受け入れ。中区南北ベルト西側の包含層剥削を行う。午後から、中央ベルト東側/SD0501以西のSH埋土剥削。

9月3日 降雨のため、終日休業。

9月4～7日 平面図作成実施。作業員休業。

9月10日 中央南北ベルト以西のSH埋土の剥削に着手。

9月11日 中区北西隅のSH埋土剥削と中央ベルト東側の剥削を再開。午後より、雷雨のため、休業をする。

9月12日 SH0533～SH0540を認定。SH0533/34, SH0537, SH0535/36理土剥削。SH0540周壁溝削除。各堅穴住居内のビット剥削。

9月13日 SH0533/34, SH0535/36貼土撤去後、下面検出のビット剥削。SH0537内ビット剥削完了。SD0543認定、剥削。SH0542理土撤去後、ビット剥削開始。

9月14日 SH0542, SH0533/34, SH0535/36の周壁溝、ピット剥削継続。SH0535/36排水溝で縦開式の高杯出土。

9月18日 降雨のため、終日休業。

9月19日 水抜き。SH0542ビット、溝等を剥削。SH0537埋土の残土を剥削。

9月20日 都合により、終日休業。

9月21日 SH0542東西ベルト南の剥削に着手。SH0536貼土層撤

Tab.1 磐城山遺跡の発掘調査履歴

調査 次数	調査 要因	調査 面積 (m ²)	調査 期間	調査 担当	概要報告書 / 報告書	調査概要	遺構 番号
プレ 1次	道路建設 (県道)	1,100	1993/5/11 ～ 1993/8/6	森川常厚	1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター	中世城館（西側に隣接する木田城跡）に係る堀状遺構を確認する。一部、竪穴住居や中世の土坑を検出する。	01～
第1次	道路建設	3,000	1997/9/12 ～ 1998/2/23	杉立正徳	杉立正徳 1998 「II.6.磐城山遺跡」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』V 鈴鹿市教育委員会	丘陵端部を寸断する環濠状の溝（山中式）を検出し、その西側で竪穴住居等を多數確認する。	01～
第2次	道路建設	2,000	1998/8/20 ～ 1999/1/22	岡田雅幸	岡田雅幸 2000 「V.7.磐城山遺跡（2次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第1号	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居を多數確認。古代の溝や掘立柱建物も確認される。柱穴から水晶出土。	01～
第3次	農地改良	740	2010/6/21 ～ 2011/3/31	田部剛士	田部剛士 2011 「IV.6.磐城山遺跡（第3次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第13号	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居を多數確認。古代の溝が南北にのびることを確認。	0301～
第4次	農地改良	315	2011/4/4 ～ 2011/10/2	田部剛士	田部剛士 2013 「III.1.磐城山遺跡（第4次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第14号	竪穴住居が弥生時代後期初期の竪穴住居まで遡ることが確認される。	0401～
第5次	農地改良	620	2012/6/25 ～ 2013/1/11	田部剛士	田部剛士 2014 「III.2.磐城山遺跡（第5次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第15号	丘陵北東端では遺構の残りが悪いものの、古墳時代後期の竪穴住居が多くなる。また、1次調査の環濠は丘陵北端では確認されない。	0501～
第6次	農地改良		2013/8/5 ～ 12月末予定	田部剛士	田部剛士 2014 予定 「磐城山遺跡（第6次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第16号	弥生時代を中心とした竪穴住居に加え、中世の土塙墓2基が確認された。	0601～
合計		7,775					

去後、下部のピットの掘削着手。SH0540 周壁溝掘削。SH0544 認定。

9月24日 SH0542 剥離剤。SH0535/36 埋土、貼床掘削。各竪穴住居内のピット掘削。

9月25日 SH0535/36 写真撮影。SH0545 埋土掘削。SH0537 内ピット掘削継続。

9月26日 都合により、終日休業。

9月27日 SH0535/36 の周壁溝、ピット掘削。SH0545 と SH0546 は同一の竪穴住居であることを確認する。ピット掘削継続。

9月28日 SH0545 周壁溝、ピット掘削。SH0535/36 の周壁溝、ピット完掘。

10月1日 水抜き。SH0545 埋土掘削後、ピット掘削開始。南区の調査に着手。SH0547、SH0548 を認定し、掘削を開始する。

10月2日 SH0545 剥離剤。SH0547 埋土掘削完了後、貼床層の撤去開始。SH0548 埋土掘削拡張。

10月3日 SH0545 完掘。SH0547 貼床撤去完了。SH0548 埋土掘削完了。SH0549 周壁溝掘削完了。SK0550 掘削に着手。

10月4日 SH0547、SD0551、SH0552 周壁溝掘削。SK0550 完掘。

10月5日 都合により、終日休業。

10月9日 SH0551 埋土掘削完了後、貼床層、周壁溝掘削開始。下部に SH0557 が重複していることを確認する。SD0556、SD0558 掘

- 削開始。SD0551 完掘。
- 10月10日 SH0553 周壁溝、周辺ビット掘削完了後、SH0555 周壁溝削。SH0547/57 内の周壁溝、ビット、溝等の掘削に着手。
- 10月11日 SH0547/57、SH0551/53 内ビット掘削継続。南西区除草開始。
- 10月12日 都合により、終日休業。
- 10月15日 中区全体清掃後、南区のビット掘削継続。
- 10月16日 中区完掘の写真撮影。終了後、ベルト撤去開始。南区のビット掘削が完了。
- 10月17～18日 降雨のため、終日休業。
- 10月19日 西区現代地割溝削及び全体の遺構検出作業開始。
- 10月22日 西区検出完了。SH0559～SH0561 を認定。SH0559は黄褐色の埋土で八王子古宮式併行かと考える。他の遺構より切り合いでまずは先にする。現代地割溝削完了。西区の単独ビットの掘削に着手。南区ビットの残り、中区ベルト撤去継続。
- 10月23～29日 都合により、終日休業。
- 10月30日 水抜き。SH0559、SH0560、SH0562/63 等の埋土の掘削を開始する。
- 10月31日 SH0559 床面まで掘削完了。やはり八王子古宮式に併行する時期と確認する。SH0563 掘削完了。SD0568 認定。中世の土坑を判断する。SH0560/66 掘削継続。2種の窓穴住居が東西に重複しているようだが、判然しない。さらに、下部にはもう1棟別の窓穴住居があり、これを SH0566 とする。
- 11月1日 SH0559 ビット内掘削開始。SH0560/66 掘削。SK0568 完掘。SH0572 墓土剥削開始。
- 11月2日 SH0561 負床撤去。SH0572 墓土剥削完了後、周壁溝、ビットの掘削に着手。SH0560/66 周壁溝やビットの掘削継続。SH0559、SH0565、SH0569 完掘。
- 11月5日 SH0561 負床撤去。SH0565 掘削完了。SH0566 負床撤去完了後、ビット掘削。
- 11月6日 降雨のため、終日休業。
- 11月7日 水抜き。SH0566 負床撤去完了後、ビット掘削。SH0561 負床撤去継続。その他のビットの掘削着手。
- 11月8日 SH0561ベルト撤去。SH0566 負床撤去、ビット掘削継続。SH0560/66 掘削継続。
- 11月9日 都合により、終日休業。
- 11月12日 水抜き。西区残りのビット掘削。及び各種ベルト撤去開始。
- 11月13日 ベルト撤去、ビット掘削完了後、全体清掃。各種、完掘状況の写真撮影実施。
- 11月14日 都合により、終日休業。
- 11月15日 水抜き。中区土壟断面清掃。北区ベルト撤去開始。
- 11月16日 土壟断面図作成。
- 11月19日 水抜き。南区ビット遺物取り上げ。北区ベルト撤去継続。
- 11月20日 西区水抜き。シート、土糞袋等撤去。北区ベルト下部の溝やビットを掘削。
- 11月21日 都合により、終日休業。
- 11月22日 全体清掃。
- 11月23日 現地説明会実施。
- 11月26日 降雨のため、終日休業。
- 11月27日 中区、土壟断面のベルト撤去開始。
- 11月28日 中区ベルト撤去完了。本日にて遺構掘削を終了する。
- 11月29日 平面図作成。SH0559、SH0560/66 出土状況図作成。
- 11月30日 南区、西区の水抜き。発掘用具搬出。一時、作業中断。
- 1月9日 航空写真撮影のため、水抜き及び全体清掃開始。残していたシートや土糞袋を撤去する。
- 1月10日 全体清掃継続。
- 1月10日 南区、西区の各種完掘状況の写真撮影。
- 1月11日 航空写真撮影実施。本日にて、現地作業を終了する。

第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

磐城山遺跡は鈴鹿市木田町に所在する (Fig.1・2)。

木田町は、現在の行政地区では「河曲」地区と呼ばれている。その名が示すとおり、鈴鹿川が蛇行しながら東流して伊勢湾に注いでおり、過去、鈴鹿川が幾度も氾濫を繰り返していたことが想像される。この鈴鹿川の南部には神戸丘陵と呼ばれる低位段丘が東へ張り出しており、北部には高岡丘陵とよばれる中位段丘が発達している。

磐城山遺跡は、鈴鹿川の左岸の高岡丘陵上に位置する (Fig.2・3)。標高は海拔35 m前後で、緩やかに傾斜しながら南東方向に張り出している。周囲には同じような

舌状の丘陵地形が点在し、その上は概ね全てが遺跡として利用されている。

2 歴史的環境

この河曲地区では、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は少ない。旧石器時代では、高岡丘陵上の西ノ岡 A遺跡等で、ナイフ形石器や縦長のチャート製剝片が出土している程度である。なお、磐城山遺跡の第3次調査では、三重県で初めての黒曜石製のナイフ形石器が出土している。縄文時代では、木田坂上遺跡において縄文時代晚期後半土器棺が2基見つかっている。

弥生時代になると河曲低地部の八重垣神社遺跡等において前期の流路跡が多数確認されている。中期後半以降では高岡^{たかおか}丘陵上に扇広^{おひら}遺跡、中尾山遺跡、境谷遺跡、寺山遺跡等の集落遺跡が多く分布するようになる(Fig.3)。

磐城山遺跡のように弥生時代後期を主体とする遺跡は南山遺跡や一反通^{いちらん}遺跡程度であるが、やや後出して成立する青谷遺跡といった遺跡も確認される。

古墳時代初頭になると丘陵上の集落は衰退し、低地部の八重垣神社遺跡等で集落や墓域が認められるようになる。古墳としては、前方後円墳である寺山1号墳や富士山1号墳、円墳と推定される大蛇山1号墳等を中心に、小規模な古墳が点在している。集落跡としては境谷遺跡や磐城山遺跡で多く確認される。

また、古には伊勢国^{いせくに}河曲郡^{かきょくぐん}が存在しており、現在の河曲地区がその地と推定されている。『和名類聚抄』による河曲郡には神戸郷をはじめ、駅家郷、川瀬郷等の八郷があつたとされている。この内、木田町は駅家郷に該当すると考えられている。なお、この河曲郡は古代豪族の大鹿氏の本貫地とされている。『日本書紀』敏達天皇四年(575)の条によると、「采女伊勢大鹿の首小熊の娘の名子夫人といひ、太姬皇后と難手姫皇后とを生む」とある。さらに、「古事記」と「日本書紀」の雄略天皇の条には、「伊勢国三重の采女」や「伊勢の采女」とも出てきており、これが大鹿一族だと考えられ、古代においてかなり有力な豪族であったことが窺える。



Fig.1 鈴鹿市の位置 ($S=1/2,000,000$)

それを査証するように、木田町の北に隣接する国分町には、白鳳寺院とを考えられている南浦遺跡を含め、古代河曲郡衙と推定される孤塚遺跡や、伊勢国の國分二寺のような重要な施設が置かれ、その一部が発掘されている。おそらく、周辺には『延喜式』で十疋の駅馬や五疋の伝馬が配置されていたという河曲駅や、壬申の乱の際に大海人皇子が立ち寄った「川曲の坂下」があったものと推

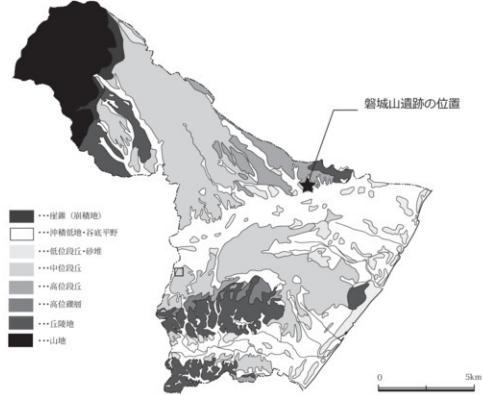


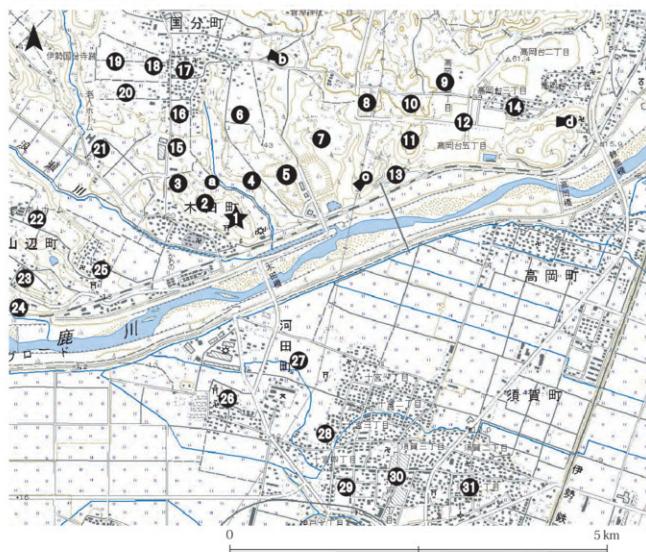
Fig.2 鈴鹿市の地質 ($S=1/200,000$)

定される。

さらに、このような重要な施設は古代官道とも無関係であったことは考えにくく、近くに東海道が縱貫していたものと考えられる。近年、平田本町所在の平田遺跡において、幅9mの直線道路が検出されており、年代観が定まらないものの、国府町所在の推定伊勢国府跡と国分寺をあたかも直線的に結ぶかのような位置関係にあって、注目されている。

また、木田町周辺では、平安時代以降の遺跡も確認されている。特に国分北遺跡は、道路状遺構に特有とされる波板状凸凹痕や道路側溝と思われる溝が110m以上確認される等、平安時代頃まで道路が走っており、交通の要衝であったようである。

また、鎌倉時代の記録によると、源頼朝の命によって地頭御家人で駅家雜事の課役を負担していない者の目録を提出させているが、これを担当したのが「大鹿俊光」や「大鹿兼重」、「大鹿国忠」なる人物達であった。このことから、大庭氏が中世においても在地官人として活躍していたことが分かるが、丘陵上には鎌倉時代の大規模な遺跡は不明瞭であり、どちらかというと中世後半以降のものが多い。室町時代以降は、高岡丘陵上にも多くの山城が築城されるが、丘陵東端には織田信長進行時の最前線となつた高岡城が存在している。調査地の西側に隣接して登録されている木田城跡も無関係ではなかったものと考えられる。



1 翁城山遺跡 2 木田城跡 3 木田坂上遺跡 4 沖ノ坂遺跡 5 中尾山遺跡 6 国分東遺跡 7 境谷遺跡 8 寺山遺跡 9 扇広遺跡
10 西ノ岡遺跡 11 西ノ岡B遺跡 12 東ノ岡遺跡 13 寺田山遺跡 14 青谷遺跡 15 南浦遺跡 16 国分南遺跡 17 国分遺跡（推定伊勢國分尼寺跡）18 仁西遺跡 19 伊勢國分寺跡 20 狐塚遺跡（推定河曲郡都跡）21 間瀬口遺跡 22 派遺跡 23 口山遺跡
24 南山遺跡 25 山辺東遺跡 26 河田宮ノ北遺跡 27 八重垣神社遺跡 28 宮ノ前遺跡 29 十宮古里遺跡 30 莢町遺跡 31 須賀遺跡

a 大鹿山1号墳 b 富士山1号墳 c 寺田山1号墳 d 高岡山9号墳

Fig.3 遺跡の位置 (S=1/50,000)

第Ⅲ章 調査の方法

1 調査区

発掘調査は平成 22 年度の第 3 次調査から継続して行っている。そこで、第 3 次調査区の北西側に隣接して第 4 次調査区を設け、第 3 次調査区の北東側に第 5 次調査区を用意した。第 4 次調査区の対象地は、鈴鹿市木田町字上條 2272, 2266-1 の一部、2265 の一部となる。調査区は概ね 100 m² 前後を 1 区画となる程度に分割し、終了後に次を拡張するようにして進めた結果、第 4 次調査区は約 315 m²、第 5 次調査区は 620 m² を調査した。

2 地区割り

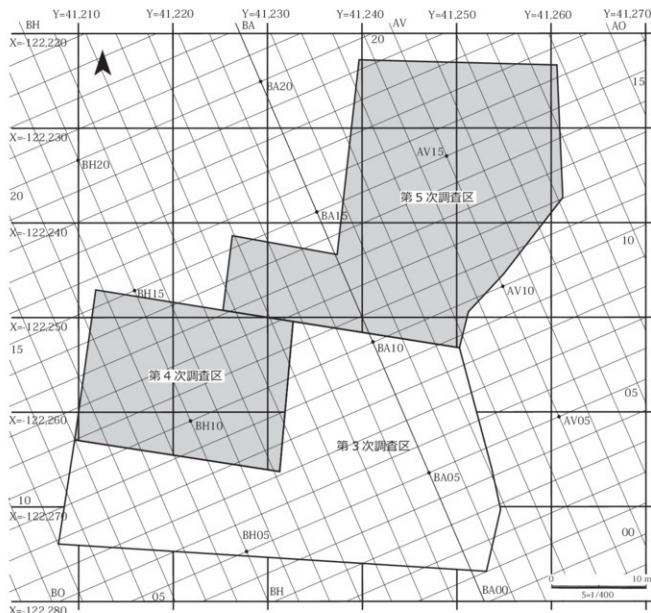


Fig.4 調査区の地区割り (S=1/400)

調査地内においては、国土座標第VI系に基づいて、3m四方の升目（以下、グリッドとする）を設定したはずであったが、数値に齟齬があることが判明し、以後、任意座標とした。なお、平成 25 年度の調査からは、国土座標に基づいてグリッドを設定している。

任意座標は、磐城山遺跡の存在する丘陵を被覆するように配慮し、調査を南東から進める都合上、南東隅を基点として記号・番号を割り振った。南北方向は 2 衝の算用数字を与え、東西にはアルファベットの 2 文字組み合わせて、各グリッドの呼称とした (Fig.4)。調査はこの任意座標を基としてを行い、最終的に国土座標と合成して Fig.4 に示した。

3 遺構番号

調査範囲が広大なため、原則として遺構番号は通し番号とし、調査の進行順に番号を付することとした。本書では、調査時の番号をそのまま利用することとする。

なお、遺構の表記としてはSH0401のように表す。これは、下記の性格を示す記号と調査次数を表す「04」、調査段階で付与した個別識別番号「01」からの連番の組み合わせ、という意味である。数字の前に表記したアルファベットの内容は下記の通りである。

また、一部にSD03136のように「03」と表記しているものについては、第3次調査から続く一連の遺構といふ意味であるが、本書に掲載しているものは第4次調査区で確認したものである。

SH … 穴穴住居 SD …溝 SK …土坑

SX …性格不明のもの pit・P …柱穴・ビット

* 図中は調査次数を省略した

4 基本順序

調査区内において 10 ~ 20cm の表土の直下で、黒褐色系の遺構埋土か黄褐色砂礫層の地山が存在する。4 次調査区は表土直下に黒褐色の遺構埋土で覆われており、遺構密度が濃いことがわかった。かつ、その深さも深い所で 50cm 以上に及び、良好な遺存状態であった。

一方、第5次調査区の北に進むにつれて、表土の直下に地山が確認されることが多くなり、遺構の密度が希薄となる。ちょうど、第5次調査区の北側で丘陵が急激に落ち込んでいることから、地形的に土砂の流れが激しいことが推測されるが、これを証するように検出面からの遺構の深さも 5 ~ 10cm 程度で浅くなっている。

なお、地山とした黄褐色砂礫層は、第4次調査区の辺りで 0.7 m 程度あり、その下部には人頭大の塊を多量に含むにぶい黄灰色の層が、約 2 m 堆積している。この礫層は、水沢古崩場状地に該当しよう。

第IV章 検出遺構

今回の調査では、多数の遺構が確認された。多くは竪穴住居で、それに付随する溝やビット等がある。これらの遺構が重複して複雑に重複しており、県内でも有数の遺構密度となっている (Fig.5)。

第4次調査区では、竪穴住居 22 棟以上 (第3次調査区にまたがるものも 1 棟として数えている)、掘立柱建物 1 棟、土塁 3 基の他、多数の溝、柱穴を検出している (Fig.6)。遺構の重複が著しく煩雑であるが、内容としては、中世後半から近代の区画溝、古代の直線的な溝と土坑、5 ~ 6 世紀と八王子古宮式併行～廻間式の集落址といふことになる。

第5次調査では、竪穴住居 43 棟以上、土坑 1 基の他、溝、ビットを検出した (Fig.7)。第4次調査区とほぼ同様の内容はあるが、弥生時代の竪穴住居が少なく、古墳時代が多いという差異が認められる。

以下、比較的まとまつ内容の遺物を出土した遺構を中心に解説するが、ある程度の遺構の単位をまとめて記述する。これは、重複している遺構を同時に捕獲しているものが多く、出土遺物が混在している可能性があるためである。

1 竪穴住居・土坑

SK0474・SH0471/75/88・SH0484 (Fig.8)

SK0474 は調査区の南西端の BJ・BK11 付近で検出した。直径 4 m 前後の円形で、0.4 m 程度の深さに 2 ~ 3

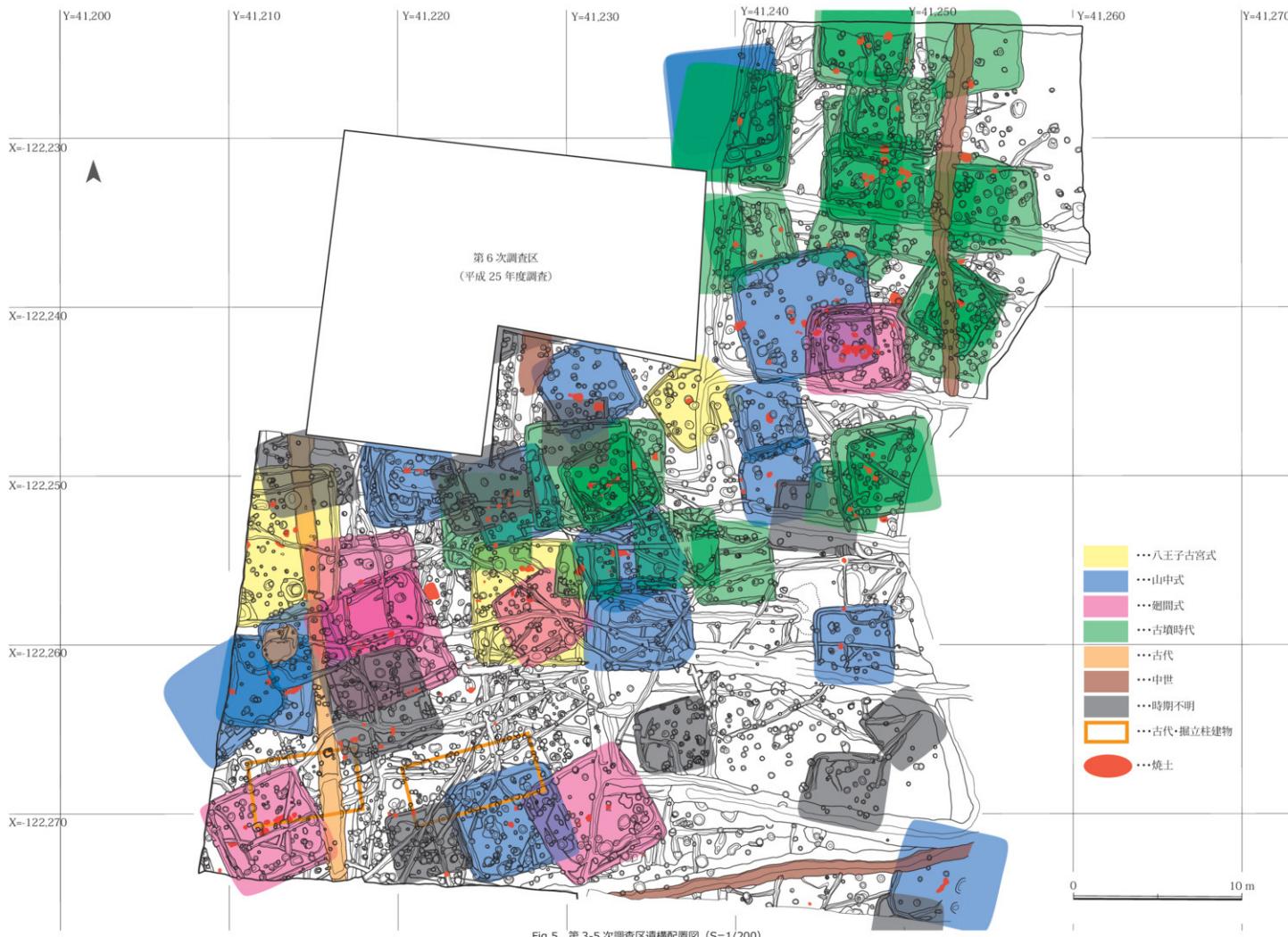
段程度緩やかに落ち込む。埋土は単層であったが、基底面には 7 世紀頃の須恵器のハソウ等が比較的良好な状態で出土した。

SH0471/75/88 は、主に BK10 で検出した。第3次調査で確認していた SH0319 と SH0310/93 の延長に該当する。第3次調査区では SH0319 → SH0393 → SH0310 の順で新しくなることを確認しており、SH0488 = SH0319、SH0393 = SH0375、SH0310 = SH0471 となる。

SH0471/75 の規模は判然としないが、上下 2 面あることは確実で、上部の SH0471 と下部の SH0475 の間に黄褐色砂礫混シルト層の貼床層が存在している。SH0488 については南北が 5.4 m あることが確認され、東西も概ね 5.5 m 程度であることが推測できる。火廻はそれぞれ床面の中央付近で、地床が確認された。

SH0471/75/88 の出土遺物には、弥生土器や土師器、須恵器等があり、少なくとも上部の SH0571 が 5 ~ 6 世紀の遺構であった可能性が高い。なお、SH0488 は弥生土器の小片のみである。これらのことから、SH0571 は古墳時代、SH0488 は弥生時代後期頃の建物と考えられる。SH0475 についても詳細な時期比定が困難であるが、位置関係から SH0471 に建て替えられた可能性が高く、古墳時代の建物であった蓋然性が高い。

SH0484 は SK0474 の下部で検出した。東西 4.9 m、南北 4.5 m を測り、やや小規模である。著しく重複するが、



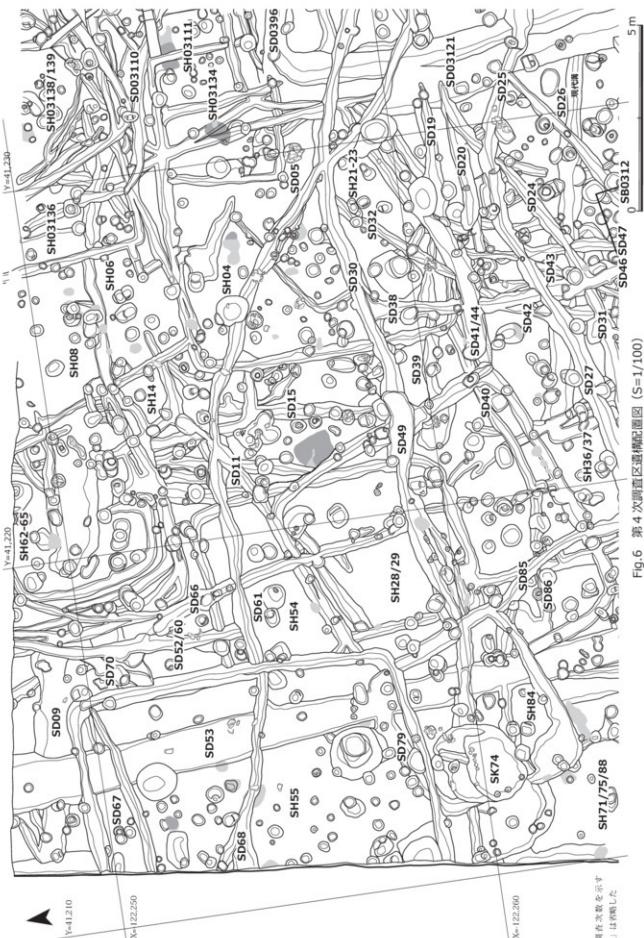


Fig.6 第4次調査区遭構配置図 (S=1/100)

7世紀代のSD0453やSK0474、古墳時代のSH0471/75よりも古く、廻間式期のSH0454、SH0428/29より新しい。なお、北辺の周壁溝はSD0479と認識して調査したが、本来は1棟の竪穴住居である。火爐は確認できなかった。

出土遺物には弥生土器や須恵器等があるが、須恵器はおそらくSK0474、SD0453、SH0471/75、SH0488等からの混在であり、廻間式頃の竪穴住居であろう。

SH0428/29・SH0454 (Fig.8)

第4次調査区のほぼ中央、BH・BL10・11辺りで検出した。北側にSH0454があり、南側にSH0428/29がある。新旧関係はSH0454が古く、SH0428が新しい。

なお、SH0428は同一箇所で2棟の建て直しがあり、このうちの古い方をSH0429とした。そのため、SH0454→SH0429→SH0428と新しくなる。

SH0454の西辺周壁溝はSD0453の直ぐ西側にあったが、SH0455掘削時に消滅してしまっている。その周壁溝からは内湾する土師器の高杯脚部が出土していることを確認しており、廻間式期の竪穴住居だと理解できる。

また、SH0428/29は床面直上においても、廻間式の土師器の壺や高杯が出土しており、SH0454の直後の竪穴住居だと考えられる。なお、SH0428の周壁溝と竪穴住居の掘り方の間には、直径15cm程度の小ビットが1.3~1.5m間隔で並んでおり、第3次調査で確認したSH0307/12と同じ構造を呈していたようである。

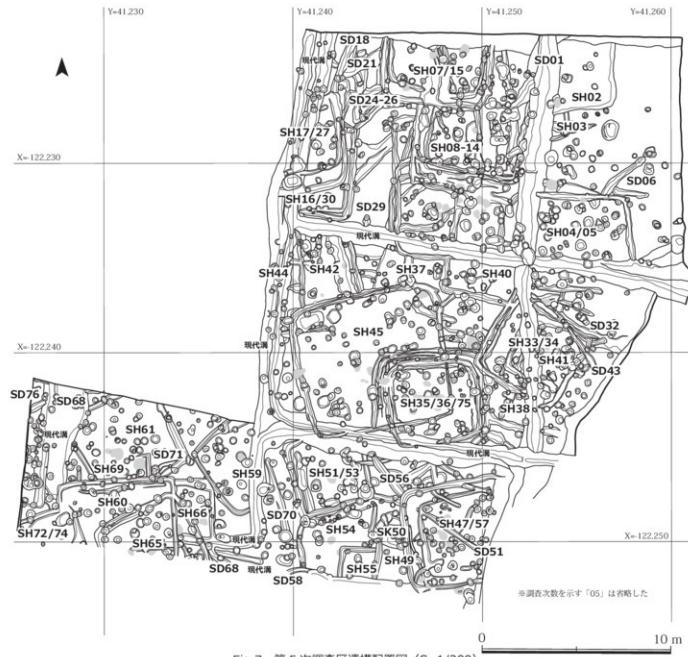


Fig.7 第5次調査区遺構配置図 (S=1/200)

SH03134・SH0421/22/23・SH0404 (Fig.9)

SH03134は第4次調査区東端のBD10付近で検出した。第3次調査区からの延長であり、東西3.8m、南北3.4mと小規模である。東西の柱間の距離も1.2mと狭い。西側柱間に中央に床跡を検出した。焼土は小規模な建物面積の割に大きく、よく焼きしまっていた。出土遺物は少ないので土師器や須恵器があり、概ね6世紀頃の堅穴住居だと考えられる。

SH0421/22/23は第4次調査区の南東端のBE09付近で確認した。当初、溝が3条重なっているものと考えていたが、整理段階で南辺周壁溝となることが判明した。時期不明の堅穴住居として調査したSH0445が同一の遺構となる。廻間式の高杯が出土していることから、その頃の建物と考えられる。

SK0474・SH0471/75/88・SH0484・SH0428/29・SH0454

SH0404は第4次調査区の東側、BD・BE・BFの09～11で検出した。東西、南北とも7.5mあり、56m以上の床面積をもつ。他の堅穴住居や溝等との重複が著しいが、SD0405等多くの遺構が先行する。埋土はにぶい黄灰色シルト層であり、山中式以降の遺構埋土が黒色を基調とするに対照的であった。床面にて焼土をいくつか検出しているが、中央のものやその北側にあるものが該当しよう。主柱穴は4ヶ所で確認している。いずれも直径0.6～0.8m、床面からの深さ0.8mと、深く大きい。特に、南西の主柱穴P04171からは甕や高杯等が比較的まとまって出土した。また、南辺周壁溝の中央付近で土坑を1基確認している。床面直上で盤状高杯の杯部が出土していること等から、八王子古宮式併行で遡る可能性が高い。

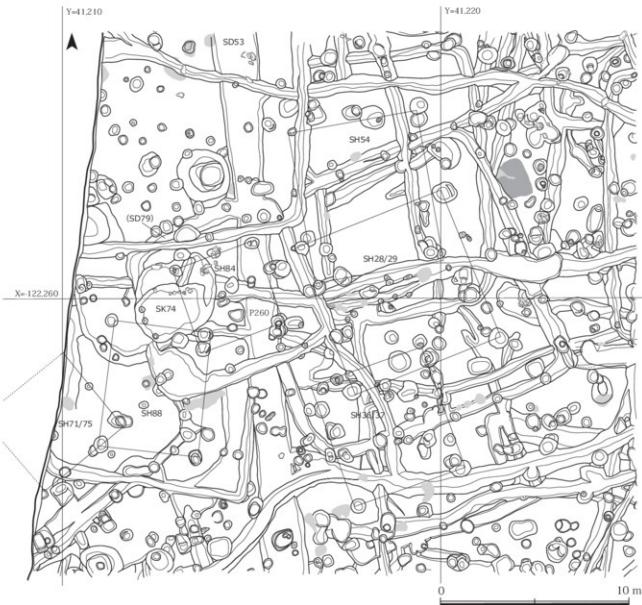


Fig.8 SK0474・SH0471/75/88・SH0484・SH0428/29・SH0454 平面図 (S=1/100)

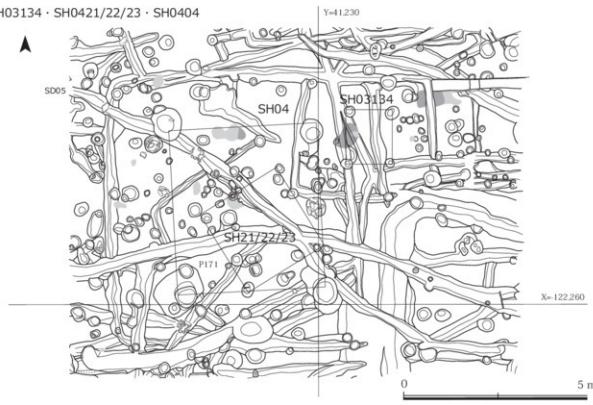


Fig.9 SH03134・SH0421/22/23・SH0404 平面図 (S=1/100)

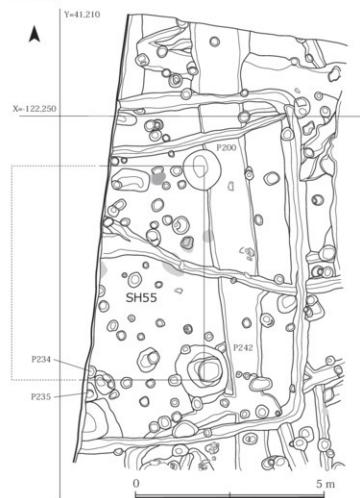


Fig.10 SH0455 平面図 (S=1/100)

SH0455/51/56 (Fig.10・11)

SH0455は第4次調査区の北西側。BH～BKの12～14区で検出した。東西は調査区外へと続くが6m以上は存在し、南北も9.2mある。ちょうど、南辺周壁溝沿いに土坑が設けられており、ここを建物の中心軸と考えた場合、東西規模は12m近い規模を誇ることとなる。それを査証するかのように、主柱穴は直径1.0～1.3m、床面からの深さ0.8～0.9mと、極めて深く大きい。特に、南東の主柱穴P04242からは土器が一括出土しており、建物の廃絶時期を知る絶好の手掛かりとなる。

SH0455の床面はかなり深く掘り込まれており、重複する上部の遺構SH0451, SH0456等の基底面が及んでいない。そのため、SH0455の床面で検出した焼土について概ねSH0455に付随するものと判断される。埋土中にぶい黄色を呈し、山中式期以降の埋土とは一見して異なっていた。

出土遺物には弥生土器の壺、甕、高杯等がある。特に、南東主柱穴P04242から出土した高杯の形状等から、八王子古式併行～山中I式頃まで遡ることは間違いない。

SH0462-65 (Fig.12)

SH0462-65は第4次調査区の北端中央、BF・BG12～14で検出した。北側が調査区外であるが、東側が古墳時代のSH0409、中世後半のSD0409等によって破壊されているため、詳細な規模等は不明である。およそ東西、南北とも6m程度であったと推定される。

なお、SH0462からSH0465は一つの遺構として掘削してしまったために、埋土の遺物を混在して取り上げてしまった。ただし、床面で検出した周壁溝から、少なくとも4回の建て替えが想定されたので、東から順にSH0462からSH0465とした。また、堅穴住居とは別の溝であるSD0466やSD0452/60等とも重複しており、その関係は古い方からSH0463→SH0464→SH0465→SD0466、SD0452/60→SH0462となる。

建物内部では、床面の中央付近で地床かが2ヶ所認められる。柱穴は4本構造であり、ほぼ同じ場所で4回以上の建て替えが繰り返されている。

出土遺物はそれほど目立つものはないが、弥生時代後期の土器に加え、軽石や砥石等が出土している。一部、柱穴等からは須恵器の出土も認められるが、弥生時代後期頃の堅穴住居だと考えられる。

SH03111・SH03142 (Fig.13)

SH03111は第4次調査区の東端のBC・BDの10・11区で検出した。第3次調査区からの延長であり、主に西側の周壁溝と北西の主柱穴を確認したにとどまる。この結果から、東西に5.8mの規模をもつことが確認された。

周辺において、最も下部にある遺構であり、弥生土器が出土することから、弥生時代後期の建物と判断できる。

SH03142はSH03111の南、BC9～10等で検出した。大部分は第3次調査区に該当するため、西側の周壁溝のみを検出し、東西規模が6.2m程度となることが判明した。

SH0455 南東主柱穴 P04242

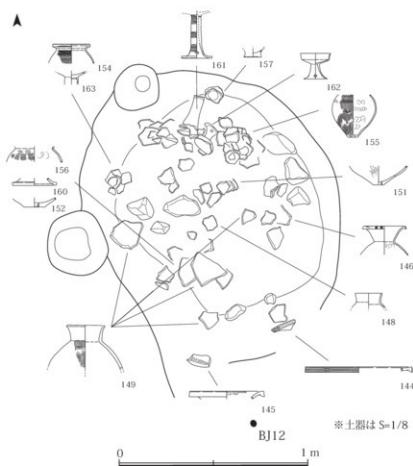


Fig.11 P04242 遺物出土状況図 (S=1/20 · 1/8)

SH0462-65

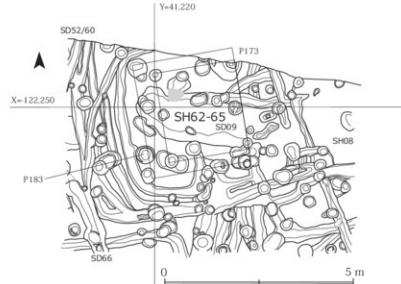


Fig.12 SH0462-65 平面図 (S=1/100)

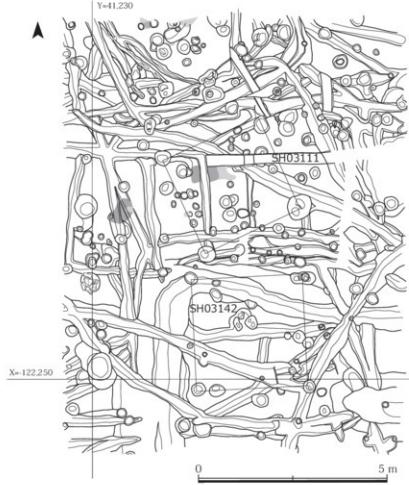


Fig.13 SH03111・SH03142 平面図 (S=1/100)

住居だと考えられる。

SH0410/14 (Fig.14)

SH0410/14は調査区の中央北側、BE・BF12～13区で検出した。上部にSH0406、SH0408等が重複していたため、認識したのが床面まで掘削した段階であり、東から北側へ折れる溝をSD0410、南辺をSD0414として調査してしまっている。東西規模は不確定であるが5m前後で、南北は4.7mある。北西隅が調査区外に当たると考えられ、北西以外の3ヶ所で主柱穴を確認している。

ちょうど、周壁溝の南西隅から南西方向へと溝SD0411が続いており、SH0428/29の北東隅と重複している。SD0411は比較的深く、SH0410との接合部分の上部には黄褐色砂礫混じりシルト層で覆われており、一時期に暗渠状に利用されていたことが確認できている。

出土遺物には弥生土器があり、その特徴から山中式頃の竪穴住居だと考えられる。

SH0406=SH0572/74・SH0408 (Fig.14)

SH0406は第4次調査区中央の北寄り、BE11～13等で検出した。大部分が古墳時代のSH0408やSH03136と重複しており、遺存状態はよくなかった。規模は、東西3.3m、南北5.0m程度などと確認できた。主柱穴は4ヶ所で確認しており、その中央に地床炉をもつ。おそらく、SH0408北東主柱穴によって破壊されている焼土等が該当しう。

なお、第5次調査でも、その延長をSH0572/74として確認している。第5次調査では2棟の重複と認識できただが、第4次調査時には見落としている。

SH0408は、同じく調査区中央北寄り、BE・BFの11～13区等で検出した。東側を明確に確認することができなかつたが、5～6m程度、南北5.8mを測る。床面中央には、地床炉と考えられる焼土を検出している。

SH0406からは弥生土器を中心とした遺物が出土している。このため、SH0406=SH0572/74は弥生時代後期後半の竪穴住居だと考えられる。一方、SH0408は土師器、須恵器等が出土することから、5～6世紀頃の竪穴

SH03136=SH0566・SH0560・SH03138/139=SH0565 (Fig.14)

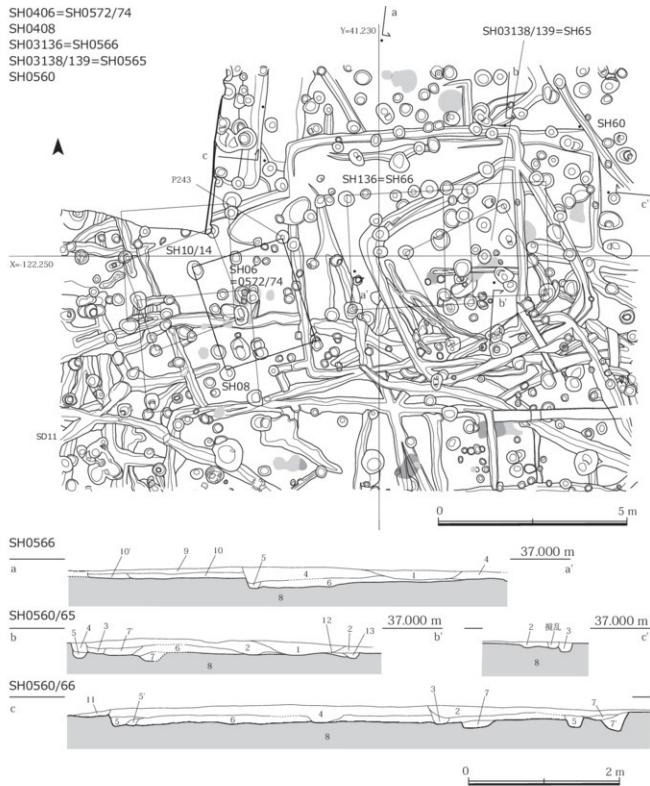
SH03136=SH0566は第4次調査区の北東隅、BC・BDの11・12区等で検出した。第3次調査区（SH03136）や第5次調査区（SH0566）にまたがり、南北5.5m、東西5.1mの規模となる。SH03138/139=SH0565と重複するが、SH03136の方が古い。中央付近で地床炉を検出した。

SH0560も同様に、調査区の北東隅のBB・BCの11・12区付近で検出した。第3次調査区（SH03138/139）や第5次調査区（SH0565）にまたがり、一辺が5m前後ある。SH03136=SH0566に後出す。床面中央付近には地床炉を確認している。

これら建物の中央にSH03138/139=SH0565がある。東西5.2m、南北4.9m程度となり、中央に地床炉をもつ。SH03136=SH0566、SH0560と重複するが、先後関係は十分に把握できなかつた。

いずれの竪穴住居からも土師器や須恵器が出土しており、5～6世紀頃の竪穴住居だと考えられる。

SH0406=SH0572/74
 SH0408
 SH03136=SH0566
 SH03138/139=SH0565
 SH0560



- 1 岩代溝7帶土 しにじく黄褐色砂質層岩質 10YR4/3 しまりありなし、粘性なし
 2 SH0560 墓碑 黒褐色砂質層シルト層 7.5YR3/2 しまりあり、粘性あり、炭化物、
土塊あり、堆土を含む
 3 SH0560 墓碑 黑褐色砂質層シルト層 7.5YR3/1 しまりあり、粘性あり、土塊あり
 4 SH0560 墓碑 黑褐色砂質層シルト層 10YR3/1 しまりあり、粘性あり、炭化物、
土塊を含む
 5 SH0560 墓碑 黑褐色砂質層シルト層 10YR3/1 しまりあり、粘性あり、土塊を含む
 5' 5層と共に
 6 SH0560 墓床土 4層(黄褐色)を含む黄褐色層 7.5YR4/6 しまりあり、よく繋けしまる、
僅かに土塊層を含む
 6' 6層に黄褐色層ブロックがほとんど入らない選
- 7 SH0565 墓壁 黄褐色砂質混シルト層 7.5YR3/3 しまり、粘性あり、土塊片を含む
 7' 7層と共に
 8 地山 黑褐色砂質混シルト層 7.5YR4/6 しまりあり、粘性ややあり
 9 SH0562 墓土 黑褐色砂質混シルト層 しまりあり、粘性あり、炭化物を含む
 10 SH0561 墓土 黑褐色と黄褐色の層互層 しまりあり、粘性ややあり
 10' 10層に黒褐色の層じのがない
 11 SD0575 墓土 燐
 12 黒褐色砂質混シルト層 5YR4/6 しまりあり、よく繋けしまる、
地山(8層)が黄色
 13 黑褐色砂質混シルト層 10YR2/3 しまりあり、粘性ややあり

Fig.14 SH0406 · SH0408 · SH03136 · SH03138/139 · SH0560 平面・断面図 (S=1/100 · 1/50)

SH0561・SH0569 (Fig.15)

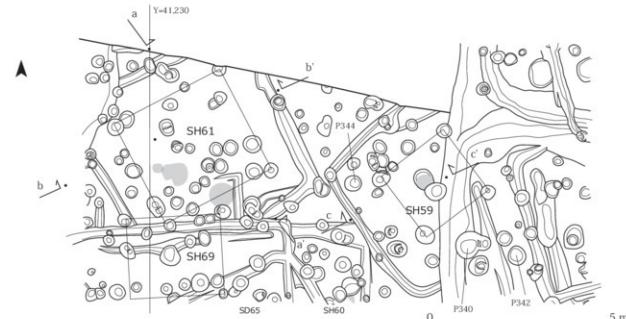
SH0561は第5次調査区の西側、BB・BCの13～15区で検出した。南側でSH0569と重複するがSH0561の方が古い。北東隅は調査区外であるが、東西、南北とも5.3m程度の規模となる。ほぼ床面まで削平されており、埋土はほとんどなく、表土直下の床面中央で焼土を検出した。

SH0569はBC13区付近で検出した。SH0561よりも

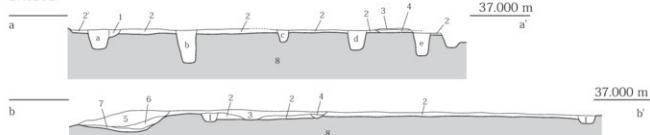
新しい。東西は4.0mあるが、南北規模はSH0566と重複しているため不明である。SH0566との新旧関係は明らかにすることはできなかった。

いずれも遺物の出土量が少なく時期比定は困難であるが、SH0561は弥生土器のみが出土していることから、弥生時代の建物だと考えられる。また、SH0569は埋土の様子から古墳時代の可能性が高い。

SH0561・SH0569・SH0559



SH0561



- | | | | |
|--------------|---|-------------|------------------------------------|
| 1 SH0561 周壁溝 | 褐色赤砂礫混シルト層 10YR4/1 しまりあり、粘性ややあり | 5 SH0575 壁土 | 暗褐色赤砂礫混シルト層 10YR2/3 しまりややあり、粘性ややあり |
| 2 SH0561 亂れ層 | 赤褐色の地に白い塊状ブロックを含む層 じりりあり、粘性あり | 6 " | 同じ褐色赤砂混シルト層 10YR4/1 しまりあり、粘性あり、均質 |
| 3 SH0562 壁土 | 黒褐色赤砂混シルト層 10YR3/1 に黄褐色ブロックを含むやや不規則な順序 しまりあり、粘性あり | 7 " | 黒褐色赤砂混シルト層 10YR2/2 しまり、粘性どもあり |
| 4 SH0562 周壁溝 | 黑色砂礫混シルト層 10YR2/1 しまり、粘性強い、炭酸物を少量含む | 8 地山 | 赤褐色砂礫混シルト層 5YR4/8 しまり、粘性どもあり |

SH0559



- | | | | |
|--------------|--|-------------|-----------------------------------|
| 1 SH0559 壁土 | 暗オリーブ褐色砂礫混シルト層 2.5Y3/3 しまりあり、粘性あり。
土質片を含む | 2 SH0559 壁土 | 暗褐色砂礫混シルト層 5YR3/6 緩くしまる、粘性あまりなし。 |
| 2 SH0559 周壁溝 | 褐色砂礫混シルト層 7.5YR4/3 しまり、粘性あり、均質 | 3 SH0559 地床 | 暗褐色砂礫混シルト層 7.5YR3/3 しまり、粘性とともにあり。 |
| 3 SH0559 地床 | 暗褐色砂礫混シルト層 7.5YR3/3 しまり、粘性とともにあり。 | 5 地山 | 明褐色砂礫混シルト層 7.5YR4/6 しまりあり、粘性ややあり |

Fig.15 SH0561・SH0569・SH0559 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

SH0559 (Fig.15・16)

SH0559は第5次調査区の南側中央、BA12・13区で検出した。埋土はにびい黄褐色で、他の古墳時代や山中式から變間式の遺構の埋土とは一見して異なっていた。

東側半分は現代の地区割りによって1段低くなっているために失われてしまっているが、南北は4.8m前後ある。4本箇所の主柱穴が確認され、中央に焼土、南辺中央に貯藏穴と想定される土坑が確認された。

西側で遺物が比較的多く出土しており、盤状高杯や長頸壺、砥石など多様な遺物が出土した。これらの特徴から八王子古宮式併行の建物だと考えられる。

SH0551/53・SH0554 (Fig.17)

SH0551/53は第5次調査区の南側中央付近、AY・AZの10・11区で検出した。2棟が重複するが、西側を

SH0551、東側をSH0553とした。SH0553が古く、SH0551が新しい。東西、南北とも4.2m前後で、やや小型の建物である。火廻として床面の中央で地床柱を検出した。

SH0554はSH0551/53の南側、AZ10周辺で検出した。南側は現代の地割溝によって削平される。東辺は明確でなかった。床面中央にて2箇所の地床柱を検出した。

出土遺物が少ないため時期比定が困難であるが、弥生土器のみで古められていることから、概ね弥生時代の堅穴住居だと考えられる。

SH0547/57・SH0549・SK0550 (Fig.18)

SH0547/57は第5次調査区の南東端、AW～AYの9・10区で検出した。2棟以上が重複するが、外側をSH0547、内側をSH0557とした。SH0557が古く、

SH0559

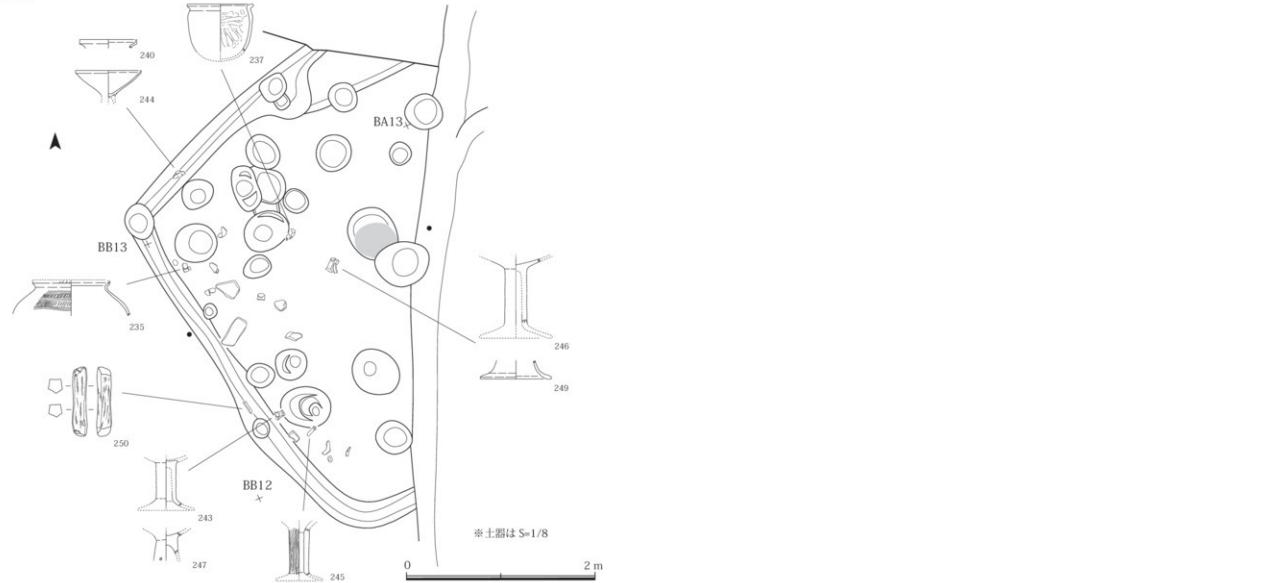


Fig.16 SH0559 遺物出土状況図 (S=1/40・1/8)

SH0551/53・SH0554

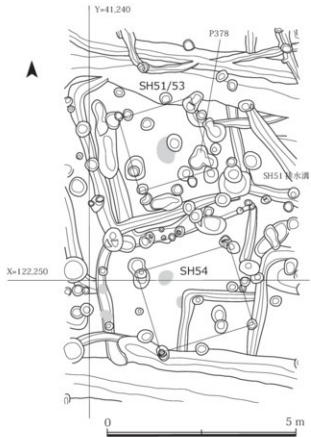


Fig.17 SH0551/53・SH0554 平面図 (S=1/100)

SH0547/57・SH0549・SK0550

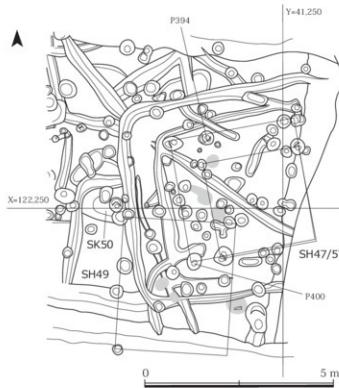


Fig.18 SH0547/57・SH0549・SK0550 平面図 (S=1/100)

SH0547 が新しい。

SH0547 は東西規模が判然としないが 6 m 弱で、南北が 5.6 m ある。SH0557 は東西 5 m 前後、南北 4.2 m の規模となる。いずれも須恵器や土師器を含み、5 ~ 6 世紀頃の建物と考えられる。なお、滑石製の石製模造品が出土している点は注目される。

SH0449 は SH0547/57 の南西、AY9・10 区で検出した。表土直下で北西隅を確認したのみであるため、規模等の詳細は不明である。出土遺物も乏しく、帰属時期ははっきりとしない。

SK0550 は SH0449 の北辺周壁溝と重なる。AY10 区で検出した単独の土坑だと理解した。1.8 m 程度の不整形を呈す。土師器の高杯などが出土しており、5 世紀頃の遺構だと判断できる。

SH0545 (Fig.19)

SH0545 は第 5 次調査区の中央、AW ~ AY の 12 ~ 14 区で検出した。東西 8.1 m、南北 7.5 m もの規模を誇り、床面積は 60 n² もある。磐城山遺跡の中でも有数の規模である。

北西部で SH0542 や SH0544 と、北東部で SH0537 と、南東部にて SH0535/36 等と重複するが、いずれの建物よりも古く、床面中央にて複数の焼土を検出している。

検出面からの深さが 0.3 m 程度あったものの、土器の出土量は少ない。須恵器や土師器の混在もあるが、おそらく他の遺構からの混在で、弥生時代後期の建物であったと考えられる。

SH0535/36・SH0575 (Fig.19)

SH0535/36 は第 5 次調査区の中央付近、AW・AX の 11 ~ 13 区で検出した。2 棟の遺構番号しかつけていないが、周壁溝は 5 条以上確認していることから、実際には 5 棟以上の建て替えがあったものと推定される。外側の堅穴住居を SH0535 とし、内側を SH0536 として調査した。また、床面中央には焼土が広がっており、多少の高低差があることから、いくつかの建物の床面がほぼ同じ高さにあることが確認できた。

なお、SH0535/36 の上部には SH0575 が存在する。SH0575 からは須恵器や土師器、砥石が出土していることから、古墳時代の建物であることが明らかである。この SH0575 は SH0535/36 と一緒に括して掘削してしまったことから、取り上げ遺物は混在している。おそらく SH0535/36 は山中式から廻間式にかけての遺構であろう。

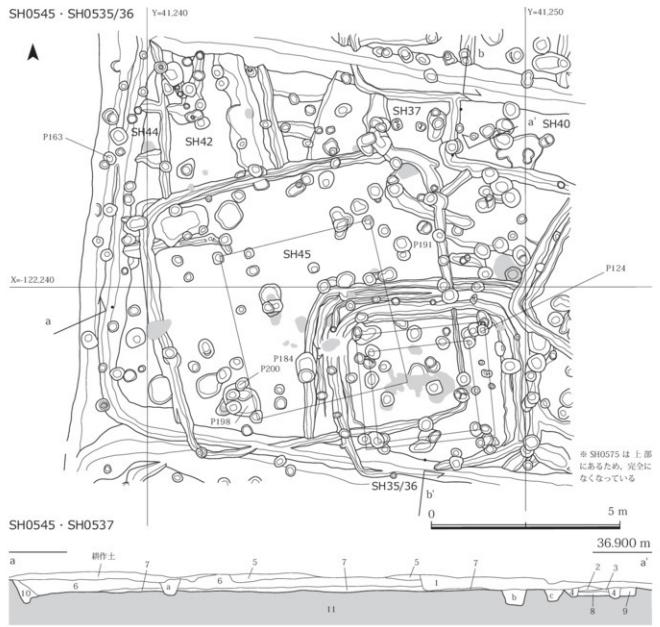


Fig.19 SH0545・SH0535/36 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

SH0542/44 (Fig.19)

SH0542/44は第5次調査区の中央西、AX・AYの14～15区で検出した。SH0545と重複するが、SH0542/44の方が新しい。南東部分を確認したが、大部分が調査区外へ続いているため、詳細は不明である。

出土遺物は少なく特定しがたいが、須恵器等が出土していることから、5～6世紀の建物と考えられる。

SH0533/34・SH0441・SH0538 (Fig.20)

SH0533/34は第5次調査区の東側、AU・AVの11～13区で検出した。ほぼ同一箇所に2棟が重複しており、西側の新しい建物をSH0533とし、東側の古い方を

SH0534とした。東側がより削平の影響が強かったが、東西、南北とも5.0mの規模となる。

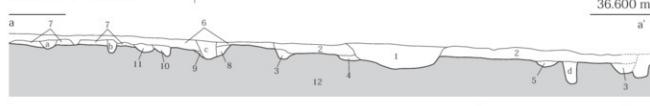
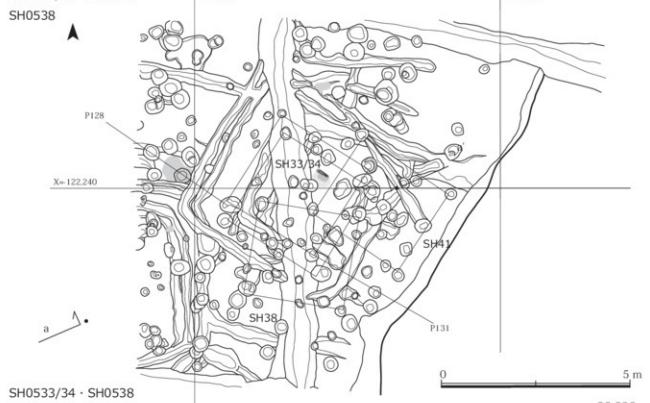
なお、SH0541はSH0533/34の床面まで下げた段階で検出しており、いずれの建物よりも先行する。他の遺構や後世の削平によって破壊が著しいため、規模や輪廻時期等は不詳である。

SH0538はSH0533/34の南側、AV11を中心して検出した。SH0533/34に先行する建物で、南西側を確認したにとどまる。規模の詳細は不明である。

いずれの建物も須恵器や土師器が出土しており、6世紀前後の遺構だと判断される。

SH0533/34・SH0541・

SH0538



- 1 SH0521 壁土
- 2 SH0533/34 壁土 黒褐色砂礫混シルト層 10YR3/2 しまり、粘性あり
- 3 SH0532 周壁溝 灰青色の砂礫シルト層 しまり、粘性あり、均質
- 4 SH0541 周壁溝 黒褐色砂礫混シルト層 10YR3/1 しまり、粘性あり
- 5 pH カ
6 SH0575 壁土 黒褐色砂礫混シルト層 10YR4/1 しまり、粘性あり、均質化物を含む
- 7 SH0536 壁土 黒褐色と黄褐色の層在した順序 しまりあり、粘性ややあり、一度に埋め戻したような順序
- 8 SH0535 北側周壁溝 にら・黄褐色砂礫混シルト層 10YR4/3 しまり、粘性あり、均質化物を含む
- 9 SH0535/36 周壁溝 にら・黄褐色砂礫混シルト層 10YR5/4 しまり、粘性あり
- 10 " " にら・黄褐色砂礫混シルト層 10YR5/2 しまり、粘性あり
- 11 " " 黑褐色の砂礫シルト層 10YR3/2 しまり、粘性あり
- 12 地山 明褐色の砂礫混シルト層 7.5YR5/6 しまりあり、粘性あり

Fig.20 SH0533/34・SH0441・SH0538 平面・断面図 (S=1/100・1/50)

SH0517/27・SH0516/30 (Fig.21)

SH0517/27は第5次調査区の北側、AW・AXの16・17区で検出した。2棟が重複しており、北側をSH0517、南側をSH0527とした。さらに南側でSH0516/30と重複しており、これらに先行する堅穴住居である。西側は調査区外であるが、SH0527の南北は5.0mある。SH0517の南北は不明である。SH0527の北東隅には溝SD0518が連結しており、SH0517も溝SD0521が該当する可能性がある。また、両堅穴住居とも南辺の中央付近に貯蔵穴らしい土坑を作り、弥生時代後期頃の建物であろう。

SH0516/30はSH0517/27の南側、AX16区を中心として確認した。SH0517/27に後出する建物である。2棟がほぼ同位置で建て替えられており、北側をSH0530、南側をSH0516とした。SH0517/27と同様、北東隅から排水溝が連結しており、SH0516がSD0526、SH0530がSD0525ないしSD0524が該当する。排水溝が1条多いため、もう1棟の建物が重複している可能性があるが認識できなかった。SH0516/30とも西側半分程度は調査区外であるが、南北規模は5m前後となる。土師器、須恵器等の出土から6世紀代の建物であろう。

SH0508-14 (Fig.22)

SH0508-14は第5次調査区の北側、AU・AVの14～16区を中心に検出した一群である。少なくとも7棟はあることを確認したが、著しく重複しているため、それが正しいのかどうかも疑わしい。

SH0508からSH0510までは、この中でも南西側で検出した。いずれも表土直下が床面であり、遺存状態は悪かった。周壁溝の重複具合から、SH0508→SH0509→SH0510と新しくなることを確認している。規模等は不明なものが多いが、SH0508の南北は6.1m、SH0510の南北が5.4mを測る。

北東側で検出したSH0511からSH0514は、特に南辺の周壁溝がほぼ同じ位置にあることから、建て替えの可能性が極めて高い、おそらく4回以上の建て替えが行われたのであろう。規模等は不詳だが、6m前後となる。

出土遺物はそれほど多くなく、土師器や須恵器などの5～6世紀を中心である。一部、弥生時代の遺物が若干混在するが、いずれも5～6世紀代の堅穴住居だと考えられる。

SH0537/40 (Fig.22)

SH0537/40は第5次調査区の中央付近、AU～AW

SH0517/27・SH0516/30

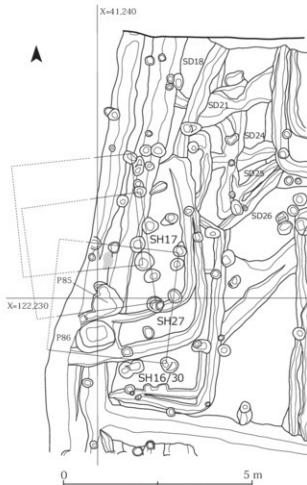


Fig.21 SH0517/27・SH0516/30 平面図 (S=1/100)

の13・14区で検出した。少なくとも2棟が重複しているが、同時に掘削してしまった。SH0537は正確な周壁溝を持たないが、堅穴住居と考えた。いずれも規模等の詳細は不明である。

古墳時代の須恵器や土師器が中心的に出土しており、6世紀前後の建物だと判断される。

SH0507/15 (Fig.23)

SH0507/15は第5次調査区の北端、AT～AVの17・18区で検出した。南側半分程度しか検出できなかつたが、北側は急斜度の崖帯になっており、既に土砂が流出してしまっていた。

2棟がほぼ同位置で重複しており、外側をSH0515、内側をSH0507とした。SH0507が古く、SH0515が新しい。なお、SH0516/30等の排水溝と想定したSD0524～SD0526はいずれもSH0507/15より新しいことを確認している。

SH0515の東西は6.0m、SH0507は5.2mを測る。焼土を床面中央の2箇所と、東寄りの1箇所を確認して

SH0508-14・SH0537/40

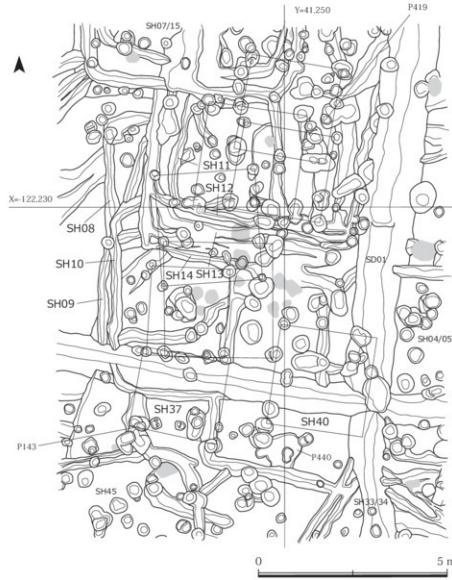


Fig.22 SH0508-14・SH0537/40 平面図 (S=1/100)

いる。土師器と須恵器が出土しておおり、6世紀代の建物だと考えられる。

SH0504/05 (Fig.24)

SH0504/05は第5次調査区の北東側、AS～AUの13・14区で検出した。2棟が重複しており、北側をSH0405、南側をSH0504とした。SH0505が古く、SH0504の方が新しい。

SH0504の東西はやや不正確だが7.0m前後、南北は5.4mあり、平面形が長方形となる。SH0505は明確な規模は不明である。なほ、いずれの建物も北辺周壁溝の中央付近で焼土を検出しており、位置関係からカマドであった可能性がある。

SH0504/05とも、土師器と須恵器が出土しており、6世紀代の建物だと判断される。

SH0502 (Fig.25)

SH0502は第5次調査区の北東端、AR・ASの15・16区で検出した。全体に浅く落ち込み、明確な周壁溝は検出できなかったが、堅穴住居として考えた。

南壁中央付近で焼土を確認しているが、これがカマドに該当するか否か判断できなかった。出土遺物から、6世紀頃の建物と判断できる。

SH0562

SH0562は第5次調査区の西側、BC13区を中心で検出した。北辺のみに数cmの焼土が残っていたが、ほぼ床面直上まで削平されていた。堅穴住居として調査したが、建物にならない可能性もある。

SH0507/15

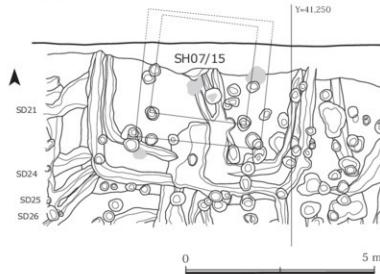


Fig.23 SH0507/15 平面図 (S=1/100)

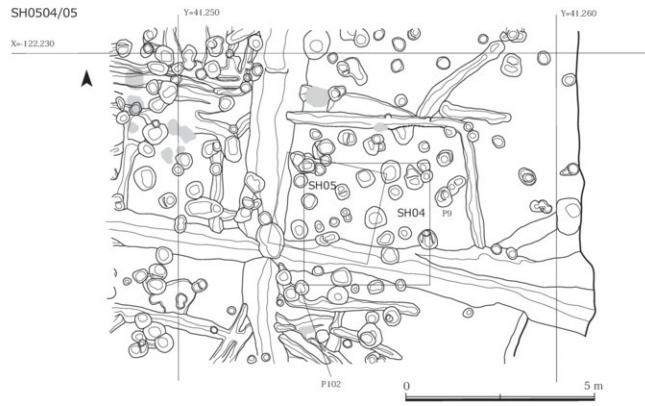


Fig.24 SH0504/05 平面図 (S=1/100)

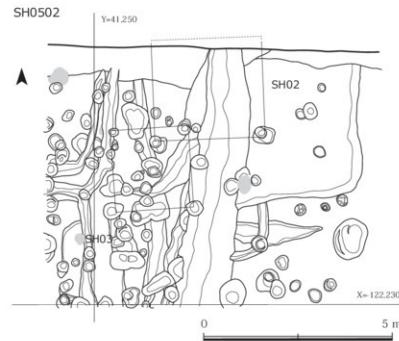


Fig.25 SH0502 平面図 (S=1/100)

2 掘立柱建物

SB03102

第4次調査区の南端のBG08区付近で、第3次調査で検出していた延長の柱穴1基を確認した。この結果、桁行5間となることが判明した。桁行の柱間は1.55m等間となる。梁行については掘り方が浅かったためか明確にすることはできなかったが、柱穴の芯部分に相当すると考えられる小ピットがあるので、それを該当させた場合に2間になると推定される。

出土遺物は限られ、建物の帰属時期を明確にし得ないが、7世紀以降の建物だと推測される。

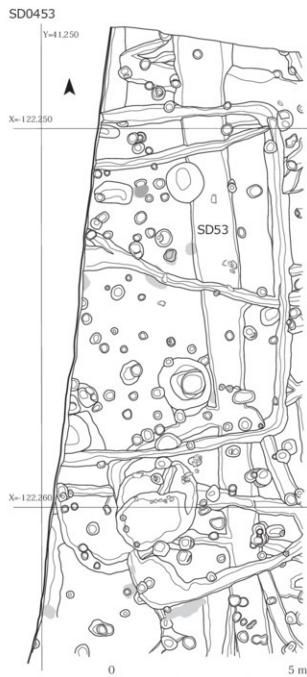


Fig.26 SD0453 平面図 (S=1/100)

3 溝

SD0453 (Fig.26)

第4次調査区の西側のBJ10からBH15区に向けて、南北方向に直線的にびる溝である。第3次調査や第1次調査でも、この溝の延長を確認している。

溝の幅は1.3mで、深さが0.4m以上となる。深く、断面が逆台形で、30m以上にわたって直線的にびるなど、他に検出された溝とは明らかに異なっている。このSD0453以西では古代の掘立柱建物が増えなど、古代の遺構の増加傾向が明らかとなっており、区画等の明確な役割を果たしていた可能性が高い。なお、第1次調

査区では、このSD0453は西へ直角に折れ曲がって続いている。

出土遺物には弥生土器や土師器、須恵器等が出土している。おそらく弥生土器や古式土師器は混入だと考えられ、他の土師器甕や須恵器杯等の7世紀以降の年代が考えられる。

SD0425/27 (Fig.27)

第4次調査区の南東端を東西方向へのびる溝である。SD0446以東をSD0425とし、以西をSD0427として調査したが、同一の溝である。なおかつ、第3次調査のSD0321としたものとも一続きの溝である。SH0307/12の北東隅と連結することから、豊穴住居の排水溝として掘削された可能性が高い。埋土は褐色を基調とする。

出土遺物には弥生土器の高杯や甕等があり、部分的にまとめて出土する地点などもあった。出土遺物の特徴からは廻間式塙の溝だと考えられる。

SD0442/32 (Fig.27)

第4次調査区の南東端を南北方向へのびる溝である。SD0441/44以南をSD0442とし、以北をSD0432として調査したが、同一の溝である。なお、第3次調査のSD0345としたものとも一続きの溝であり、さらに第1次調査区へと続いている。

出土遺物には弥生土器の高杯や甕等があり、その特徴から山中式塙の溝だと考えられる。

SD0443 (Fig.27)

第4次調査区の南東端を南北方向へのびる溝である。BE09区にてSD0441/44に連結する。第3次調査のSD0329としたものと一続きの溝であり、さらに第1次調査区へと続いている。

他の遺構との重複関係から、山中式から廻間式にかけての溝だと推測される。

SD0430/49/82/77 (Fig.27)

第4次調査区の中央東端から東西方向へのびる溝である。第3次調査区のSD03124からの続きで、SH0528/29以東をSD0530、SH0528/29の下部をSD0549、SH0428/29より西をSD0482、SD0477として掘削した。SH0471/75の北東隅に接続するようで、排水溝であった可能性が高い。

弥生土器の壺や高杯等が出土しており、山中式塙の溝である。なお、筋砥石が含まれており注目される。

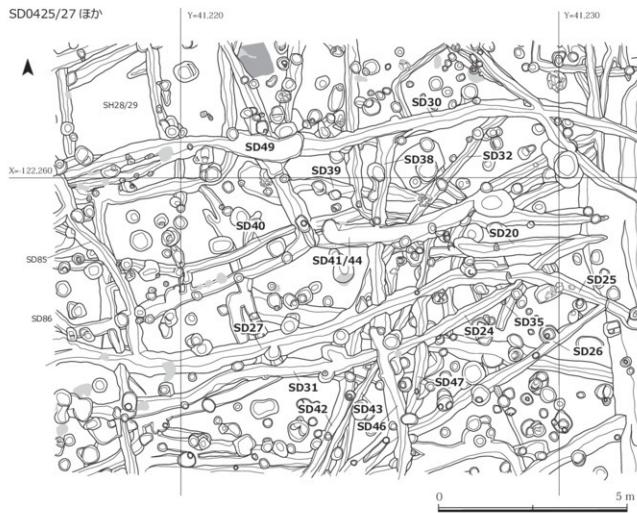


Fig.27 SD0425/27 · SD0442/32 平面図 (S=1/100)

SD0446/38 (Fig.27)

第4次調査区の南東端を南北方向へのびる溝である。BF10区にてSD0441/44に連絡する。第3次調査のSD0357としたものと一続きの溝であり、さらに第1次調査区へも続いている。高杯や獣等が出土しており、廻間式頃の溝だと推測される。

SD0441/44 (Fig.27)

第4次調査区の中央付近から東側で検出した東西方向の溝である。ちょうど、SH0428/29の南東隅から派生する排水溝である。接続部分の上部には、地山由来の黄褐色砂礫混シルト層が貼られており、溝自体が暗渠状になっていたことが確認された。

出土遺物には高杯や台付甕等があり、SH0428/29との関係も併せて考えると、廻間式頃の溝であると推定される。

SD0447 (Fig.27)

SD0447は第4次調査区の南端を南北方向へのびる溝

である。ちょうどBG09区辺りでSD0427と接続する。

南側は第3次調査区のSD0346とした溝の続きである。

周辺の遺構との重複関係等から、弥生時代後期頃の溝だと推測される。

SD0440/86 (Fig.27)

SD0440/86は第4次調査区の中央付近で東西方向にのびる溝である。東側はSH0404の南西で重複して不鮮明となる。SD0485以東をSD0440とし、SD0485以西をSD0486として調査した。

SH0428/29の下部で検出していること等から、廻間式以前の弥生時代後期頃の溝だと推定される。

SD0424/31 (Fig.27)

SD0424/31は第4次調査区の南東端を東西方向へのびる溝である。SD0446以東をSD0424とし、以西をSD0431として調査したが、同一の溝である。なお、第3次調査のSD0336/38、SD03129としたものとも一続きの溝である。明確ではないが、堅穴住居の排水溝とし

て掘削された可能性が高い。

目立った出土遺物はないが、周辺の遺構の重複関係から弥生時代後期頃の溝だと推測される。

SD0405/61/68 (Fig.28)

SD0405/61/68は第4次調査区の中央を東西に貫く溝である。概ねSH0408以東をSD0405とし、SH0454下部をSD0461、SH0455下部をSD0468として調査したが、一緒に溝である。総延長は25mほど確認している。東に第3次調査区のSH03127辺りで不明となっている。西側はさらに調査区外へと続いている。

溝の幅は0.4mで、深さは深い所だと0.4m以上ある。SH0404やSH0455との前後関係を明確に認識することはできなかったが、いずれも床面まで下がった地山上面の段階で認識した。なお、廻間式期のSH0454等の他の多くの遺構よりも古くなることは確認できている。

埋土はにぶい黄色を基調とし、出土した高杯の脚部が筒形を呈することから、SH0404やSH0455とほぼ同時期の八王子古宮式併行期まで遡る可能性が高い。

SD0411 (Fig.28)

SD0411は第4次調査区の中央付近、BG11区で検出した。廻間式期の建物であるSH0528/29の北東隅辺りから、SH0414の南東隅へ接続する。SD0405とは別の溝であるが、一部、調査段階で認証して遺物を取り上げてしまった。

深さや形状等はSD0405と似ているが、SH0428/29の排水溝である可能性も否定できない。台付槽が出土しているが、詳細な帰属時期は不明である。

SD0460 (Fig.28)

SD0460は第4次調査区の北西で南北方向にびる溝である。SH0454よりも新しい溝であることを確認している。詳細は明らかでないが、SD0479等の延長かもしれない。明確な遺物は少なく、時期不明である。

SD0466 (Fig.28)

SD0466は第4次調査区の中央を南北方向へのびる溝である。ちょうど、SH0454の南辺中央付近から北へのび、東へ曲がりながら調査区外へと続いている。

弥生土器片しか出土していないことから、概ね弥生時代後期頃の溝だと判断できる。

SD0467 (Fig.28)

SD0467は第4次調査区の北西側で検出した溝である。

調査区の西側から東へのび、BG14区内で北側へ屈曲していく。SD0453以前で、かつSH0455よりも新しい溝である。

SD0479 (Fig.28)

SD0479は第4次調査区の中央南端から北へのびる溝である。いずれも第3次調査区からの延長となる。B110区辺りでSD0485と重複するが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。明確な遺物は少なく、時期不明である。

SD0478/85 (Fig.28)

SD0485は第4次調査区の中央南端から、北西方向へびる溝である。SK0474に削平されており、それ以前の溝であることが分かる。

SD0409 (Fig.28)

SD0409は第4次調査区の北側を東西南向に26m程確認した。幅1.2m、深さ0.15mと幅広で浅い溝であるが、埋土は他の遺構ほどしまりがない。ちょうどSH0462～SH0465の西壁周壁溝の上部に拳大から人頭大の礫が集中して検出された。

出土遺物は多くの弥生土器や土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀等が混在していたもの、土師器の皿、常滑焼等の中世後半の遺物が出土している。このことから、中世後半の溝だと考えられる。

SD0396/03121 (Fig.6)

SD0396/03121は第4次調査区の南東隅から北上し、東へ延長する溝である。0.2m程度の深さがあり、2段に落ち込んでいる。第3次調査の延長であるが、南北方向のSD03121と東西南向のSD0396が交差して同一の遺構となることが確認された。埋土の色調も、他の弥生時代から古墳時代ものと異なり、しまりがない。

出土遺物には弥生土器や土師器等があるが、多くは混在だと考えられ、土師器皿や陶器等の出土から中世後半から近代の溝だと考えられる。

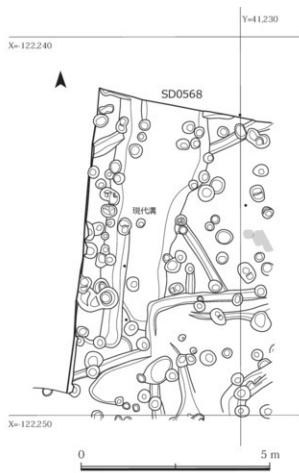
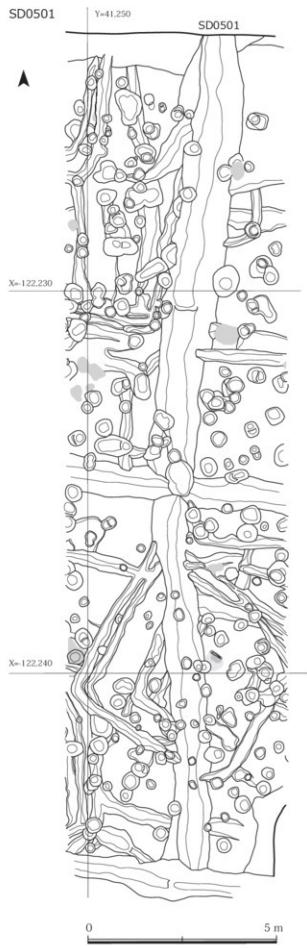
SD0501 (Fig.29)

SD0501は第5次調査区の東側を南北方向へのびる溝である。約22mを検出したが、北側はさらに調査区外へと続いている。現代の地割溝には先行するが、他の堅穴住居等の遺構の全てに後出す。埋土もしまりがやや甘く、褐色を呈す。

出土遺物には弥生土器や土師器、須恵器等があるが、



Fig.28 SD0405/61/68 平面図 ($S=1/100$)



これらはいずれも混入品であろう。土師器の羽釜が出土していることから、中世後半の区画溝と考えられる。

SD0568 (Fig.30)

SD0568 は第5次調査区の西側を南北方向へのびる溝である。多くを現代の地割り溝と重複するが、その下部で2 mほど確認した。大部分は北側の調査区外へと続いている。

埋土は褐色で、比較的しまりのある均質な層序で、現代の地割り溝とは一見して異なっていた。ただし、SH0561等の遺構には全て後出する。

弥生土器や土師器、須恵器が混在して出土しているが、土師器の皿や羽釜などから、中世後半の区画溝であろう。ちょうど、SD0501と同時期の溝であり、軸方向も概ね併行する。両者の間は、約24 m開いており、本来この間に屋敷等が存在していたのであろう。

Fig.29 SD0501 平面図 (S=1/100)

第V章 出土遺物

磐城山遺跡第4次から出土した遺物は、整理箱（55×33×10cm）に83箱あった。ほとんどが堅穴住居や溝から出土した弥生土器と土師器。須恵器であるが、灰釉陶器や山茶椀、石器等も少量出土した。特に、SH0404及びSH0455から出土した土器は、弥生時代後期前半まで遡り得る土器群であり、まとまった資料として貴重である。

磐城山遺跡第5次から出土した遺物は、整理箱（55×33×10cm）30箱あった。第4次調査と同様、多くが堅穴住居と溝からの出土遺物であったが、古墳時代の遺物が多い点でやや様相が異なる。

以下、遺構のまとめごとに解説する。これは、遺構の重複が著しいため、明確に区別して遺物を取り上げることが困難であったためである。そのため、各遺構では若干の遺物の混入が認められることを記しておく。

なお、いずれの出土遺物も磨滅が激しく、調整等が不明なものが多い。器壁が1mm程度も剥落しているものも一定量存在し、遺存状態は決して良好とはいえない。

1 堅穴住居・土坑

SK0474・SH0471/75/88・SH0484 (Fig.31)

1～14までがSK0474、15～22がSH0471/75/88・SK0474の混在、23・24がSH0471、25～29がSH0484の出土遺物である。

1・2の須恵器杯蓋はSH0471/75からの混入の可能性がある。3は段が不明瞭となり、やや後出する。4は壺類の肩部の破片であり、最大径の辺りに2条の沈線を巡らせる。6は小型の壺であろう。口縁端部を欠損し、底部にはタキが残る。7はハソウの体部片と考えられ、肩部に列点刺突が巡る。8のハソウは頸部が長くのび、細身の体部形状を呈する。

9は土師器の椀、10～12は土師器の甕である。10・11はいずれも口縁端部を丸くおさめる。11の内面には煤が付着する。12の口縁内面はヨコナデにより段状になっているが、つまり上げてはいない。13は弥生土器の甕が混在したものであろう。受口状の口縁の外面上に刺突を施す。14は壺である。外面部とも粗いハケで調整され、口縁端部は内面に折り曲げるようにな形されると。

15・16は須恵器の杯蓋である。19は杯身ではなく、底部付近の湾曲具合から有蓋高杯になろう。20は土師器の甕で、端部を丸くおさめるが、21・22は口縁をヨ

コナデによって外反させ、いわゆる宇田型甕の系統である。

23も底部に脚部との接合痕が残ることから、有蓋の高杯になると考えられる。24は土師器の楕円高杯であるが、ちょうど擬口縁の部分で欠損している。

25は廻間式期の楕円高杯であろう。楕部と脚部は接合しないものの、胎土の特徴から同一個体と判断した。脚部の円孔は5ないし6箇所になろう。26は付台甕の脚台部である。

27～29はSH0484の南東主柱穴（P04260）から出土したもののである。27は弥生土器の甕で、外表面をタタキ後にナデ消す。また、外表面には部分的に煤が付着し、被熱により剝離している箇所もある。内面は丁寧にナデ上げられており、比較的平滑に仕上げられている。淡黄灰色を呈す。28も甕であるが、内外面ともにハケ調整して、非常に薄く仕上げられている。体部最大径辺りには櫛引きの波状文が施され、その下部に薄い突帯を貼り付けて、その上を刻む。

このようにSK0474は6世紀末～7世紀代、SH0471/75は5～6世紀、SH0484は廻間式期の遺物が多く出土している。

SH0428/29・SH0454 (Fig.32・33)

SH0428/29からは、30～70までの多くの遺物が出土した。30～44までが甕である。30は口縁上端に綾杉文を2段半分施す。口縁端部は2個1単位の円形浮文を貼り付けるが、破片のため全体の個数は不明である。31の口縁上端の綾杉文は少なくとも1段目までは確認できるが、2断面以下は磨滅のため判然しない。口縁端部にも綾杉文を施す。32の口縁端部は櫛状のハケ調整の上に、1単位3条の棒状浮文に1単位2個の円形浮文の組み合わせを繰り替えしている。ただし、割り付け方が未熟のためか、広く空白部が残った範囲のみ円形浮文が1単位3個となっている部分が存在する。33は円形浮文を2個1単位で6箇所巡らす。34～39は、いずれも磨滅のため調整は不明である。41の口縁部はヨコナデし、頸部に突帯を貼り付ける。体部外表面は不鮮明ながら太めのタメミガキが、内面にはハケ目とユビオサエが観察される。44は壺の口縁部になろう。

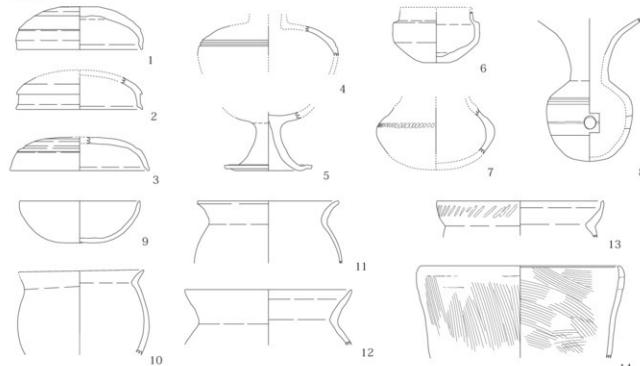
45～48はく字甕である。45の内面にはヨコハケが認められるものの、外表面は磨滅しており不明である。46のように内外ともハケ調整があったのかもしれない。49

は受口状口縁の甕である。50・51はいわゆるS字甕である。51は不明であるが、50は口縁外面に刺突を施し、口縁内面にもハケ調整を施す。これらの特徴から、S字甕のA類からB類になろう。

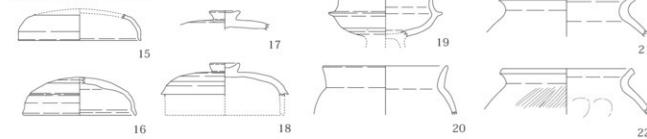
53・54の須恵器杯蓋は混在の可能性が高い。55は灰白色の須恵質の器形不同的ものである。天地も不明である。

56の器台を除き、57～70は高杯である。58はほぼ完形で、口径 25.4cm、器高 20.1cm である。杯部の稜部の口径が 10.8cm で、径稜比率で 42.5 となる。57 は口径 25.3cm、稜径 11.1cm で、径稜比率は 43.8 となる。

SK0474



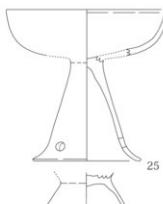
SK0471/75/88・SK0474



SH0471



SH0484



SH0484 南東主柱穴 (P04260)

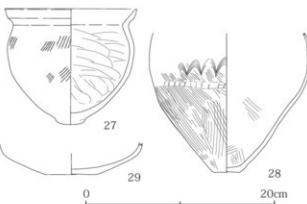


Fig.31 SK0474・SH0471/75/88・SH0484 出土遺物 (S=1/4)

61は橢形高杯になろう。62～70は高杯の脚部である。

71～79までがSH0454からの出土遺物である。71～74は壺である。75は小型の鉢である。76・77は高杯で、内湾する脚部もつ。78の弥生土器の受口壺と79の須恵器杯身は混入であろう。

このようにSH0428/29、SH0454とも遅間式期の遺物が主体となっている。

SH03134・SH0421/22/23・SH0404 (Fig.34・35)

80～85がSH03134、86～90がSH0421/22/23、91～110がSH0404の出土遺物である。

80は弥生土器の壺、81は高杯である。いずれも下部の堅穴住居SH0404やSH0421/22/23からの混在と考えられる。82は須恵器の短頸壺であるが、脚部を伴うかどうかは不明である。84は土師器のく字壺で、85が

SH0428/29

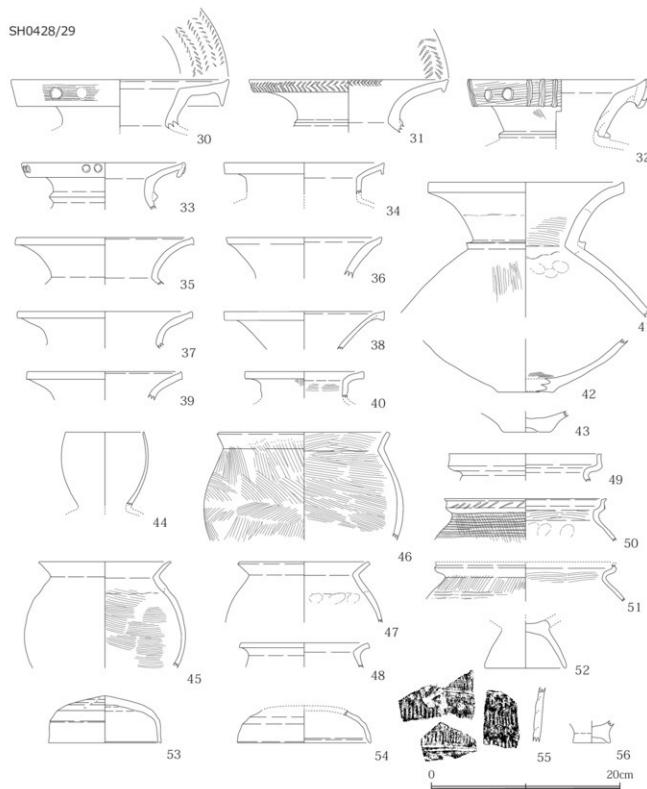
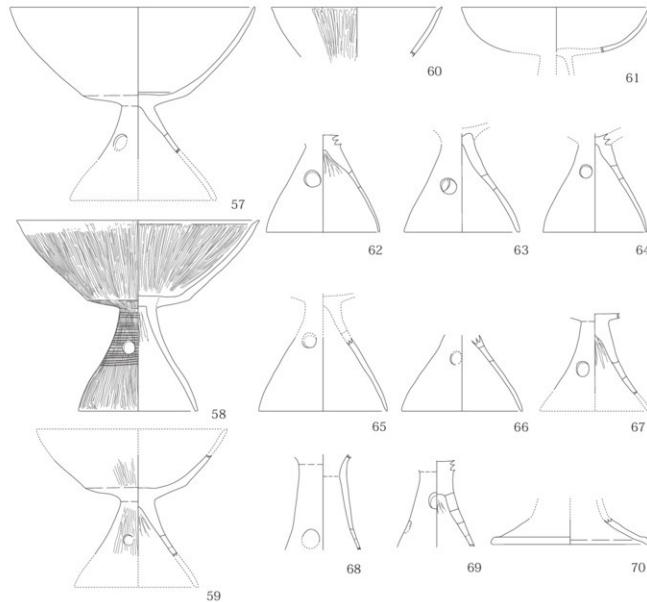


Fig.32 SH0428/29出土遺物 (S=1/4)

SH0428/29



SH0454

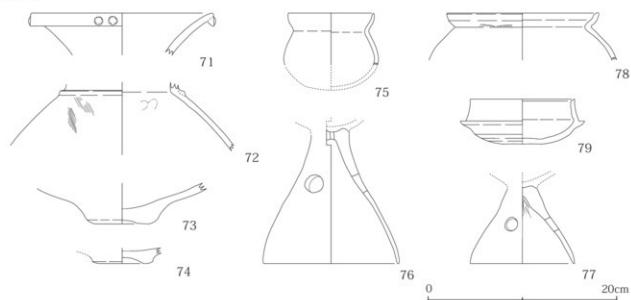


Fig.33 SH0428/29 · SH0454 出土遺物 (S=1/4)

宇田型甕となる。

86・87はともにく字甕で、87は口縁端部に刻みを伴う。88は高杯で縁部の段が不明瞭になっている。

91は甕で、上半部のみであるが残りは良好である。頸部に刺突列があるかもしないが、磨滅のため不明である。92の甕は、体部にヘラ書きによって線刻された絵画土器である。93～97は甕である。いずれも口縁端部を短く字状に屈曲させた形状を呈する。99～103は高杯である。99～101は山中式以前とされる盤状の有段高杯である。102は長く屈曲する特異な形状である。104は甕の口縁部破片であろう。

102・105～110までは南東主柱穴P04171から出土している。105は甕で口縁端部には円形浮文を貼り付け、その上に刺突を施す。106は完形の甕で、脚台はつかない。一部ハケが残るが、ほとんど磨滅のため調整不明である。内面はナデのためか平滑に仕上げられている。

107は高杯の脚部である。脚部は筒形で細く、端部で屈折する。108は器台にあろうか、端部外間に4条の凹線を施す。109と110は同一個体と考えられる。109は円形の透かしが1箇所確認できるが破片のため、いくつあけられているか不明である。円形透かしの下部には直線文と波状文が施される。110はその端部だと考えられるが、獨特の波状文が施される。

このように、SH03134は6世紀頃、SH0421/22/23は廻間式期、SH0404は八王子古宮式併行期の遺物が多く出土している。

SH0455/51/56 (Fig.36-37)

111～113がSH0451、114～121がSH0456、122～166がSH0455の出土遺物である。この内、SH0451はSH0455上部にある堅穴住居と理解して調査したが明確に捉えることができなかった。ただし、黒色土層からの出土であり、下部のSH0455とは区別するべきである。また、SH0456としたものは、ここでは区別して示すが、本来SH0451とSH0455の両者を混在して取り上げた可能性が高く、SH0455埋土として掘削した中にもSH0451やSH0454等の遺物を含んでいる可能性も否めない。ただし、南東主柱穴P04242からはまとまった状態で出土しており、一括資料として高く評価できる。

111は弥生土器の甕である。112は弥生土器の台付甕で、113は土師器の台付甕である。ハケは柳状であり、他の宇田型甕のつくりに似ている。

114は有段口縁の甕であろうか。116は受口甕で、口縁端部に刺突、体部上半に直線文と刺突が施される。

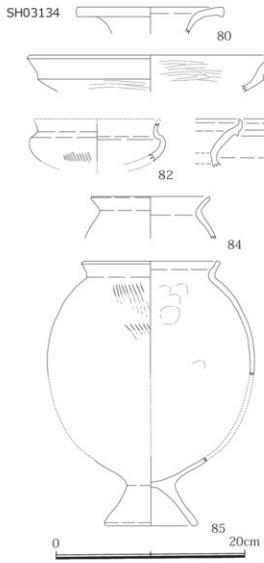


Fig.34 SH03134 出土遺物 (S=1/4)

117はく字甕、118は宇田型甕の系統になろう。120は盤状高杯で、口縁端部から3条1単位の棒状浮文が貼り付けられている。刺突が著しく不鮮明であるが、少なくとも内面には部分的に赤彩された痕跡が残されている。121は小型の高杯の脚部と考えられるが、円孔が5箇所あけられる。

122～128までが甕である。122～124は肥厚させた口縁端に凹線や円形浮文を貼り付け、端部上面には棘文を施す。126・127は頭部破片であり、いずれも素文の突帶を貼り付ける。長頸甕になろうか。128は頸部に円形の刺突列を巡らす。129は鉢になろう。内外面ともユビオサエが残るものナデ調整で、口縁部はヨコナデする。

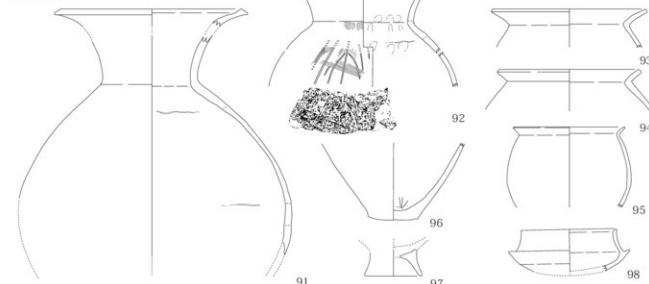
130～132は甕である。130はく字甕で外面にハケが残る。131・132は受口甕で口縁外面上に刺突を施す。

133～143は高杯である。133・134は盤状高杯で、133には内面ヨコミガキ、外表面テミガキが密に施され

SH0421/22/23



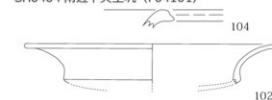
SH0404



SH0404 北西主柱穴 (P04431)



SH0404 南邊中央土坑 (P04101)



SH0404 南西主柱穴 (P04171)

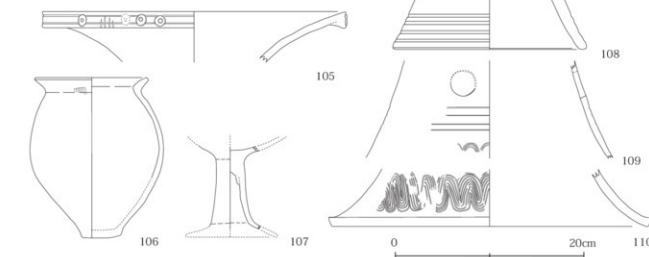


Fig.35 SH0421/22/23 · SH0404 出土遺物 (S=1/4)

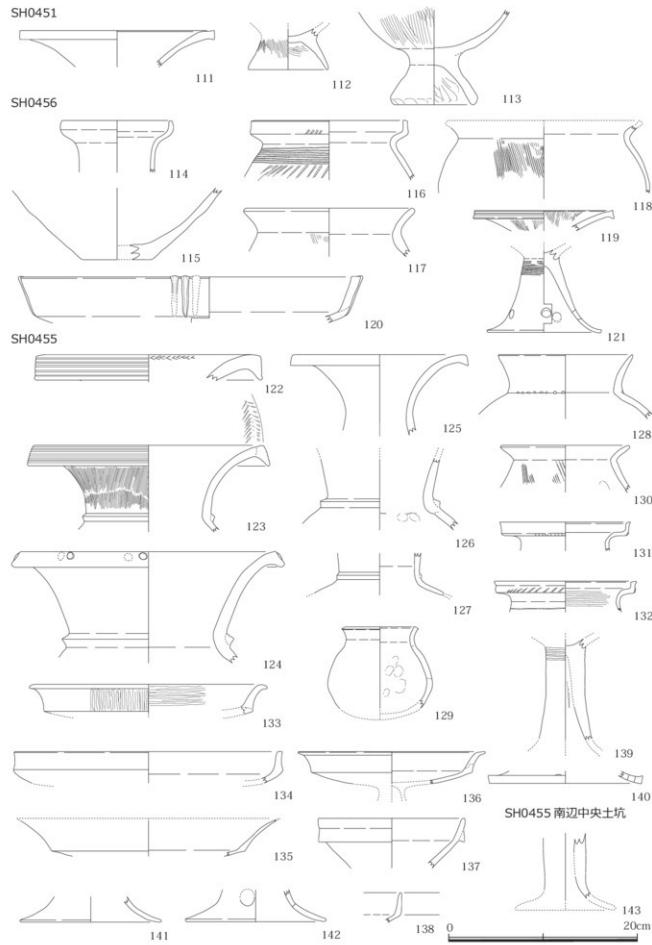
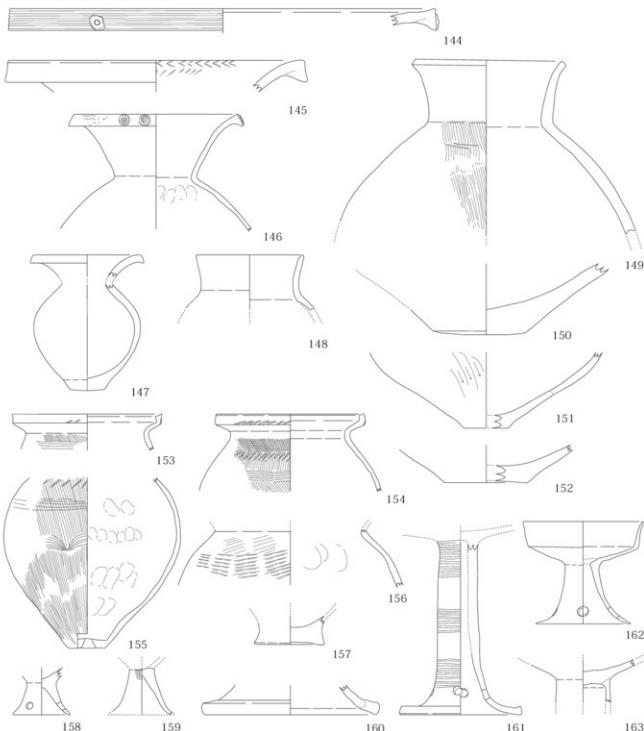


Fig.36 SH0455/51/56 出土遺物 (S=1/4)

SH0455 南東主柱穴 (P04242)



SH0455 北東主柱穴 (P04200)



SH0455 內 (P04234)



SH0455 內 (P04235)



Fig.37 SH0455 出土遺物 (S=1/4)

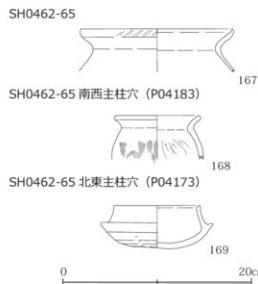


Fig.38 SH0462-65出土遺物 (S=1/4)

ている。135は薄く山中式に特徴的な形状を呈す。136は口縁端部が外反する。137は特異な形状である。口縁部として示されたが、天地逆となり脚端部の可能性もある。139は筒状の脚部で細く長い形である。140は高杯の端部で、端部付近に円孔が施される。

144～163は南東主柱穴P04242から出土した、一括資料である。144～152は壺である。144は口径44.8cmの大型品である。145は口縁端部上面に綾杉文が1段半施される。146の口縁には円形浮文が施される。その周囲には刺突の痕跡も観えるが、磨滅のため不鮮明である。147は柱の抜き取り戻し出土している。149は上半部の完形資料であるが、外面には縱方向のハケを施す。151は壺の底部で、外面はナデで仕上げられる。

153～157は壺である。154～158は口縁で、口縁外面は刺突、体部に直線文、刺突、波状文が施されている。155の底部は穿孔される。156はタタキ壺で、淡黄褐色を呈す。

158～163は高杯である。158・159は小型で、161は細身で筒状に長い。161には太く浅めの直線文が3帯あり、円孔は4箇所施される。なお、160は天地逆で高杯とは異なる可能性がある。162はほぼ完形の高杯である。脚部との接合部分が剥落している。

164は壺の底片で、北東主柱穴P04200の出土である。165の高杯はSH0455内のP04234出土、166の高杯は同P04235の出土である。

このようにSH0451は不明確だが弥生時代～古墳時代までが混在しており、SH0455は八王子古宮式併行から山中式古段階にかけての遺物がまとまっている。

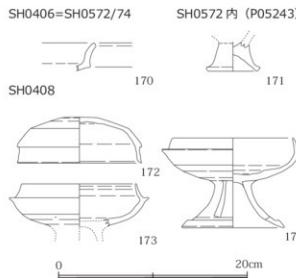


Fig.39 SH0406・SH0408出土遺物 (S=1/4)

SH0462-65 (Fig.38)
167は弥生土器の壺である。口縁外面に刺突を施す。
168は南西主柱穴P04183から出土した。弥生土器の小型壺で、口径は8.8cm程度である。169は北東主柱穴P04173から出土した。須恵器の杯身である。

このように、全体的な出土量は少ないが、弥生土器が主体であり、一部古墳時代の土師器や須恵器が混じっている。

SH0406=SH0572/74・SH0408 (Fig.39)
170はSH0406から出土した、山中式の高杯である。
171はSH0572内部の柱穴P05243から出土した台付壺の底部である。

172～174はSH0408の出土遺物である。いずれも須恵器で、172が杯蓋、173・174が須恵器の有蓋高杯である。172の天井部には重ね焼きの痕跡が認められる。174の高杯は1段の方形透かしが4箇所あけられている。

このように、SH0406=SH0572/74は山中式前後、SH0408は6世紀代の遺物が中心となっている。

SH03136=SH0566・SH03138/139=SH0565・SH0560 (Fig.40・41)

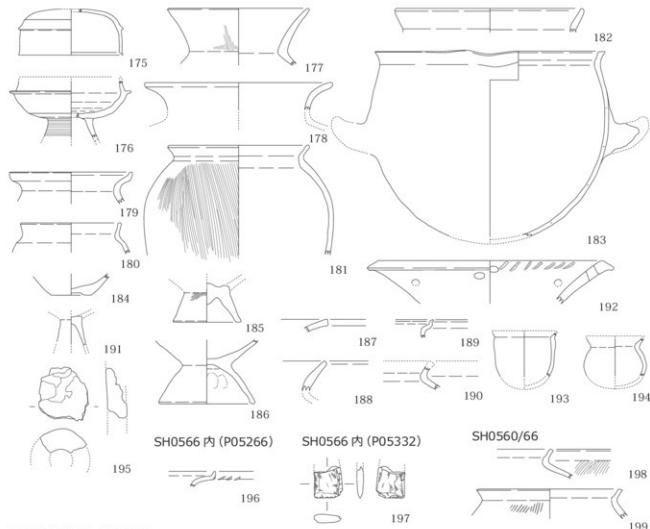
175～197がSH03136=SH0566、198・199がSH0560/66混在、200～209がSH03138/139=SH0565、210～224がSH0560の出土遺物である。

175の須恵器の杯蓋と176の高杯は東辺周壁溝からの出土である。175の杯蓋は箱形で、176の脚部にはカキ目が施され、方形の透かしがあけられている。

177・178は土師器の蓋とし、178は182・183の
ような鍋になる可能性もある。182の口縁端部はく字
状であるが、183は宇田型甕の口縁と同じ形状を呈す。
179～181・184～190は甕である。179は弥生土器

の混入であろう。180・181は宇田型甕の系統である。
184は平底で、上底状となる。185・186は台付甕の脚
台部である。187・188はく字甕、189はS字甕、190
は宇田型甕の口縁部片になろう。

SH03136=SH0566



SH03138/139=SH0565

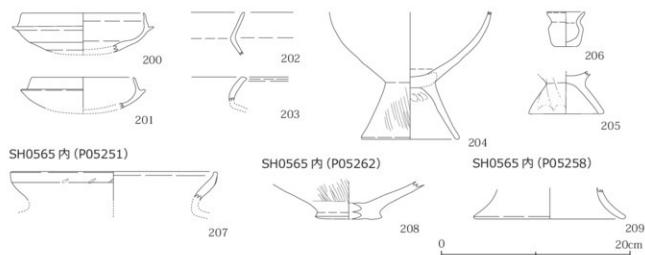


Fig.40 SH03136=SH0566 · SH03138/139=SH0565 出土遺物 (S=1/4)

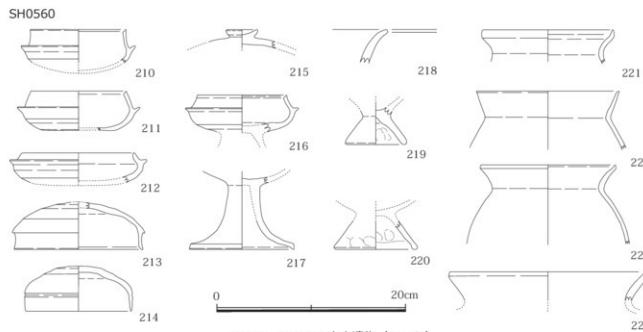


Fig.41 SH0560 出土遺物 (S=1/4)

192は器形の不明品である。全体の器形や端部付近に円孔をあけること等から、弥生土器の器台の脚部のように見受けられるが、内面に列点刺突を施すことから、こちら側を口縁部と理解して図示した。

193・194はミニチュア土器である。193は鉢形、194は攢形である。191の高杯も小型であり、ミニチュア土器になるかもしれない。195は籠の羽口の破片である。197は内部の柱穴であるP05332からの土で、凝灰岩製の磨製石斧である。幅3cm程度の小型品で、上半分を欠損する。

200・201は須恵器の杯身である。200は焼け歪が激しく、口径の誤差が大きい。202～205は土師器の甕で、202・203はく字甕の口縁部、204・205は台付甕の脚台部となる。204は弥生の台付甕で混入品であろう。206はミニチュア土器である。

207～209は内部の柱穴から出土した。207の受口甕、208のミガキを施した甕、209の高杯とも弥生土器である。

210～217は須恵器である。213の天井部の回転ペラ削りは単位が認めがたいほど平滑となっている。214は焼け歪みが激しくやや不整形である。216は高杯になろう。

218～224は甕である。221は弥生土器の受口甕で、219も弥生土器の台付甕の可能性がある。他は土師器で、いずれも土字甕である。特に、223は口縁端部を上方へつまみ上げている。

このように、弥生土器が混在するものの、5～6世紀代の遺物が多く出土している。

SH0401 (Fig.42)

225は土師器のく字甕である。

SH0402 (Fig.42)

226は須恵器の杯身、227は有蓋高杯の蓋のつまみ部分である。228・229はともに土師器の甕と考えられ、口縁内面を浅く凹ませる点が共通する。

SH0403 (Fig.42)

230は土師器のく字甕である。口縁端部を上方へつまみあげる。

SH03111 (Fig.42)

231は高杯である。短く屈曲した口縁端部を持ち、内面には横方向のミガキが施される。山中式の古い形状を呈す。

SH0559 (Fig.43)

232～256がSH0559の出土遺物である。232は長頸甕になろう。頸部と体部の境界に突帯を貼り付ける。

235～240は甕である。235の受口甕は口縁端部を僅かに欠損する。237の口縁部は強く屈曲し、短く開く。口縁部のみヨコナデし、内面にはユビオサエとナデの痕跡が残る。外表面は磨滅のため不明であるが、ナデで仕上げられているようである。

241は器形不明である。肩部が鋭く屈曲して段を形成し、そこに波状文を施している。内面は細かなナデで成形される。242～249は高杯である。242は盤状

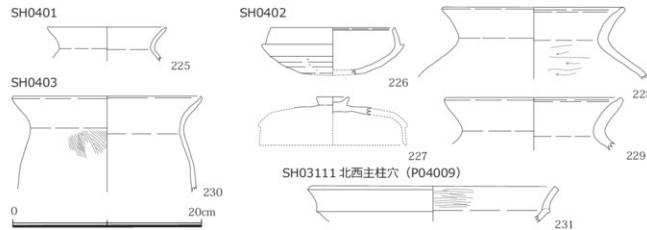


Fig.42 SH0401 · SH0402 · SH0403 · SH03111 出土遺物 (S=1/4)

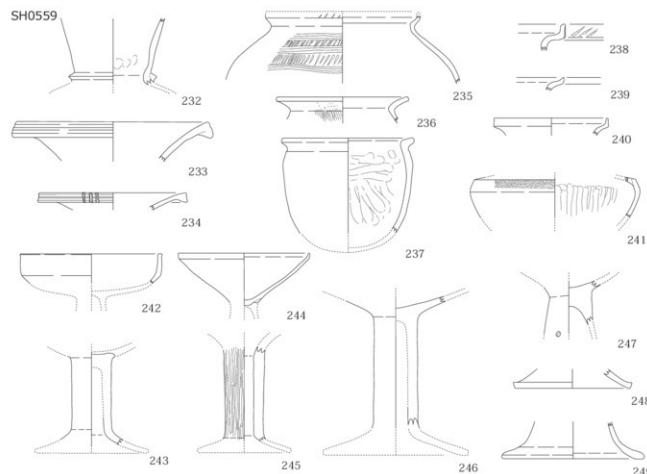


Fig.43 SH0559 出土遺物 (S=1/4)

で、244は端部を上方へつまみあげたような形状である。243～246の脚部はいずれも細身で筒状になっている。脚端部まで遺存していないが、屈折して大きく外方へ開く形状となる。248は245と同一個体の可能性がある。250は凝灰岩製の砥石である。断面五角形で、いずれの面もよく使用されている。

251・252はSH0559内部のP05344から出土している。251の口縁端部には、円形の刺突が巡る。252は中空の器台になると思われる。

253・254は南辺中央浴槽の貯蔵穴P05340から出土した。253は瘤にならう。254は疣である。

255・256はP05342から出土した。255は台付腰の脚台部である。256は凝灰岩製の砥石である。厚さが

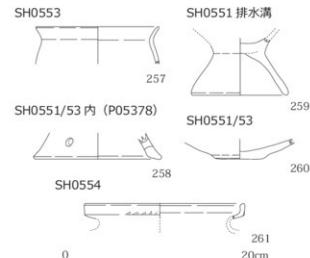


Fig.44 SH0551/53 · SH0554 出土遺物 ($S=1/4$)

SH0547/57

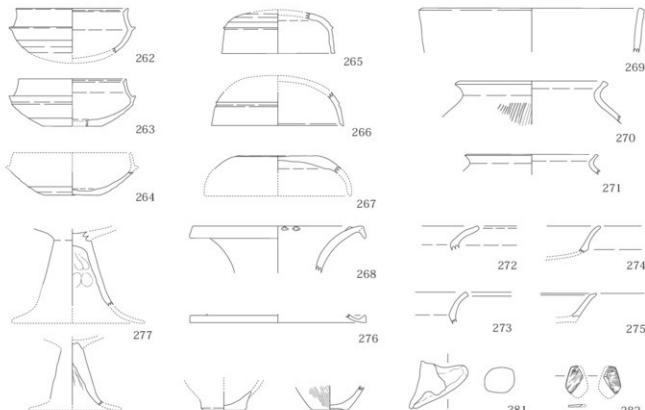


Fig.45 SH0547/57 · SH0549 · SK0550 出土遺物 ($S=1/4$)

0.5cm になるまで使い込まれている。

このように、八王子古式併行の土器が多く含まれており、砥石の存在も目立つ。

SH0551/53・SH0554 (Fig.44)

257 ~ 260 が SH0551/53、261 が SH0554 の出土遺物である。

257 はおそらく、く字腹である。258 は SH0551/53 内の P05378 から出土しており、器台になろう。259 は SH0551 の排水溝から出土した台付壺の脚台部である。261 は受口壺となる。

このように出土量自体は少ないものの、弥生時代後期の遺物がまとまっている。

SH0547/57・SH0549・SK0550 (Fig.45)

262 ~ 286 が SH0547/57、287 が SH0549、288 ~ 290 が SK0550 の出土遺物である。

262 ~ 264 は須恵器杯身、265 ~ 267 が杯蓋となる。268 は弥生土器の壺で、口縁内面に瘤状突起が少なくとも 2 個以上貼り付けられている。269 は土師器の壺、270 ~ 271 は宇田型壺となる。282 は滑石製の石製模造品で、劍形を呈す。欠損するが、両面とも擦痕が明瞭に観察される。

283 は SH0547/57 の P05394 から出土した須恵

器の裏である。体部外面にはタタキが認められる。

284 ~ 285 は南西主柱穴である P05400 から出土した。

284 はく字腹、285 は弥生の器台になろう。

287 は土師器の屈折脚の高杯である。288 は外反する口縁部をもつ高杯で、松河戸式併行になろう。

このように、一部弥生土器の混在が認められるが、いずれも 5 ~ 6 世紀代の遺物がまとまっている。

SH0545 (Fig.46)

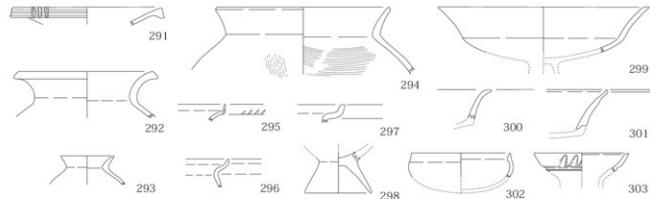
291 ~ 310 が SH0545 の出土遺物である。291 ~ 293 は壺で、291 の口縁部には 3 本 1 単位の棒状浮文を貼り付けた。293 は薄手のづくりで、小型壺であろうか。

294 ~ 298 が壺となる。295 ~ 297 は受口壺の口縁部で、298 は台付壺の脚台部である。299 ~ 301 はいずれも山中式の高杯の形態である。302 は土師器の壺で、303 は須恵器のハソウの口縁部である。302 や 303 は混入であろう。

304 ~ 305 は SH0545 内の P05184 から出土した。305 は高杯の脚部であろう。306 ~ 308 は同じく P05198 から出土している。306 ~ 307 とも須恵器の杯蓋で、308 は土師器の裏ないし縫になろう。309 は P05200 から出土した土師器の長頸壺で、310 は P05191 の須恵器の杯蓋となる。

このように SH0545 からは山中式を中心とした遺物が

SH0545



SH0545 内 (P05184)

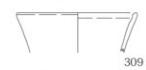


0

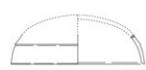
20cm

Fig.46 SH0545 出土遺物 (S=1/4)

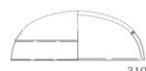
SH0545 内 (P05198)



SH0545 内 (P05200)



SH0545 内 (P05191)



310

出土している。ただし、SH0545 の埋土の一部に古墳時代の遺物が混じり、かつ P05198 や P05200、P05191 等のように古墳時代の柱穴があることから、SH0545 の上部には古墳時代の堅穴住居があった可能性が高い。

SH0535/36・SH0575 (Fig.47)

311～335 が SH0535/36、336～341 は SH0575 の出土遺物である。ただし、321～333 から出土して

いる古墳時代の遺物は、本来 SH0535/36 に作るものではなく SH0575 のものである可能性が高い。

311・312 はともに口縁部を欠くが、弥生土器の壺である。313・314 は受口壺で、314 は口径 25.6cm の大型品である。315・316 は器台の口縁部、317～320 が高杯となる。318～320 は山中式から廻間式の範疇である。

321・322 は宇田型壺で、323 以下が須恵器となる。

SH0535/36

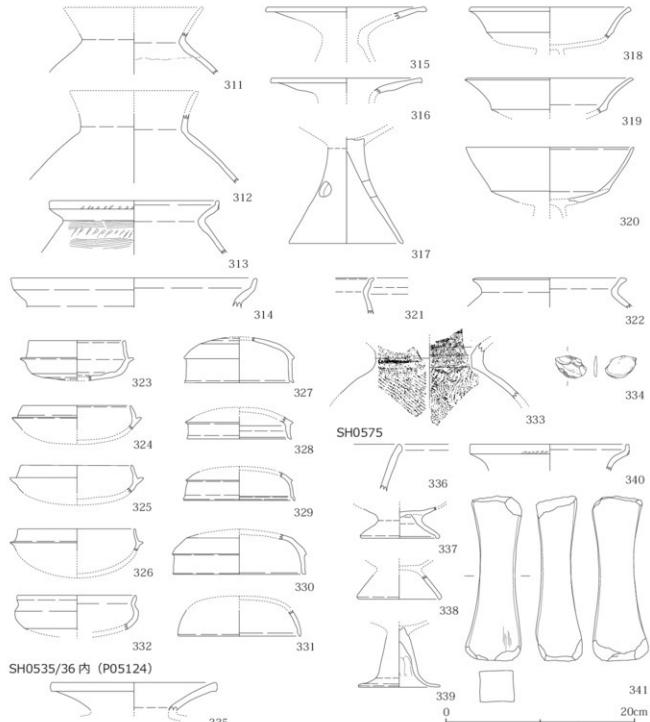


Fig.47 SH0535/36・SH0575 出土遺物 (S=1/4)

須恵器には 323 ~ 326 の杯身、327 ~ 331 の杯蓋、332 の短頸壺、333 の壺等がある。334 は片岩系の剥片である。何の製作を意図したものかは明らかでない。335 は P05124 から出土した弥生土器の壺である。

336 からが SH0575 の出土遺物となる。336 は土師器の壺の口縁部、337 は土師器の台付椀にあらう。339 は屈折高杯の脚部である。341 は凝灰岩質砂岩の砥石である。断面は四角形で比較的よく使用されている。

このようには山中式から廻間式にかけての遺物と 5 ~ 6 世紀代の土師器、須恵器が混在している。上下に建物が重複していることから、前者が SH0535/36、後者が SH0575 の軸幅時期を示すものと考えられる。

SH0533/34・SH0538 (Fig.48)

342 ~ 353 が SH0533/34、354 ~ 357 が SH0538 の出土遺物である。

342 ~ 347 が須恵器で、342 が杯身、343 と 344 は杯蓋、345 は高杯、346 は壺類の脚台部、347 はハソウとなる。347 は口縁外側に波状文を施すほか、頸部にも少なくとも 2 段の波状文を施している。348 から 351 は壺である。349 は弥生の受口壺で、混入であろう。

352 は P05131 から出土した須恵器杯蓋である。353 は P05128 から出土した弥生土器の壺である。

354 ~ 357 はいずれも須恵器で、357 の杯蓋を除き、杯身である。

このように、一部弥生土器の混在が認められるものの、6 世紀代の遺物が主体となって出土している。

SH0517/27・SH0516/30 (Fig.49)

358 ~ 374 が SH0517/27・SH0516/30 の出土遺物である。掘削当初、1 棟の堅穴住居と認識して掘削したため、大部分を一括して取り上げてしまっているので、まとめて報告する。

358 ~ 362 が須恵器である。358 は杯身で、扁平で退化が著しい。359 ~ 362 は杯蓋となる。363 ~ 365・371・372 は土師器の壺で、363 ~ 365 まではいずれもく字壺である。364 は口縁端部を上方へつまみ上げている。366・367 はいずれも土師器の壺で、368・369 が鍋となる。369 の口縁部は宇田型壺のそれと酷似する。370 は土師器の高杯である。

373 は P0585 から出土した弥生の壺で、374 は P0586 から出土した山中式から廻間式にかけての高杯の脚部である。

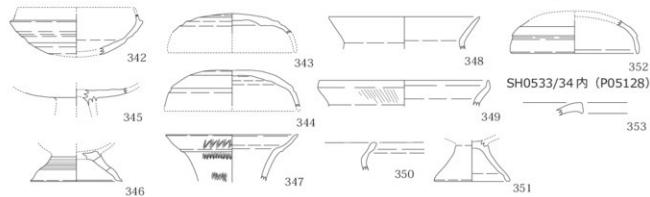
このように大部分が 6 世紀代の遺物で占められるが、一部弥生土器が含まれている。おそらく、上部の建物が遺物の多かった前者の時期で、下部の建物には後者の遺物が含まれていたのであろう。

SH0510-14 (Fig.50)

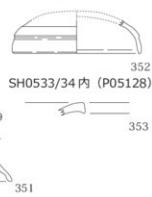
375・376 は SH0510 で、377 が SH0513、378 が SH0511-14、379 が SH0511-14 内の柱穴 P05419 からの出土遺物である。

375 は SH0510 の西辺周壁溝から出土した須恵器の杯蓋で、376 は SH0510 の焼土の直上で出土した刀子の類である。

SH0533/34



SH0533/34 内 (P05131)



SH0538

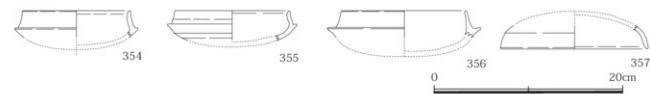


Fig.48 SH0533/34・SH0538 出土遺物 (5=1/4)

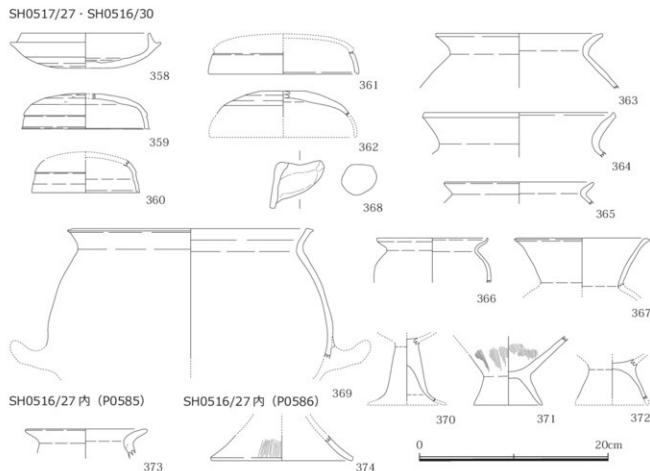


Fig.49 SH0517/27 - SH0516/30出土遺物 (S=1/4)

377はSH0513の南辺周壁溝から出土した杯蓋である。379は土師器の高杯で、脚端部は屈折する。外面には縦方向のミガキが認められる。

全般的な出土量は少ないが、5～6世紀代の遺物が出土している。

SH0507/15 (Fig.51)

380～384がSH0507/15の出土遺物である。380～382は須恵器である。382は壺で頸部には2段にわたりて沈緋を巡らせる。上段の沈線は3条で、下段の沈線は2条となり、その間に波状文を施す。体部は内面に平滑な工具の跡が現り、外面上にはタタキ後カキ目を施している。比較的残りがよく、まとまった状態で出土した。384は宇田型壺であろう。

このように、いずれも6世紀代の遺物が中心に出土している。

SH0504/05 (Fig.52)

385～389がSH0504/05の出土遺物である。385は須恵器の杯蓋であるが、極めて扁平となっている。386は土師器の甕で、口縁端部をつまみ上げる。387は

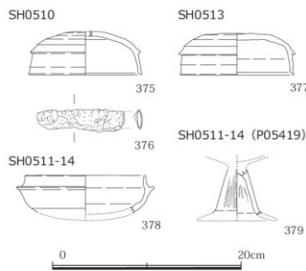
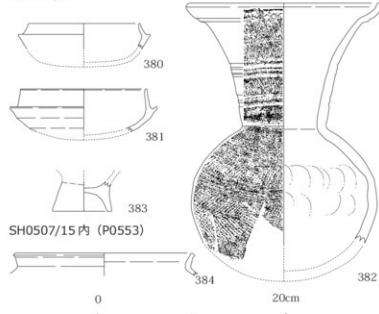


Fig.50 SH0510-14出土遺物 (S=1/4)

P0509から出土した土師器の裏ないし鏡で、386と同様、口縁端部をつまみ上げる。388はP0596から出土した須恵器杯身で、389はP05102出土の土師器甕である。同様に口縁端部をつまみ上げる。

このように、いずれも6世紀末から7世紀の遺物が出土している。

SH0507/15



SH0502 (Fig.53)

390～392がSH0502の出土遺物である。390は須恵器杯蓋、391・392は土師器の蓋である。392は短く直立した口縁を持つ。

出土遺物は少ないが、概ね6世紀頃の遺物が出土している。

SH0542 (Fig.54)

393は須恵器の杯身である。394は土師器の皿で、内部のP05163から出土している。394は中世の混在遺物であるが、他は概ね6世紀代の遺物で占められる。

SH0548 (Fig.54)

395～401がSH0548の出土遺物である。395・396は須恵器で、396は比較的口径が小さい。397～401は土師器となる。397はやや厚手の椀で、口縁端部を外方へつまみ出す。399は宇田型甕である。401は鉢になろうが、宇田型甕の口縁部形状と酷似する。

このように、6世紀代の遺物がよくまとまっている。

SH0562 (Fig.54)

402は土師器のく字甕である。出土遺物は少ないが、6世紀代のものが中心である。

SH0537/40 (Fig.54)

403～413がSH0537/40の出土遺物である。調査段階で2棟を区別できず、一括して掘削してしまっている。

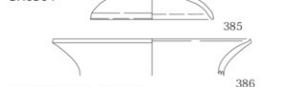
403は須恵器の杯身、404が同杯蓋となる。405は有蓋高杯の蓋のつまみ部分である。406も須恵器であり、ハソウの可能性が高い。底部は回転ヘラ削りで仕上げられている。

407・408は土師器腰の口縁部で、409は鉢の把手部分である。断面が比較的四角い。411はミニチュア土器である。

412は土師器の蓋ないし甕で、P05143から出土している。413は鉢の把手部分で、P05440から出土している。

いずれも6世紀代の遺物が中心である。

SH0504



SH0504/05内 (P0509)



SH0504/05内 (P0596)



SH0504/05内 (P05102)

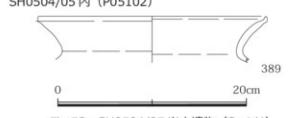
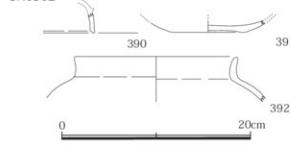


Fig.52 SH0504/05出土遺物 (S=1/4)

SH0502



2 溝

SD0453 (Fig.55)

414～425がSD0453の出土遺物である。420までが須恵器で、414の杯身、415・416・418の杯蓋、417の短頸壺、419の長頸壺、420の広口壺等がある。418は所謂、杯Bの蓋で、当調査区で唯一の杯Bである。419の頸部は細く、外面には自然釉がかかっている。断

面には気泡のために焼成時に膨れてしまっているが、全体はロクロナデで成形される。420の壺は頸部中央に1条の沈線を巡らし、他はロクロナデで仕上げる。

421はおそらく弥生土器の壺の頸部片であり、混入品であろう。SH0554の由来であろうか。

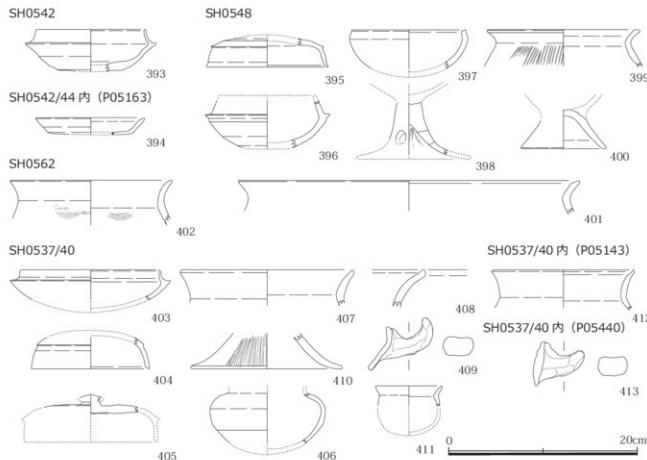


Fig.54 SH0542・SH0548・SH0562・SH0537/40出土遺物 (S=1/4)

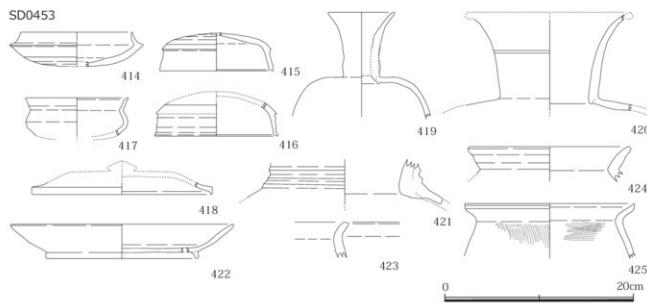


Fig.55 SD0453出土遺物 (S=1/4)

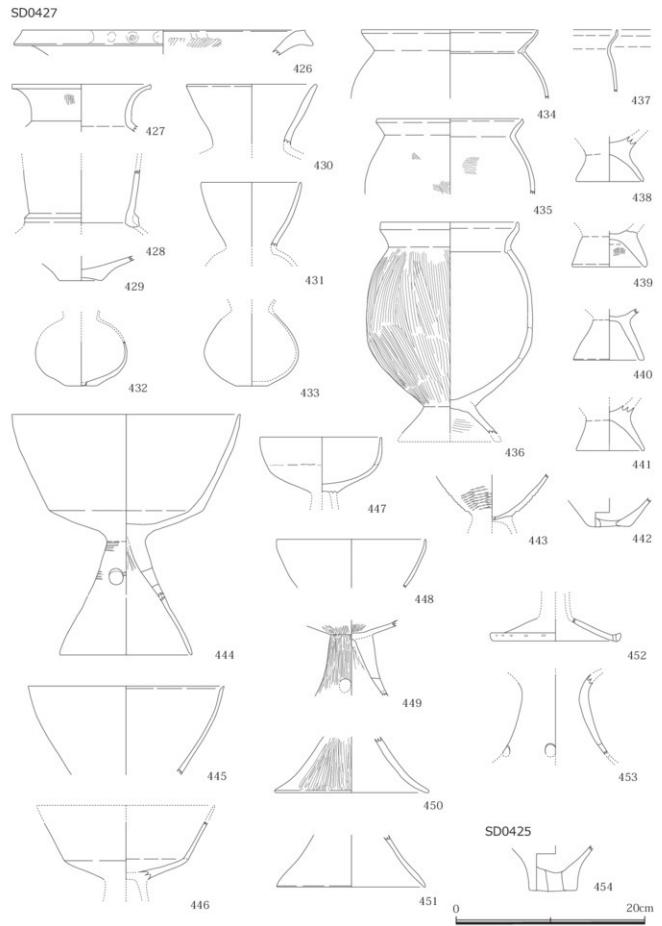


Fig.56 SD0425/27 出土遺物 (S=1/4)

422～425までが土師器で、422は高台付の杯、423は鍋、424・425が甕となる。422の杯の出土も、当調査区では稀有な存在である。425は口縁端部をつまり上げる。

このように、6世紀代の須恵器や土師器が混じるが、中心となるのは7世紀代のものだと想定される。

SD0425/27 (Fig.56)

426～453がSD0427、454はSD0425の出土遺物である。

426以下、全て弥生土器であるが、433までが甕となる。426は全体に磨滅が著しく文様が不鮮明である

が、口縁内面には綾杉文1段半が施されている。口縁端部には円形浮文があったのか、竹管刺突が認められる。427の頸部外面には縱方向のミガキが認められる。

428は長頸甕になろう。431の口縁は明確に内湾する。

432・433は瓢甕になるとを考えられる。

434～443までが甕である。434は薄手で白色系の特徴ある胎土であり、内湾する口縁を持つ。436は受口甕で、半分くらい残存している。443はタタキ甕であるが、脚台部が剥落したような痕跡が残る。

444～452は高杯である。444は口径23.9cm、径深16.2cmで、径深比率は67.8となる。脚部の透かしは3箇所あけられる。445と446は図化後に接合した。

SD0442/32

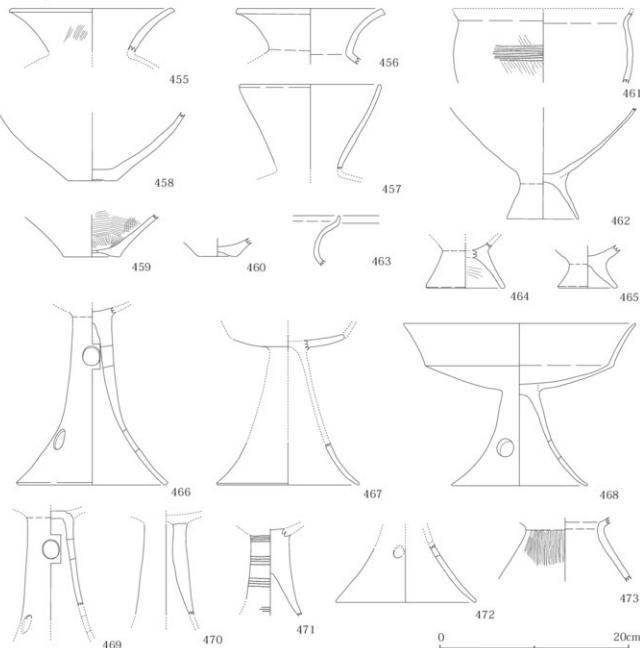


Fig.57 SD0442/32 出土遺物 (S=1/4)

447は楕形の高杯になる。452は脚壠部に約2cm間隔で、直径3mm程度の円孔があけられている。453は器台であろう。

454はSD0425出土の甕の底部片であるが、底の中央が穿孔されている。

このように多くの遺物が出土しており、概ね廻間式を中心としていることが明らかである。

SD0442/32 (Fig.57)

455～473がSD042/32の出土遺物である。455～460までが甕である。457は内溝した口縁形状を呈する。461～465までが甕である。461体部に7条の直線文を施している。466～472までは高杯となる。466と469は脚部の上部に1箇所の円孔をあけ、下部には同じ円孔をおそらく3箇所施している。471には3～4条の直線文が、少なくとも4段以上施される。468の口径は24.4cm、杯部の深さは6.4cmで、径深比率は26.2となる。脚部には円孔が3箇所あけられる。473は中空の器台で、よく磨かれてる。

このように、山中式の遺物が中心として出土している。

SD0430/49/82/77 (Fig.58)

474～481までがSD0430/49/82/77の出土遺物である。474～476が甕で、474は口縁上面に面をもつものの、肝心の文様が磨滅のために不明である。477・478は高杯で、山中式の範疇である。479は甕の底部で、480は須恵器杯身である。

480は混入と考えられ、山中式が中心である。

SD0446/38 (Fig.58)

481～488がSD0446/38の出土遺物である。481は内溝する長頸甕である。482は鉢となる。483～486が甕で、486はS字甕の脚台部になるかもしれない。487・488は高杯で、487は楕形の高杯になる。

このように、廻間式前後の遺物が比較的まとまっている。

SD0441/44 (Fig.58)

489～493がSD0441/44の出土遺物である。489・490は高杯である。489の杯部はすでに段が消滅している。491・492は台付甕の脚台部である。493は繩文土器で、おそらく中期後半の脚部破片であろう。

493は混入であるが、他は廻間式の遺物が中心となっている。

SD0447 (Fig.58)

494～496がSD0447の出土遺物である。494・495は甕で、496は台付甕である。

全体の出土量は少ないが、山中式から廻間式頃の遺物が中心として出土している。

SD0440/86 (Fig.58)

497・498がSD0440の出土遺物である。497は甕で、498は甕の底部であろう。内面には焦げの跡が残る。

全体の出土量は少ないが、山中式前後の遺物が出土している。

SD0424/31 (Fig.58)

499のく字甕と500の山中式の高杯が出土した。出土量は少ないが、山中式前後の遺物が出土している。

SD0405/11/61/68 (Fig.59)

501～518がSD0405/11/61/68の出土遺物である。

501～509までが甕である。501の口縁端部に6条以上の凹線文を施し、内面には2段にわたる放射状の刺突が施される。502～504は同一個体と考えられる。504の外面上には斜め方向の太いタテミガキが施される。505も504の底部と似てつくりであるが、厚さが薄い。507は口縁内面に綾杉文があるが、磨滅が著しく判然としない。508の外面上は縱方向に磨き、内面は横方向のハケが残る。509は受口状口縁の甕であろう。内面にはオサエの痕跡が観察される。

510は甕である。口縁は短く外方へ直線的に開く。

511～517までが高杯である。511・512は盤状の高杯で、511にはヘラミガキが施される。513は盤状高杯の脚部であろう。514は小型高杯の脚部で、密なミガキが施される。515は加飾された高杯の脚部で、直線文と貝殻かと思しき刺突が繰り返される。ミガキも密に施され、円孔は3箇所あけられる。516は廻間式の高杯と考えられる。

518は大型の鉢である。口縁には片口がつけられ、体部には2個1対のアーチ状把手が貼り付けられる。

516の高杯は混在と考えられるが、他は八王子古宮式併行の遺物が多く出土している。

SD0409 (Fig.60)

519～521がSD0409の出土遺物である。519は土師器の皿である。520は縄縫陶器の椀である。当調査区では唯一の出土である。521は須恵器の甕で、波状文と沈線を繰り返す。

弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器等、遺物の混在が著しいが、519 の土師器皿の 15 ~ 16 世紀頃が本来の遺構の年代だと推測される。

SD0396/121 (Fig.60)

522・523 は SD0396、524 が SD03121 の出土遺物である。

522 は弥生土器の壺で、523 は須恵器の壺である。
524 は弥生土器の壺で、底部が穿孔される。

この他にも、弥生土器や須恵器、中近世の陶磁器や瓦

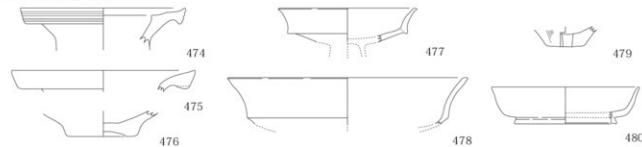
片が含まれており、遺物の混在が著しい。遺構自体は近現代の地割溝だと考えられる。あるいは中世頃の溝が近現代まで重複して存在しているのかもしれない。

SD03110 (Fig.60)

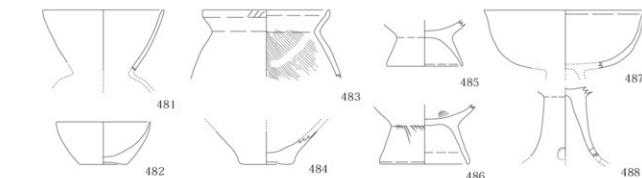
525 ~ 528 が SD03110 の出土遺物である。525 ~ 527 は高杯で、528 は台付甕である。525 は山中式の古手の形状をしており、内外面とも太めのミガキを施す。
526 は直線文を少なくとも 5 段以上施す。
527 は直線文を少なくとも 5 段以上施す。

このように、山中式の遺物が中心となっている。

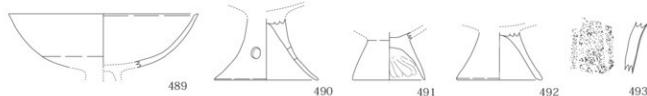
SD0430/49/82/77



SD0446/38



SD0441/44



SD0447

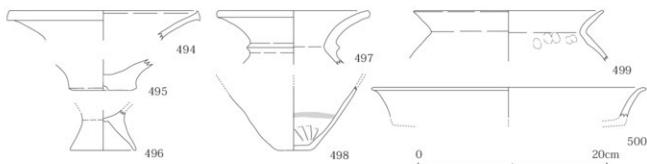


Fig.58 SD0430/49/82/77 · SD0446/38 · SD0441/44 · SD0447 · SD0440/86 · SD0424/31 出土遺物 (S=1/4)

SD0405/11/61/68

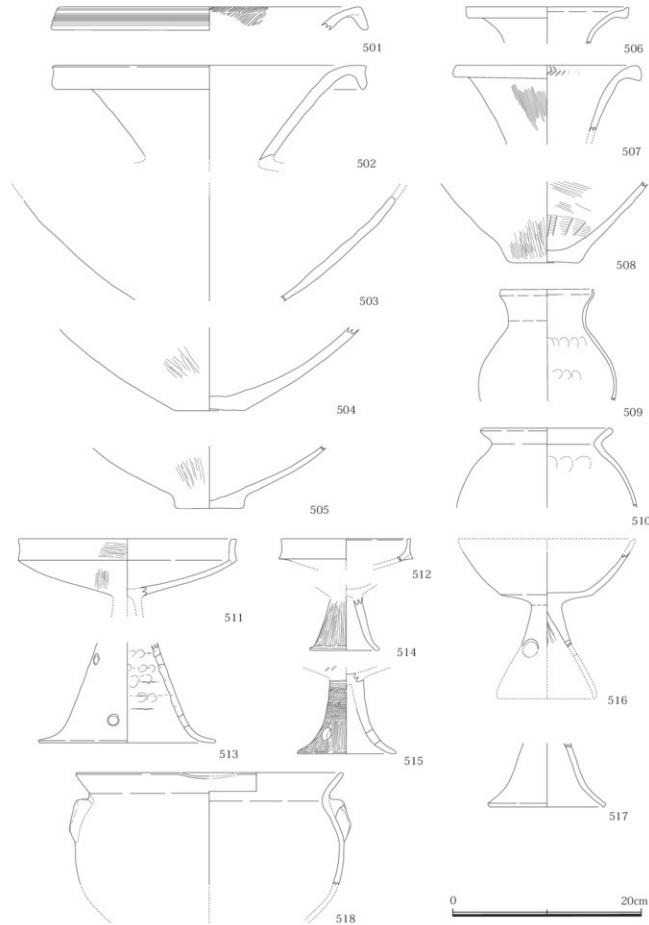


Fig.59 SD0405/11/61/68 出土遺物 (S=1/4)

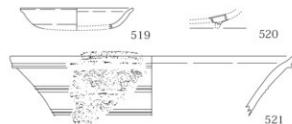
SD0417 (Fig.60)

529は弥生土器の壺で、530は甕となる。出土遺物は少ないので、弥生時代後期頃の遺物が主体となっている。

SD0414 (Fig.60)

531は弥生土器で、台付甕の脚台部である。出土遺物は極めて少ないので、概ね弥生土器で占められる。

SD0409



SD0460 (Fig.60)

532は弥生土器の甕である。口径 25.0cm と比較的大型品である。出土遺物は極めて少ないので、概ね弥生土器で占められる。

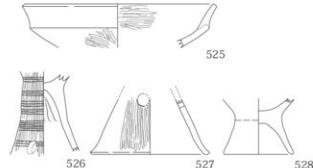
SD0466 (Fig.60)

533～535がSD0466の出土遺物である。533・534

SD0396/121



SD03110



SD0417



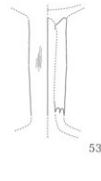
SD0414



SD0460



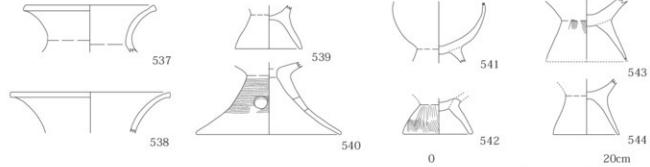
SD0466



SD0467



SD0478/85



0 20cm

Fig.60 SD0409ほか出土遺物 (S=1/4)

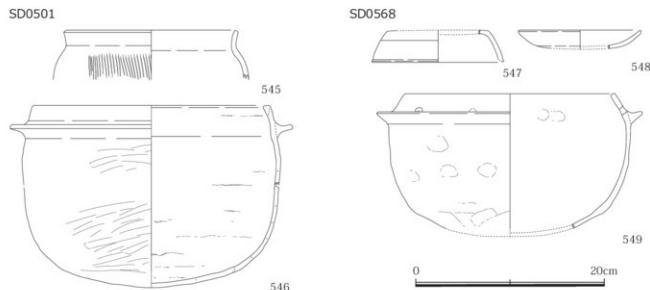


Fig.61 SD0501・SD0568出土遺物 ($S=1/4$)

とも弥生土器の壺で、535は楕円形の高杯である。このように、山中式から廻間式前後の遺物がまとまっている。

SD0467 (Fig.60)

536は弥生土器の高杯であろう。細身の筒形で、杯部、脚端部とも欠落するが、外面にはミガキが施される。弥生土器が主体である。

SD0478/85 (Fig.60)

537～544がSD0478/85の出土遺物である。537・538はともに壺で、539が台付壺、540が器台となる。540の脚部には6条1単位の直線文が4単位観察される。541は脚付短頸壺になろうが、他は台付壺である。

出土遺物は弥生土器で占められ、概ね山中式から廻間式の頃のものが主体であろう。

SD0501 (Fig.61)

545は須恵器の壺である。口縁は直立気味で、端部は丸みをもつ。内面は平滑にロクロナデされるが、外面上にはハケが残されている。ハケは土師器の製作技法が取り入れられたのであろう。

546は土師器の羽釜である。口径は26.8cmあり、器高は約20cmに復元される。底部は比較的平たい形状をしており、脚部以下は細かい単位のケズリが施される。また、保付着も頗るである。

出土遺物は多くはないが、弥生土器や土師器、須恵器が混在している。遺構自体は羽釜の年代である、15～16世紀頃と考えられる。

SD0568 (Fig.61)

547～549がSD0568の出土遺物である。547は須恵器の蓋であろうか。口縁内面を僅かに欠損する。548は土師器の皿で、549が羽釜となる。549は2孔を1単位とする吊手の孔が2箇所用意されていたようである。脚部以下には煤が付着するが、上半はオサエ、下半は板ナデの面が残る。

出土遺物には土師器や須恵器が混在するものの、土師器皿や羽釜の中世の遺構だと判断できる。

3 単独ピット (Fig.62)

550～571までを図示した。550～557までが第4次調査区からの出土である。552の須恵器杯蓋と553の土師器碗は、5～6世紀頃の組み合わせとして認識できる。554は須恵器の裏で、内面はロクロナデ、外面にはタタキを施す。556は輪の羽口の破片である。557は鉄製品で、ヤリガンナあるいは刃子等になろう。

558～571は第5次調査区の出土である。558・561は須恵器杯蓋で、562が須恵器のハソウの口縁部である。563・567は宇田型壺で、568・570の高杯は山中式になろう。571は土師器の壺である。

いずれも山中式から廻間式にかけてか、古墳時代の5～6世紀代のものであり、他の遺構出土の遺物とかわりない。

4 包含層ほか (Fig.63・64)

572～607が包含層として取り上げたものである。572～576は弥生土器の壺である。572は口縁端部を欠損するが、頭部に円孔2箇所以上施す。573は口

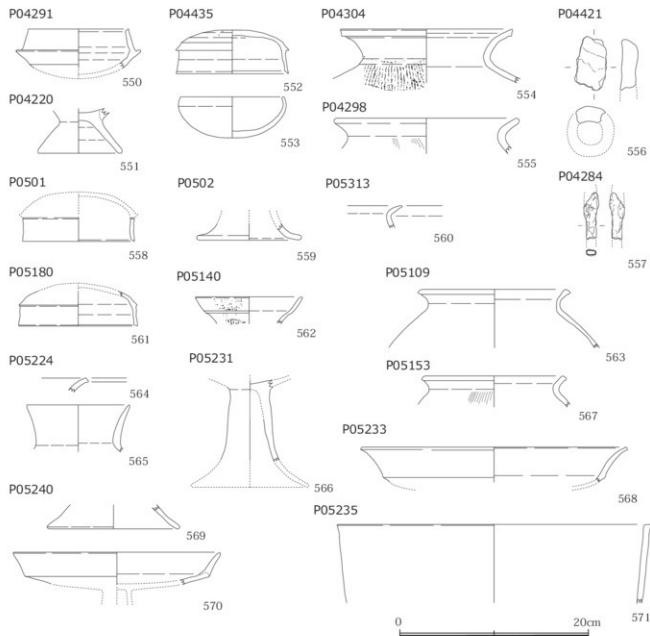


Fig.62 単独ピット出土遺物 (S=1/4)

縁内面に綾杉文を1段とその下に円形刺突を巡らすようである。

577～581は甕である。580は弥生土器であろうが、他は土師器の可能性が高い。582・583は鍋の把手部分である。

584～588は高杯である。584は山中式の高杯で、585も山中式から廻間式の頃のものである。他は土師器で5～6世紀の所産であろう。

589～606が須恵器である。589～596までが杯身であるが概ね6世紀代のものである。599～601は杯蓋であるが、同時期のものである。597・598は高杯である。597は無蓋高杯であり、外側には波状文が施されている。598は方形透かしがあけられている。602は杯B身

であり、7世紀以降の所産であろう。603は須恵器の短頸壺であろう。ロクロナデ成形される。604～606は須恵器の甕である。

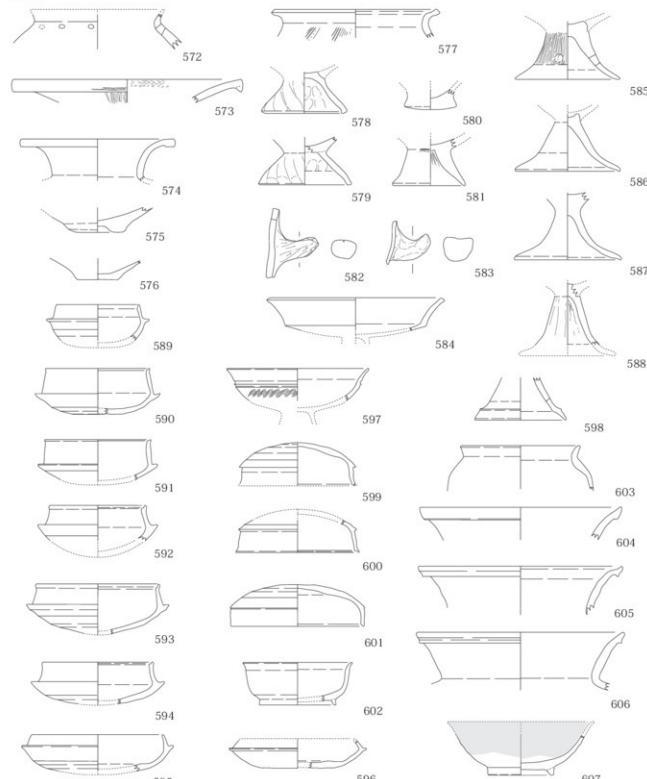
607は唯一の灰釉陶器の碗である。口縁部を欠損するが、内外面にツケガケの痕跡が認められる。

608～613は表面採取したものである。山中式頃の弥生土器と5～6世紀の須恵器、土師器である。

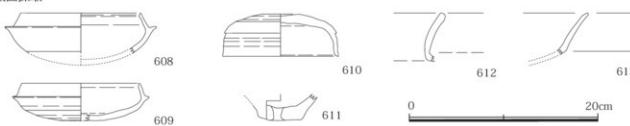
614～616は、第4次調査区の調査開始当初に、中央南北セクション沿いにサブレンチを掘削した際に出土したものと括した。いずれも弥生土器の高杯である。

617は第4次調査区のBJライン南北セクションから出土した。弥生土器で、高い台が付く甕になろうか。618は第4次調査区の14ライン東西セクションから出土し

包含層



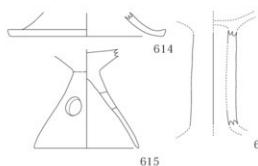
表面採取



0 20cm

Fig.63 包含層・表面採取出土遺物 (S=1/4)

第4次調査区
中央南北セクションサブトレンチ



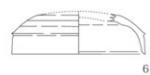
第4次調査区
BJライン南北セクション
サブトレンチ



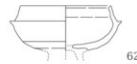
第4次調査区
14ライン東西セクション
サブトレンチ



現代地割溝



表土



0 20cm

Fig.64 サブトレンチ・現代地割溝・表土出土遺物 (S=1/4)

た。弥生土器の受口甌である。

619・620は第5次調査区の現代地割溝から出土した。いずれも須恵器であるが、620は接合部が剥落していることから、高杯であることが分かる。

621・622は第5次調査区の表土除去の際に採取したものである。621は土師器の羽釜で、本来はSD0501の出土である可能性が高い。622は須恵器の杯身である。いずれかに遺構に伴ったものであろうが、不明である。

5 その他

時間的な制約から図示し得なかったものがあるので、以下、特徴ある遺物のみ列挙しておく。

Tab.5-1 遺物観察表

登録番号	登録年	登録者	種類	基盤	時代	場所	通測・相位	直横	直横・相位	調査・出土地の特徴		記入者	備考	色調	状態	保存度	付記事項
										直横	直横・相位						
001	4	009	須恵器	羽釜	JH11	SH0474 下層	SH0474 下層	12.2	4.5	内:ロクロナゼー 不整な片手ナゼー(横切削)外:片手ナゼー	直	2	灰灰	良好	1/3		
002	4	010	須恵器	杯蓋	JH11	SH0474 上層	SH0474 上層	13.2	-	内:ロクロナゼー 不整な片手ナゼー(横切削)外:片手ナゼー	直	3	灰白	良好	1/3にして1/8		
003	4	004	須恵器	杯蓋	JH11	SH0474 剥離下層	SH0474 剥離下層	14.5	3.7	内:ロクロナゼー 不整な片手ナゼー(横切削)外:片手ナゼー	直	-	灰	良好	1/3にして1/4		
004	4	007	須恵器	蓋	JH11	SH0474 下層	SH0474 下層	13.4	4.0	内:ロクロナゼー 不整な片手ナゼー(横切削)外:片手ナゼー	直	-	灰白	良好	休耕面内	外側に陥没痕	
005	4	008	須恵器	高杯	JH11	SH0474 下層	SH0474 下層	9.0	-	内:ロクロナゼー	直	2	灰	良好			
006	4	002	須恵器	蓋	JH11	SH0474 剥離	SH0474 剥離	-	-	内:ロクロナゼー 不整な片手ナゼー(横切削)外:片手ナゼー	直	-	灰灰	良好	底面にて劣化		
007	4	013	須恵器	ハリワ	BR ライン	SH0474 壁面へ付着	SH0474 壁面へ付着	-	2.5	内:ロクロナゼー	直	良	休耕面内				

Tab.5-2 遺物観察表

008	4	316	須磨島	ハツク	山口	590474 勝利		内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便、糞丸	南	1.2	灰	直線を欠く
009	4	006	須磨島	梅	山口	590474 下巻	12.6 (20cm. 粘土質)	内:糞便のための明	南	2.5	淡黒	直/横にて1/3
010	4	121	須磨島	ぐまき	山口	590474 下巻	13.6 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.3	白	直/横にて1/3
011	4	001	須磨島	ぐまき	山口	590474 上巻	14.6 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.5	淡黒	直/横にて1/4
012	4	012	土師器	ぐまき	山口	590474 上巻	17.6 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.4	白	直/横にて1/8
013	4	003	須磨島	セラミック	山口	590474 上巻	17.6 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ 外:ロコリダ	南	1.5	淡黒	直/横にて1/2
014	4	014	須磨島	梅	山口	590474 上巻	21.2 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	1.5	淡黒	直/横にて1/6
015	4	428	須磨島	糞便	山口	590474-590474	12.8	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/6
016	4	429	須磨島	糞便	山口	590474-590474	11.8	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	1	灰黒	直/横
017	4	430	須磨島	有茎高砂	山口	590474-590474	12.8 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	1.3	青黒	直/横にて1/3
018	4	339	須磨島	有茎高砂	山口	590474-590474	12.8 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	2.3	内:青黒 外:青	直/横にて1/8 内面に自然輪行する
019	4	504	須磨島	高砂	山口	590474-590474	69 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	2.4	青黒	直/横にて1/6
020	4	503	土師器	くまき	山口	590474-590474	13.0 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.4	青黒	直/横にて1/8
021	4	340	土師器	山田型	山口	590474-590474	13.4 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	1	青黒	直/横にて1/8
022	4	022	土師器	山田型	山口	590474-590474	13.6 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/6
023	4	300	須磨島	有茎高砂	山口	590474-東半分	内:ロコリダ 外:ロコリダ、海綿、糞便のための明	南	1.2	内:青黒 外:青	直/横にて1/3	
024	4	501	土師器	梅高砂	山口	590474-東半分	8.2	内:糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/8
025	4	505	須磨島	梅高砂	山口	590484-1	17.0 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.4	青黒	直/横にて1/3
026	4	506	須磨島	竹葉	山口	590484-1	9.0 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	1.4	青黒	直/横にて1/8
027	4	025	須磨島	ぐまき	山口	PO4260	13.7 3.2 12.2 11.8 10.8 9.8 8.8 7.8 6.8 5.8	内:糞便 内:糞便のための明	中中	2.5	淡赤	直/横にて1/8
028	4	026-1	須磨島	糞	山口	PO4260	3.0 (20cm. 粘土質)	内:ハイドロガラ 内:ハイドロガラ、密状記、密状上記記	中中	1.2	淡赤	直/2 外に密付材、下部の底
029	4	026-2	須磨島	糞	山口	PO4260	5.0 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.5	内:青黒 外:青	直/横にて1/2
030	4	415	須磨島	糞	山口	590428-29	22.8 (20cm. 粘土質)	上層:糞便 下層:糞便のための明	南	2.5	青黒	直/横にて1/8
031	4	324	須磨島	糞	山口	590428-29	20.6 (20cm. 粘土質)	上層:糞便 下層:糞便のための明	南	1.3	青黒	直/横にて1/3
032	4	255	須磨島	糞	山口	590428-29	18.7 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.4	青黒	直/横にて1/6
033	4	257	須磨島	糞	山口	590428-29	16.6 (20cm. 粘土質)	上層:糞便 下層:糞便のための明	南	2.4 8.10	内:青黒 外:青	直/横にて1/8
034	4	120	須磨島	糞	山口	590428-29	16.8 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/8
035	4	126	須磨島	糞	山口	590428-29	16.5 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.4	青黒	直/横にて1/8
036	4	087	須磨島	糞	山口	590428-29	16.2 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	4	青黒	直/横にて1/6
037	4	037	須磨島	糞	山口	590429	16.4 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	3	青黒	直/横にて1/12
038	4	333	須磨島	糞	山口	590429	16.8 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.2	青黒	直/横にて1/8
039	4	130	須磨島	糞	山口	590428	16.0 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/8
040	4	088	須磨島	糞	山口	590428-29	12.4 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	3.4	青黒	直/横にて1/4
041	4	259	須磨島	糞	山口	590428-29	20.6 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	1.4	青黒	直/横にて1/3
042	4	116	須磨島	糞	山口	590428-29	5.8 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.3	内:青黒 外:青	直/横にて1/2
043	4	129	須磨島	糞	山口	590428	4.9 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.4	青黒	直/横にて1/8
044	4	115	須磨島	糞	山口	590428-29	8.2 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.4	青黒	直/横にて1/3
045	4	127	須磨島	糞	山口	590428-29	13.6 (20cm. 粘土質)	内:ハイドロガラ 内:糞便のための明	南	2.4	青黒	直/横にて1/6
046	4	202	須磨島	糞	山口	590428-29	17.4 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	-	青黒	直/手間にて1/8
047	4	090	須磨島	糞	山口	590428-29	13.6 (20cm. 粘土質)	内:オキニ 内:糞便のための明	南	2.5	青黒	直/横にて1/6
048	4	121	須磨島	糞	山口	590428-29	13.4 (20cm. 粘土質)	内:糞便 内:糞便のための明	南	3	青黒	直/横にて1/8
049	4	122	須磨島	糞	山口	590428-29	16.0 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	1.3	青黒	直/横にて1/8
050	4	211	須磨島	S-糞	山口	590428-29	17.0 (20cm. 粘土質)	内:オキニ 内:糞便のための明	南	1.2	青黒	直/横にて1/3
051	4	093	須磨島	S-糞	山口	590428-29	19.2 (20cm. 粘土質)	内:糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/4
052	4	131	須磨島	糞	山口	590428	8.4 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.4	青黒	直/横にて1/4
053	4	113	須磨島	糞	山口	590428-29	11.8 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ 内:糞便のための明	南	2.4 5.0	内:青黒 外:青	直/横にて1/4
054	4	424	須磨島	糞	山口	590428-29	13.9 (20cm. 粘土質)	内:ロコリダ	南	-	青黒	直/横にて1/6
055	4	521	須磨島	糞	山口	590428-29	17.0 (20cm. 粘土質)	内:粘土質のための明	南	-	青黒	直/体表面の 内:糞便のための明
056	4	089	須磨島	糞	山口	590428-29	3.0 (20cm. 粘土質)	内:ナツカニ 内:糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/6
057	4	338	須磨島	糞	山口	590428-29	24.6 (20cm. 粘土質)	糞便のための明	南	2.5	青黒	直/縫隙を欠く
058	4	301	須磨島	糞	山口	590428-29	25.4 (20cm. 粘土質)	内:タカニ 内:糞便のための明	南	-	青黒	直/2
059	4	094	須磨島	糞	山口	590428-29	3.0 (20cm. 粘土質)	内:タカニ 内:糞便のための明	南	0.9	青	直/縫隙を欠く
060	4	114	須磨島	糞	山口	590428-29	18.0 (20cm. 粘土質)	内:タカニ 内:糞便のための明	南	-	青黒	直/横にて1/4

Tab.5-3 遺物観察表

061	4	119	寄生土壠 高砂	SH0428-29	20.0	樹齢のため不明	中・中細	2.4	黄灰	良	1面にて1.6
062	4	123	寄生土壠 高砂	SH0428-29	11.0	樹齢のため不明	南	3.4	灰灰	良	1面にて1.2
063	4	254	寄生土壠 高砂	SH0428-29	12.1	円孔、3ヶ所	南	1.9	中細	良	1面にて0.6
064	4	125	寄生土壠 高砂	SH0428-29	10.0	円孔、3ヶ所	中・中細	3.4	灰灰	良	1面にて1.2
065	4	692	寄生土壠 高砂	SH0428-29	13.5	円孔、樹齢のため不明	南	3	黄灰	良	1面にて1.8
066	4	112	寄生土壠 高砂	SH0428-29	12.6	円孔、樹齢のため不明	中・中細	3.5	灰灰	良	1面にて1.2
067	4	691	寄生土壠 高砂	SH0428-29	10.0	円孔、3ヶ所	中・中細	2.4	灰灰	良	1面にて1.6
068	4	117	寄生土壠 路台 中砂化セメントランプ	SH0428-29	—	円孔、樹齢のため不明	中・中細	2.5	灰灰	良	1面にて0.6
069	4	124	寄生土壠 高砂	SH0428-29	—	樹齢のため不明	南	3.5	灰灰	良	1面にて0.6
070	4	118	寄生土壠 高砂	SH0428-29	16.2	樹齢のため不明	南	—	灰	良	1面にて1.6
071	4	288	寄生土壠 岩	SH0454	19.0	内・外の色が全く違う	南	1	灰灰	良	1面にて1.8
072	4	290	寄生土壠 岩	SH0454	—	内・外の色が全く違う	南	2.4	灰灰	良	1面にて1.4
073	4	431	寄生土壠 岩	SH0454	5.8	樹齢のため不明	南	7	灰	良	1面にて2.3
074	4	292	寄生土壠 岩	SH0454	5.1	樹齢のため不明	南	1.2	灰	良	1面にて0.6
075	4	297	寄生土壠 岩	SH0454	8.9	樹齢のため不明	南	—	灰灰	良	1面にて1.8
076	4	336	寄生土壠 高砂	SH0454	14.2	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて0.6
077	4	507	寄生土壠 高砂	SH0454	11.0	内・外の色が全く違う	中・中細	2.4	灰灰	良	1面にて1.3
078	4	29	寄生土壠 受け置	SH0454	16.0	内・外の色が全く違う	中・中細	2.3	灰灰	良	1面にて1.6
079	4	337	廻り石 丹波	SH0454	11.0	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰	中・中細	1.0
080	4	105	寄生土壠 岩	SH05134	15.4	樹齢のため不明	中・中細	2.4	灰灰	良	1面にて1.4
081	4	103	寄生土壠 高砂	SH05134	25.4	内・外の色が全く違う	中・中細	1.2	灰灰	良	1面にて1.6
082	4	107	廻り石 初年度	HD01	SH05134	内・外の色が全く違う	南	—	灰	良	1面にて1.4
083	4	111	廻り石 覆	HD01	SH05134	内・外の色が全く違う	南	—	灰	良	1面にて0.6
084	4	520	廻り石 ぐるま	HD01	SH05134	内・外の色が全く違う	南	2.3	灰灰	良	1面にて1.6
085	4	432	廻り石 小判型	HD01	SH05134	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて1.2
086	4	234	廻り石 くず葉	HD01	SH05140	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて1.3
087	4	425	廻り石 くず葉	HD01	SH05145	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて1.6
088	4	216	廻り石 高砂	HD01	SH05141	内・外の色が全く違う	南	2.5	灰灰	良	1面にて0.6
089	4	303	廻り石 高砂	HD01	SH05142	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて1.6
090	4	213	廻り石 高砂	HD01	SH05142	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて0.6
091	4	516	寄生土壠 岩	SH05140	18.6	内・外の色が全く違う	南	2.7	灰灰	良	1面にて0.6
092	4	147	寄生土壠 岩	SH05140	樹齢5	内・外の色が全く違う	南	1.5	灰灰	良	1面にて1.4
093	4	144	寄生土壠 くず葉	HD01/11	SH05140	内・外の色が全く違う	中・中細	3.0	灰灰	良	1面にて1.4
094	4	145	寄生土壠 くず葉	HD01/10	SH05140	内・外の色が全く違う	中・中細	2.3	灰灰	良	1面にて1.8
095	4	157	寄生土壠 くず葉	HD01	SH05140	内・外の色が全く違う	中・中細	3.5	灰灰	良	1面にて1.8
096	4	212	廻り石 高砂	HD01	SH05140	内・外の色が全く違う	南	3.0	灰灰	良	1面にて0.6
097	4	143	寄生土壠 台付壁	HD10/11	SH05140	内・外の色が全く違う	南	1.2	灰灰	良	1面にて1.2
098	4	149	廻り石 丹波	HD10	SH05140	内・外の色が全く違う	南	1	灰	中・中細	1.0
099	4	201	寄生土壠 高砂	HD01	SH05140	内・外の色が全く違う	南	1.4	灰灰	良	1面にて1.6
100	4	104	寄生土壠 高砂	HD10	SH05140	内・外の色が全く違う	南	2.4	灰灰	良	1面にて1.6
101	4	150	寄生土壠 高砂	HD11	SH05140	内・外の色が全く違う	南	—	灰灰	良	1面にて1.6
102	4	146	寄生土壠 高砂	HD09	SH05140	内・外の色が全く違う	中・中細	1.4	灰灰	良	1面にて1.4
103	4	145	寄生土壠 高砂	HD11	SH05140	内・外の色が全く違う	中・中細	3.5	灰灰	良	1面にて1.8
104	4	155	寄生土壠 岩	HD09	PO4451	内・外の色が全く違う	南	4	灰灰	良	1面にて1.8
105	4	151	寄生土壠 岩	HD10/11	PO4451	内・外の色が全く違う	南	1.2	灰灰	良	1面にて1.6
106	4	201	寄生土壠 高砂	HD10	PO4451	内・外の色が全く違う	南	2.4	灰灰	良	1面にて1.8
107	4	153	寄生土壠 高砂	HD11	SH05140	内・外の色が全く違う	南	—	灰灰	良	1面にて1.6
108	4	412	寄生土壠 路台	HD01/11	SH05140	内・外の色が全く違う	南	1.3	灰灰	良	1面にて1.8
109	4	159	寄生土壠 路台	HD01/11	SH05140	内・外の色が全く違う	南	—	灰灰	良	1面にて1.6
110	4	152	寄生土壠 路台	HD01	SH05140	内・外の色が全く違う	南	3.2	灰灰	良	1面にて1.6
111	4	335	寄生土壠 岩	HD10	SH05140	内・外の色が全く違う	南	2.5	灰灰	良	1面にて1.8
112	4	286	寄生土壠 台付壁	HD14	SH05140	内・外の色が全く違う	南	8.3	内・外・外	良	1面にて1.6
113	4	426	土壠路 台付壁	HD01/11	SH05140	内・外の色が全く違う	南	8.0	内・外・外	良	1面にて1.8
114	4	341	寄生土壠 岩	HD13	SH05140	内・外の色が全く違う	南	11.4	内・外の色が全く違う	良	1面にて1.6
115	4	317	寄生土壠 岩	HD13	SH05140	内・外の色が全く違う	南	7.2	内・外の色が全く違う	良	1面にて1.3

Tab.5-4 遺物観察表

116	4	513	寄生土器 受け置	HI13	SH0456	16.6	内・縫合部・内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	中空部	1.3	内・縫合部	直・内縫合で1/4	
117	4	293	寄生土器 く字型	HI13	SH0456	17.6	内・縫合部のため直角 ポイント	直	内縫合	直	内縫合で1/8	
118	4	516	寄生土器 置	HI13	SH0456		内・縫合部のため直角 ポイント	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/2	
119	4	514	寄生土器 蓋	HI13	SH0456	14.6	上縫合部 内面・タマシカト	直	2	内縫合	直・内縫合で1/4	
120	4	512	寄生土器 高杯	HI13	SH0456	35.2	内・リニア・ガラス 内・縫合部のため直角 (直角)	直	1.5	内縫合	直・内縫合で1/4 内側の内引は直角のため直角	
121	4	514	寄生土器 高杯	HI13	SH0456		内・縫合部のため直角 内・内引なし・内・直角文	直	1	内縫合	直・内縫合で1/2	
122	4	162	寄生土器 置	HI14	SH0455	30%	23.6	内・縫合部 分・内・縫合	中空部	4	内縫合	直・内縫合で1/2
123	4	161	寄生土器 置	HI14	SH0455	80%	24.2	内・縫合部 分・内・縫合	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/6
124	4	321	寄生土器 置	HI14	SH0455	100%	26.8	内・縫合部 分・内・縫合	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/4
125	4	160	寄生土器 置	HI12	SH0455	18.0	縫合部のため直角	直	3	内縫合	直・内縫合で1/8	
126	4	173	寄生土器 直脚	HI11	SH0455	20.0cm	内・オキナ 内・直角文	直	3.5	内・内縫合	直・内縫合で1/6	
127	4	171	寄生土器 直脚	HI12	SH0455	厨子型	縫合部のため直角	直	2.3	内縫合	直・内縫合で1/4	
128	4	175	寄生土器 置	HI12	SH0455	14.0	内・縫合部 分・内・縫合 内・縫合部のため直角	直	2.5	内縫合	直・内縫合で1/6	
129	4	259	跡	HI13	SH0455	9.0	内・縫合部 分・内・縫合 内・縫合部 分・内・縫合	直	-	内縫合	直・内縫合で1/3	
130	4	163	寄生土器 く字型	HI13	SH0455	13.4	内・縫合部 分・内・縫合 内・縫合部 分・内・縫合	直	-	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
131	4	168	寄生土器 受け置	HI12	SH0455	15.8	内・縫合部 分・内・縫合 内・縫合部 分・内・縫合	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/8	
132	4	325	寄生土器 陶器	HI13	SH0455	14.8	内・縫合部 分・内・縫合 内・縫合部 分・内・縫合	直	1.4	内縫合	直・内縫合で1/6	
133	4	261	寄生土器 高杯	HI13	SH0452	30.066-69	内・内引	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/8	
134	4	174	寄生土器 高杯	HI14	SH0455	27.8	縫合部のため直角	直	1	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
135	4	511	寄生土器 高杯	HI13	SH0455	28.0cm	内・縫合部 分・内・縫合	直	-	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
136	4	157	寄生土器 高杯	HI13	SH0455	10.6	縫合部のため直角	中空部	3	内縫合	直・内縫合で1/8	
137	4	509	寄生土器 高杯	HI12	SH0455	15.4	縫合部のため直角	直	1.6	内縫合	直・内縫合で1/8 天地地から	
138	4	508	寄生土器 高杯	HI14	SH0455	足付直脚	縫合部のため直角	直	1.2	内・内縫合	直・内縫合で1/4	
139	4	260	寄生土器 高杯	HI13	SH0455/ SH0466-69	24.4	内・ナマケ	直	1.2	内・内縫合	直・内縫合で1/6	
140	4	164	寄生土器 高杯	HI14	SH0455-ル透蓋	16.0	縫合部のため直角	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/3 穿孔あり	
141	4	164	寄生土器 高杯	HI13	SH0455	14.6	縫合部のため直角	直	1.3	内縫合	直・内縫合で1/3	
142	4	168	寄生土器 高杯	HI13	SH0455	14.5	内・縫合部のため直角	直	1.4	内・内縫合	直・内縫合で1/3	
143	4	324	寄生土器 高杯	HI12	SH0455		縫合部のため直角	直	1.2	内・内縫合	直・内縫合で1/4	
144	4	522	寄生土器 高杯	HI12	PO4242	44.8	内・縫合部 分・内・縫合	直	1.5	内・内縫合	直・内縫合で1/2 大型地	
145	4	265	寄生土器 高杯	HI12	PO4242	36.8	内・縫合部 分・内・縫合 縫合部のため直角	直	1.3.7	内縫合	直・内縫合で1/8	
146	4	065	寄生土器 高杯	HI12	PO4242	37.7	内・縫合部 分・内・縫合 内・オキナ	直	1.0	内・内縫合	直・内縫合で1/4	
147	4	264	寄生土器 置	HI13	SH0455-直脚	11.6	縫合部のため直角 内・ナマケ	直	1.4	内縫合	直・内縫合で1/4 内底に黒斑あり	
148	4	066	寄生土器 置	HI12	SH0455-直脚	11.0	縫合部のため直角	直	3	内・内縫合	直・内縫合で1/6	
149	4	292	跡	HI12	PO4242	15.5	縫合部のため直角	直	2.6	内・内縫合	直・半球状で穴	
150	4	330	寄生土器 置	HI12	PO4242	9.7	内・縫合部のため直角	中空部	1.9	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
151	4	098	寄生土器 置	HI12	SH0455-直脚	4.0	内・縫合部のため直角	直	3	内・内縫合	直・内縫合で1/3	
152	4	097-1	寄生土器 置	HI12	PO4242	8.6	縫合部のため直角	中空部	2.4	内・内縫合	直・内縫合で1/2	
153	4	263	寄生土器 受け置	HI12	SH0455-直脚	15.6	内・縫合部 分・内・縫合 内・ナマケ 分・内・縫合の腹文	直	1.3	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
154	4	427	寄生土器 受け置	HI12	PO4242	15.5	内・縫合部 分・内・縫合 内・ナマケ 分・内・縫合の腹文	直	1.3	内・内縫合	直・内縫合で1/4 内底に黒斑文	
155	4	101	寄生土器 置	HI12	PO4242	10.0	内・縫合部 分・内・縫合 内・ナマケ 分・内・縫合	直	1.3	内・内縫合	直・内縫合で1/4 内・ナマケ 分・内・縫合	
156	4	100	寄生土器 タリヨリ	HI12	SH0455	10.5	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	3.4	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
157	4	069	寄生土器 置	HI12	PO4242	7.1	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	2.3	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
158	4	324	寄生土器 高杯	HI12	SH0455	6.0	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	4.2	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
159	4	324	寄生土器 高杯	HI12	SH0455	6.8	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	2.4	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
160	4	097-2	寄生土器 高杯	HI12	SH0455	18.0	縫合部のため直角	直	6	内・内縫合	直・内縫合で1/8 天地地から	
161	4	294	跡	HI12	PO4242	12.7	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	3	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
162	4	325-1	寄生土器 高杯	HI12	PO4242	12.6	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	2.5	内・内縫合	直・内縫合で1/8 内底に黒斑あり	
163	4	297	跡	HI12	PO4242	9.0	縫合部のため直角	直	1.3	内・内縫合	直・内縫合で1/3	
164	4	292	跡	HI12	PO4200	4.2	内・縫合部のため直角 ポイント	直	1.2	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
165	4	020	跡	HI12	PO4242	17.0	内・縫合部のため直角 ポイント	直	1.3	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
166	4	293	跡	HI12	PO4242	10.0	内・縫合部のため直角	直	2.5	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
167	4	299	跡	HI12	PO4242	15.9	縫合部のため直角	直	-	内・内縫合	直・内縫合で1/3	
168	4	021	寄生土器 く字型	HI13	PO4183	8.8	内・縫合部 分・内・ナマケ 内・ナマケ 分・内・ナマケ	直	2	内・内縫合	直・内縫合で1/6	
169	4	245	跡	HI13	PO4173	9.0	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	2.4	内・内縫合	直・内縫合	
170	4	109	寄生土器 高杯	HI11	SH0406	10.5	内・縫合部のため直角	直	1.2	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
171	5	079	寄生土器 付蓋	HI12	SH0572	5.0	縫合部のため直角	直	1.2	内・内縫合	直・内縫合で1/8	
172	4	132	跡	HI12	SH0408	12.9	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直	4.7	内・ナマケ 内・直角文・内・直角文	直・内縫合で1/4 自然地がかかる	

Tab.5-5 遺物観察表

123	4	414	須磨野 有苗高砂	HB-11	SH0408 青山切妻頭	11.8	内:ロココザ・外:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	内:青黄 外:青黄	良品	中古にて1/3
174	4	133	須磨野 有苗高砂	HB-011	SH0408 青山切妻頭	12.6	107	9.5	内:ロココザ・外:青黄	前	10	灰黄
175	5	231	須磨野 種垂	HB-11	SH0566 青山切妻頭	10.8	4.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/4
176	5	235	須磨野 有苗高砂	HB-11	SH0566 青山切妻頭	10.5	10.5	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/8
177	5	352	須磨野 種垂	HB-12	SH0566 青山切妻頭	14.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/3	
178	5	353	須磨野 種垂	HB-12	SH0566 青山切妻頭	19.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/3	
179	5	354	須磨野 種垂	HB-12	SH0566 青山切妻頭	12.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	2.5	灰黄 内:青黄	1/3	
180	5	355	須磨野 種垂	HB-12	SH0566 青山切妻頭	10.5	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄	1/8	
181	5	356	須磨野 種垂	HB-13	SH0566 青山切妻頭	14.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/3	
182	5	357	須磨野 種垂	HB-13	SH0566 芝西	19.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	2.5	灰黄 内:青黄	1/3	
183	4	416	須磨野 右田頭	SD-11	SH03136	24.1	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.2	4.247 内:青黄	1/4	
184	5	358	須磨野 芝西	HB-13	SH0566 北東頭	4.3	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.2	内:青黄	1/2	
185	4	404	土師野 台付	SH03136	萩原	7.0	内:ナガ・外:ナガ 内:ナガ(内:ナガ 内:ナガ(内:ナガ)	前	3	灰黄 内:青黄	1/2	
186	4	342	土師野 台付	HC-11	SH03136	萩原	9.7	内:オニエ 内:オニエ(内:オニエ 内:オニエ(内:オニエ)	前	1.4	灰黄 内:青黄	1/4
187	5	112	土師野 く字頭	HD-12	SH0566 芝西	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.2	灰黄 内:青黄	1/3		
188	5	100	土師野 く字頭	HD-13	SH0566 芝西頭	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.3	灰黄 内:青黄	1/3		
189	5	359	土師野 S字頭	HD-13	SH0566 芝西	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	内:青黄 内:青黄	1/3		
190	5	363	土師野 右田頭	HD-13	SH0566 芝西	18.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	中:中面	5.6	白 内:中	1/3	
191	5	234	須磨野 高砂	HB-11	SH0566 茶山切妻頭	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3		
192	4	104	須磨野 高砂	HD-12	SH03136 下顎	23.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	内:青黄 内:青黄	1/3	
193	5	412	須磨野 高砂	HD-12	SH0566 茶山切妻頭	6.8	内:ナガ 内:ナガ(内:ナガ 内:ナガ(内:ナガ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/3	
194	5	111	ニシマツ 頭骨	HD-11	SH0566 茶山切妻頭	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3		
195	4	110	土師野 頭骨	HD-11	SH03136 下顎	2.9	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
196	5	232	須磨野 右田頭	HB-13	SH0566 茶山切妻頭	12.5	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.3	灰黄	1/3	
197	5	420	石須野右田頭	HD-12	SH0566 内 P05232	13.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
198	5	302	須磨野 右田頭	HD-12	SH0566 北西	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.8	灰黄 内:青黄	1/3		
199	5	303	須磨野 右田頭	HD-12	SH0566 北西	14.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/3	
200	4	103	須磨野 种垂	HD-11	SH03136/139 下顎	12.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰黄 内:青黄	1/3	
201	5	358	須磨野 种垂	HD-11	SH0566 茶山切妻頭	10.7	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
202	5	360	土師野 く字頭	HD-11	SH0566 茶山切妻頭	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	内:青黄 内:青黄	1/3		
203	5	361	土師野 く字頭	HD-12	SH0566 茶山切妻頭	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	内:青黄 内:青黄	1/3		
204	4	088	須磨野 台付	SH03136/139 下顎	10.0	内:ナガ オリナ ハナ	前	3.6	灰黄 内:青黄	1/2		
205	4	102	須磨野 台付	HD-11	SH03136/139 下顎	7.3	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	3	灰黄 内:青黄	1/3	
206	4	237	ニシマツ 頭骨	HD-11	SH03136/139 下顎	3.8	2.3	3.7	内:ナガ ドナ	前	-	灰黄 内:青黄
207	5	088	須磨野 右田頭	HB-12	SH0565 内 P05231	20.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.3	灰黄 内:青黄	1/3	
208	5	083	須磨野 右田頭	HB-12	SH0565 内 P05282	6.4	内:ナガ 内:ミルガッタ	前	1	内:青黄 内:青黄	1/3	
209	5	080	須磨野 右田頭	HB-12	SH0565 内 P05258	15.3	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.3	灰黄 内:青黄	1/3	
210	5	089	須磨野 右田頭	HB-12	SH0565 北西	10.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
211	5	233	須磨野 右田頭	HB-12	SH0565 北西	11.0	4.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	2.5	灰黄 内:青黄	1/4
212	5	232	須磨野 右田頭	HB-12	SH0560 北西	11.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
213	5	12	須磨野 种垂	HB-11/12	SH0560 南	13.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰 内:青黄	1/3	
214	5	301	須磨野 种垂	HB-12	SH0560 植物	11.1	4.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1	灰 内:青黄	1/4
215	5	319	須磨野 有苗高砂	HB-11	SH0560 植物	内:ナガ	内:ナガ	内:ナガ	内:ナガ	前	1.3	灰黄 内:青黄
216	5	099	須磨野 高砂	HB-12	SH0560 南北ベント	9.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
217	5	367	須磨野 高砂	HB-11	SH0560 植物	10.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰 内:青黄	1/3	
218	5	098	須磨野 く字頭	HB-12	SH0560 北西	15.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
219	5	318	須磨野 台付	HB-12	SH0560 茶山切妻頭	6.0	内:オニエ 外:須磨野のため不明	前	1.2	灰黄 内:青黄	1/3	
220	5	095	須磨野 台付	HB-12	SH0560 茶山	8.2	内:ナガ オリナ ハナ オキナ	前	1.2	灰黄 内:青黄	1/3	
221	5	317	須磨野 右田頭	HB-11	SH0560 植物	13.6	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.3	灰黄 内:青黄	1/3	
222	5	094	須磨野 く字頭	HB-12	SH0560 植物	15.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
223	5	097	須磨野 く字頭	HB-12	SH0560 北西	20.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	2.4	灰黄 内:青黄	1/4	
224	4	134	土師野 く字頭	SH0309	SH0309 1.8	10.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/4	
225	4	104	土師野 く字頭	SH0309	SH0309 1.8	10.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/4	
226	4	411	須磨野 有苗高砂	HB-11	SH0402 上顎	13.0	5.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3
227	4	138	須磨野 有苗高砂	HB-12	SH0402 上顎	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.2	内:青黄 内:青黄	1/3		
228	4	135	土師野 高砂	HB-11	SH0402	19.0	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/3	
229	4	136	土師野 く字頭	HB-11	SH0402	18.4	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	-	灰黄 内:青黄	1/4	
230	4	140	土師野 く字頭	HB-10	SH0405 等 内:ナガベト 墓去	19.8	内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ 内:ロココザ(内:ロココザ)	前	1.5	灰黄 内:青黄	1/3	
231	4	022	須磨野 高砂	HD-10	P0009	25.6	内:ミカド 内:ナガベト 須磨野のため不明	前	2.3	灰黄 内:青黄	1/3	

Tab.5-6 遺物観察表

232	5	213	市川上留 梶原	BA12	SH0559 南	内:オサエ、外:海付穴吹	南	1.3	内:海付 外:海付	直	縫合にて1/4	
233	5	032	市川上留 堀	BA12	SH0559 南	20.0	上縫、下縫	南	1.4	直	縫合にて1/8	
234	5	308	市川上留 堀	BA12	SH0559 南	15.4	上縫、下縫、横縫	南	1	直	縫合にて1/4	
235	5	215	市川上留 受(慶)	BA12	SH0559 朝向6	16.く	上縫:ヨコナメ 内:縫合のため 外:ヨコナメ	南	1.4	直	縫合にて1/6	
236	5	208	市川上留 く字屋	BA12	SH0559 梶原	13.6	上縫:ヨコナメ 外:ハラ	南	1.3	直	縫合にて1/6	
237	5	369	市川上留 堀	BA12	SH0559 朝向6	13.6	上縫:ヨコナメ 外:ハラ 内:ナメ 内:ヨコナメ	南	—	直	縫合にて1/3	
238	5	030	市川上留 忍理	BA12	SH0559 南	—	上縫:ヨコナメ	南	1.3	内:直	直	
239	5	031	市川上留 忍理	BA12	SH0559 南	—	縫合のため引明	南	1	内:直	直	
240	5	031	市川上留 受(慶)	BA12	SH0559 朝向6	11.8	縫合のため引明	南	1.2	直	縫合にて1/4	
241	5	017	市川上留 神?	BA12	SH0559 梶原	—	内:ナメ 外:ヨコナメ	南	2	内:直 外:直	直	
242	5	018	市川上留 高林	BA12	SH0559 梶原	14.8	縫合のため引明	南	1.2	直	縫合にて1/4	
243	5	034	市川上留 高林	BA12	SH0559 朝向6	—	縫合のため引明	南	1.3	直	直	
244	5	029	市川上留 高林	BA12	SH0559 梶原	13.7	縫合のため引明	南	1.3	直	直	
245	5	025	市川上留 高林	BA12	SH0559 朝向6	—	内:縫合のため引明	南	1.3	直	縫合にて1/3	
246	5	373	市川上留 高林	BA12	SH0559 朝向6	—	縫合のため引明	南	1	直	直	
247	5	214	市川上留 高林	BA12	SH0559 朝向6	—	内:ヨコナメ 外:ヨコナメ	南	1.7	直	縫合にて1/6	
248	5	033	市川上留 高林	BA12	SH0559 南	12.0	縫合のため引明	南	1.3	直	直	
249	5	373	市川上留 高林	BA12	SH0559 朝向6	14.8	縫合のため引明	南	1.4	直	中空:縫合にて1/4	
250	5	421	右鷹島 萩石	AZ11	SH0559 内	PO5342	足:幅×厚さ×高さ 14.6cm × 3.2cm × 3.2cm 重さ 179.7g	—	—	直	内:ヨコナメ 萩石山形 の形を模した形状をもつ 萩石あり	
251	5	087	市川上留 堀	BA12	SH0559 内	PO5344	15.8	上縫:ヨコナメ 内:ヨコナメ	南	2.3	直	直
252	5	405	市川上留 堀台	BA12	SH0559 内	PO5344	内:ナメ、外:ヨコナメ	南	1.6	直	直	
253	5	085	市川上留 堀	BA12	SH0559 内	PO5340	11.0	内:ヨコナメ	南	1	直	直
254	5	086	市川上留 堀	BA12	SH0559 内	PO5340	6.0	縫合のため引明	南	1.4	直	直
255	5	229	市川上留 田村豊	AZ11	SH0559 内	PO5342	9.8	縫合のため引明	南	—	直	中空:直
256	5	422	右鷹島 萩石	AZ11	SH0559 内	PO5342	足:幅×厚さ×高さ 5.6cm × 2.8cm × 1.6cm 重さ 170g	—	半分程度	内:ヨコナメ 萩石山形 の形を模した形状をもつ 萩石あり		
257	5	230	市川上留 く字屋	AZ11	SH0553	西山河内溝	12.8	縫合のため引明	南	1.3	直	直
258	5	103	市川上留 田村豊	AZ11	SH0553	西山河内溝	13.4	縫合のため引明	南	—	直	直
259	5	019	市川上留 田村豊	AN10	SH0551	日本画	9.9	縫合のため引明	南	1.5	直	中空:直
260	5	323	市川上留 田村豊	AN10	SH0551-53	5.2	縫合のため引明	南	1.6	直	直	
261	5	320	市川上留 受(慶)	AZ10	SH0554	17.6	上縫	南	1.3	直	直	
262	5	315	奥野原 仲身	AN10	SH0547	11.7	内:ヨコナメ、外:ロクナメ	南	1.2	直	直	
263	5	210	奥野原 仲身	AN10	SH0547	—	内:ヨコナメ、外:ロクナメ	南	—	直	直	
264	5	113	奥野原 仲身	AN10	SH0547	11.3	5.0 内:ヨコナメ、外:ロクナメ 内:ヨコナメ 外:ロクナメ	南	—	直	直	
265	5	311	奥野原 仲身	AN10	SH0547	12.0	内:ヨコナメ、外:ロクナメ 内:ヨコナメ 外:ロクナメ	南	1	直	直	
266	5	404	奥野原 仲身	AN10	SH0547	13.8	内:ヨコナメ	南	—	内:直 外:直	直	
267	5	309	奥野原 仲身	AN10	SH0547	—	内:ヨコナメ、外:ロクナメ 内:ヨコナメ 外:ロクナメ	南	—	直	天井にて	
268	5	370	市川上留 堀	AN10	SH0547	北山河内溝	17.8	内:ヨコナメ 外:ロクナメ 内:ヨコナメ 外:ロクナメ	南	1.3	直	直
269	5	306	奥野原 仲身	AN10	SH0547	22.8	縫合のため引明	南	1.4	直	中空:直	
270	5	310	奥野原 田村豊	AN10	SH0547	15.3	上縫:ヨコナメ、外:ハラ	南	2	直	直	
271	5	316	奥野原 田村豊	AN10	SH0547	13.6	上縫:ヨコナメ	南	1.5	内:直 外:直	直	
272	5	307	奥野原 く字屋	AN10	SH0547	—	上縫:ヨコナメ	南	1.5	直	中空:直	
273	5	114	奥野原 仲身	AN10	SH0547	—	縫合のため引明	南	1.4	直	直	
274	5	204	市川上留 高林	AN10	SH0547	—	縫合のため引明	南	1	直	直	
275	5	205	市川上留 高林	AN10	SH0547	西山河内溝	—	縫合のため引明	南	2.3	直	直
276	5	314	市川上留 高林	AN13	SH0547	18.6	縫合のため引明	南	2.3	直	直	
277	5	313	市川上留 高林	AN13-AW10	SH0547	北山河内溝	—	内:ヨコナメ、外:ハラ 内:ヨコナメ	南	2.4	直	直
278	5	026	奥野原 仲身	AN10	SH0547	—	縫合のため引明	南	3	直	中空:直	
279	5	304	市川上留 堀	AN10	SH0547	4.2	縫合のため引明	南	2.3	直	直	
280	5	312	市川上留 堀	AN10	SH0547	3.0	内:縫合のため引明 外:ハラ	南	1.3	内:直 外:直	直	
281	5	416	奥野原 仲身	AN10	SH0547	—	内:ヨコナメ	南	1.0	直	直	
282	5	419	右鷹島 石割	AN10	SH0547	—	足:幅×厚さ×高さ 2.9cm × 1.7cm × 0.3cm 重さ 1.5g	—	一空頭:直	直	直	
283	5	372	奥野原 仲身	AN10	SH0547-37.9N	16.7	上縫:ヨコナメ、外:ハラ 内:ヨコナメ	南	—	直	直	
284	5	088	市川上留 堀	AN10	SH0547	—	上縫:ヨコナメ	南	1.4	直	直	
285	5	230	市川上留 堀台	AN10	SH0547	—	内:較小 内:前脚	南	2	直	直	
286	5	021	奥野原 高林	AN09	SH0557	—	縫合のため引明	南	1.4	直	直	
287	5	028	奥野原 高林	AN09	SH0549	16.2	縫合のため引明	南	2.4	直	直	
288	5	091	奥野原 高林	AN10	SH0550	13.6	縫合のため引明	南	—	直	直	
289	5	080	奥野原 田村豊	AN10	SH0550	7.5	縫合のため引明	南	1.6	直	直	

Tab.5-7 遺物観察表

290	5	414	植物	蘿 AV10	S90550		■	15	葉類	■	地子部分のみ	
291	5	218	布	布 AV12	S90545	15.6	■	12	織	■	U型にC型	
292	5	081	布	布 AV13	S90545		■	24	織網	■	口縫にて1/2	
293	5	083	布	布 AV14	S90545	5.6	■	2	織	■	口縫にて1/3	
294	5	043	布	布 AV12	S90545	18.2	■	14	内縫	■	口縫にて1/8	
295	5	085	布	布 AV14	S90545	13.0	■	2	内縫	■	口縫縫合	
296	5	067	布	布 AV14	S90545		■	13	織	■	口縫縫合	
297	5	101	布	布 AV12	S90545		■	13	内縫	■	口縫縫合	
298	5	041	布	布 AV11/12	S90545	7.0	■	13	織	■	口縫にて1/3	
299	5	223	布	布 AV14	S90545	22.0	■	-	織	■	口縫にて1/6	
300	5	044	布	布 AV13	S90545		■	13	内縫	■	口縫にて1/6	
301	5	092	布	布 AV14	S90545		■	12	内縫	■	口縫縫合	
302	5	069	土耕用	木柄 AV13	S90545	10.3	■	13	内縫	■	口縫にて1/6 布柄高枝かも	
303	5	034	廻転錠	ハック AV13	S90545	9.8	■	内	ロクロナフ	■	口縫にて	
304	5	072	布	布 AV12	S90545/9	P05184	7.8	■	内	ロクロナフ	■	口縫にて1/3
305	5	106	布	布 AV13	S90545/9	P05184	1.6	■	16	内縫	■	口縫にて
306	5	074	廻転錠	木柄 AV12	S90545/9	P05198	13.0	■	13	内縫	■	口縫にて
307	5	122	廻転錠	木柄 AV14	S90545/9	P05198	12.8	4.1	内	ロクロナフ	内	ロクロナフ 木柄ロクロナフ 木柄ロクロナフ
308	5	073	土耕用	木柄 AV12	S90545/9	P05198	10.6	■	12	内縫	■	口縫にて
309	5	073	土耕用	木柄 AV12	S90545/9	P05200	12.6	■	13	内縫	■	口縫にて1/8
310	5	226	廻転錠	木柄 AV13	S90545/9	P05191	14.0	■	内	ロクロナフ	■	口縫にて1/2
311	5	023	布	布 AV12	S90535/36		■	2.5	織	■	口縫にて1/4	
312	5	056	布	布 AV12	S90535		■	15	内縫	■	口縫にて1/6	
313	5	012	布	布 AV12	S90535/36	17.8	■	13	内縫	内	織のための内縫	
314	5	060	布	布 AV11	S90535/36	25.6	■	14	内縫	■	口縫にて1/6	
315	5	011	布	布 AV12	S90535/36	10.6	■	13	内縫	■	口縫にて1/8	
316	5	011	布	布 AV11	S90535/36	15.8	■	12	内縫	■	口縫にて1/6	
317	5	371	布	布 AV11	S90535/36	研磨皿	11.8	■	14	内	内	
318	5	222	布	布 AV13	S90535/36		■	3	織	■	口縫にて1/8	
319	5	206	布	布 AV12	S90535/36	17.2	■	2	織	■	口縫にて1/8	
320	5	121	布	布 AV12	S90535/36	17.8	■	16	内縫	■	口縫にて1/3	
321	5	055	内	内 AV13	S90535/36	研磨皿	1.5	■	13	内縫	■	口縫縫合
322	5	211	土耕用	木柄 AV12	S90535/36	15.1	■	23	内縫	■	口縫にて1/6	
323	5	057	廻転錠	木柄 AV12	S90535/36	粘土塊	10.0	■	13	内縫	■	口縫にて1/4
324	5	059	廻転錠	木柄 AV11	S90535/36	11.3	■	1	内	内	口縫にて1/6	
325	5	058	廻転錠	木柄 AV12	S90535/36	11.6	■	1	内	ロクロナフ	■	
326	5	024	廻転錠	木柄 AV12	S90535/36	12.2	■	1	内	内	口縫にて1/6	
327	5	207	廻転錠	木柄 AV13	S90535/36	11.4	■	12	内	内	口縫にて1/6	
328	5	105	廻転錠	木柄 AV11	S90535/36	10.9	■	15	内	内	口縫にて1/8	
329	5	101	廻転錠	木柄 AV12	S90535/36	11.6	■	1	内	内	口縫にて1/6	
330	5	212	廻転錠	木柄 AV12	S90535/36	13.8	■	12	内	内	口縫にて1/8	
331	5	014	廻転錠	木柄 AV11	S90535/36	研磨皿	12.8	■	2.9	内	内	
332	5	016	廻転錠	別箱 AV13	S90535/36	12.5	■	5	内	内	口縫にて1/6	
333	5	054	廻転錠	木柄 AV13	S90535/36		■	13	内	内	口縫にて1/3	
334	5	418	布	布 AV13/13	S90536	中高糸縫合 粘土塊	8.3	■	1.2	内	内	
335	5	324	布	布 AV13	S90535/36	8.6	■	1	内	内	口縫にて1/4	
336	5	237	布	布 AV12	S90535/36	中高糸縫合 ハンドル	16.6	■	13	内縫	■	口縫にて1/6
337	5	362	布	布 AV12	S90535/36	8.0	■	3.4	内	内	口縫にて1/6	
338	5	236	布	布 AV12	S90535/36	中高糸縫合 ハンドル	8.3	■	1.2	内	内	
339	5	023	布	布 AV12	S90575	8.6	■	1.2	内	内	口縫にて1/6	
340	5	116	布	布 AV12	S90575	8.6	■	2.3	内	内	口縫にて1/6	
341	5	423	石製品	砾石 AV12	S90575	9.7	■	定形	内	内	口縫にて1/8	
342	5	008	廻転錠	木柄 AV12	S90533/34	12.5	■	1	内	内	口縫にて1/6	
343	5	015	廻転錠	木柄 AV12	S90533/34		■	1	内	内	口縫にて1/6	
344	5	204	廻転錠	木柄 AV11	S90533/34	14.5	■	4.5	内	内	口縫にて1/6	
345	5	010	廻転錠	木柄 AV13	S90533/34	9.0	■	1.2	内	内	口縫にて1/4	
346	5	205	廻転錠	木柄 AV12	S90533/34	9.7	■	1	内	内	口縫にて1/8	

Tab.5-8 遺物観察表

347	5	401	遺物群	ハウク	AU12	S40533/34 S40533/34	13.8	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	内:黒 外:黒	直 直	1/6 1/2	
348	5	009	土器群	く字彫	AU12	S40533/34	15.8	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
349	5	009	土器群	愛(愛)	AU11	S40533/34 S40533/34	17.8	内:黒 外:黒	直 直	内:黒 外:黒	直 直	1/6 1/2	
350	5	009	土器群	平安型	AU11	S40533/34	22.2	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
351	5	007	土器群	平安型	AU12	S40533/34 S40533/34	8.0	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
352	5	332	遺物群	朴面	AU12	S40533/34 内 P05131	13.9	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文/ハラ割り	直 直	2 直	黒 直	直 直	1/6 1/2
353	5	333	土器群	直	AU12	S40533/34 内 P05128	16.2	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
354	5	343	遺物群	朴面	AU11	S40533/38	11.3	内:内:ロコリナデ	直 直	2 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2
355	5	346	遺物群	朴身	AU11	S40533/38	12.0	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文/ハラ割り	直 直	2 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2
356	5	347	遺物群	朴身	AU11	S40533/38	12.8	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
357	5	345	遺物群	朴面	AU11	S40533/38	15.3	内:内:ロコリナデ	直 直	1-4 直	黒 直	直 直	1/6 1/2
358	5	360	遺物群	朴面	AU13	P40516/17/23/30	13.3	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文/ハラ割り	直 直	3-7 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2
359	5	035	遺物群	朴面	AU16	S40516/00/03	13.3	内:内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文/ハラ割り	直 直	1-3 直	黒 黒	直 直	1/4
360	5	038	遺物群	朴面	AU16	S40516/27	11.3	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
361	5	217	遺物群	朴面	AU16/AU16	S40517/27	15.6	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
362	5	245	遺物群	朴面	AU18	S40517/22/27	13.6	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文/ハラ割り	直 直	1-3 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2
363	5	039	土器群	く字彫	AU16/AU16	S40527	17.6	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
364	5	365	土器群	く字彫	AU16	S40516/00/03	20.0	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
365	5	036	土器群	く字彫	AU16	S40516/27	15.6	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
366	5	040	土器群	直	AU16	S40517/22/27	11.6	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
367	5	216	土器群	直	AU16/AU16	S40517/27	13.6	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
368	5	417	土器群	直	AU16/AU16	S40517/22/27/30	17.6	内:ナガサキ 直 直	2-4 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2	
369	5	363	土器群	直	AU18	S40517/22/27	24.6	内:ナガサキ 直 直	2-6 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2	
370	5	364	土器群	高杯	AU17	S40516/16 剥皮	11.6	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
371	5	020	土器群	平安型	AU16	S40527/22/27	7.0	内:内:ナガ	直 直	1-5 直	黒	直 直	1/6 1/2
372	5	041	土器群	平安型	AU16/AU16	S40527/22/27	13.6	内:内:ロコリナデ	直 直	1-3 直	黒	直 直	1/6 1/2
373	5	020	土器群	く字彫	AU16	S40516/27 内	12.2	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
374	5	327	土器群	高杯	AU16	S40527/有孔	14.8	内:黒 外:有孔	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
375	5	244	遺物群	朴面	AU16	S40510/西河型	11.9	4.5 内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	1-3 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2
376	5	424	遺物群	ワガミ	AU15	S40510/ 惣士上彫	12.0	内:内:ナガサキ 直 直	2-6 直	黒 黒	直 直	1/6 1/2	
377	5	118	遺物群	朴面	AU16	S40513/海原 (剥皮)	11.8	4.4 内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	1-3 直	黒	直 直	1/6 1/2
378	5	408	遺物群	朴身	AU16	S40511/14	12.6	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	1-2 直	黒	直 直	1/6 1/2
379	5	089	遺物群	高杯	AU14	S40511/14 内	12.6	内:内:ナガサキ 直 直	1-2 直	黒	直 直	1/6 1/2	
380	5	242	遺物群	朴身	AU17	S40507/15	11.6	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
381	5	409	遺物群	朴身	AU17	S40507/15	13.2	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
382	5	374	遺物群	直	AU17	S40507/15	20.0	内:ロコリナデ 外:ナガサキ	直 直	1-3 直	黒	直 直	1/6 1/2
383	5	243	土器群	平安型	AU17	S40507/15	6.0	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	2-2 直	黒	直 直	1/6 1/2
384	5	325	土器群	平安型	AU17	S40507/15/P53	18.5	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
385	5	241	遺物群	朴面	AU14	S40504/内	12.8	3.2 内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	1-2 直	黒	直 直	1/6 1/2
386	5	323	土器群	く字彫	AU17/AU17	S40504/ 南山型	20.8	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	1-2 直	黒	直 直	1/6 1/2
387	5	123	土器群	く字彫	AU13	S40504/05 内	27.8	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ	直 直	1-3 直	黒	直 直	1/6 1/2
388	5	328	遺物群	朴身	AU14	S40504/05 内	11.1	内:内:ロコリナデ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
389	5	123	土器群	く字彫	AU13	S40504/内 P05102	24.0	直 直	直 直	直 直	直 直	1/6 1/2	
390	5	350	遺物群	朴面	AU15/16	S40502/内	12.0	内:内:ロコリナデ	直 直	3	黒	直 直	1/6 1/2
391	5	240	遺物群	直	AU16	S40502/ 方下	7.4	直 直	直 直	1-4 直	黒	直 直	1/6 1/2
392	5	239	遺物群	直	AU16	S40502/ 方下	17.0	直 直	直 直	1-4 直	黒	直 直	1/6 1/2
393	5	407	遺物群	朴身	AU15	S40542/ 理一 内	11.4	4.5 内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+ハラ割り	直 直	1-2 直	黒	直 直	1/6 1/2
394	5	071	土器群	直	AU15	S40542/44/P5	11.4	1.8 内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
395	5	342	遺物群	朴面	AU10	S40548	12.7	3.5 内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
396	5	344	遺物群	朴身	AU10	S40548/ 波水溝	12.0	内:ロコリナデ 外:ロコリナデ+波紋文	直 直	1-2 直	黒	直 直	1/6 1/2
397	5	339	遺物群	桙	AU10	S40548	12.0	直 直	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
398	5	351	遺物群	高杯	AU10	S40548/ 波水溝	12.0	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	3-3 直	黒	直 直	1/6 1/2
399	5	340	土器群	平安型	AU10	S40548	15.2	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
400	5	341	土器群	平安型	AU10	S40548	8.9	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
401	5	343	土器群	平安型	AU10	S40548	35.8	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2
402	5	337	土器群	く字彫	BH13	S40502/ 有孔	17.0	内:内:ナガサキ 外:ナガサキ+タテハケ	直 直	-	黒	直 直	1/6 1/2

Tab.5-9 遺物観察表

403	5	402	遺物群	6件	AV13	S005037 球一 銀	14.6	内:ヨコナタデ	南	内:有 外:有	良好	目録にて1-9	
404	5	069	遺物群	朴葉	AV14	S005037	12.3	内:ヨコナタデ	南	2	良好	目録にて1-9	
405	5	103	遺物群	有葉高麗	AV14	S005037 球一 銀	14.6	内:ヨコナタデ 外:ヨコナタデ(球)ハラ割り	南	中や難	3	良	目録にて1-9
406	5	224	遺物群	ハクチ	AV14	S005037 球一 銀	14.6	内:ヨコナタデ 外:ヨコナタデ(球)ハラ割り	南	1	良好	目録にて1-9	
407	5	070	玉器群	く球	AV14	S005037	18.0	網羅のため不明	南	2	良好	目録にて1-9	
408	5	009	玉器群	く球	AV13	S005037	14.0	網羅のため不明	南	—	良好	目録にて1-9	
409	5	403	玉器群	鏡	AV14	S005037 球一 銀	14.6	内:ナナ 外:オサリ 外:ナナ	南	1-4	良好	目録にて1-9	
410	5	225	余生土器	高杯	AV14	S005037 球一 銀	15.6	内:ヨコナタ 外:タテシガタ	南	3	良好	目録にて1-9	
411	5	068	ニミタヌ	鏡	AV13	S005037 高いべつ	6.9	網羅のため不明	南	—	良好	目録にて1-9	
412	5	335	玉器群	鏡	AV14	S005037 内:P05143	14.6	網羅のため不明	南	—	良好	目録にて1-9	
413	5	413	玉器群	鏡	AV13	S005037 内: P05440	14.6	内:ナナ 外:オサリ	南	1-6	良好	目録にて1-9	
414	4	271	遺物群	棒身	BH14	S00453 20-40cm	11.4	内:ヨコナタ 外:タテシガタ	南	2-3	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
415	4	275	遺物群	朴葉	BH11	S00453 上縦	11.9	4.0 内:ヨコナタ 外:タテシガタ 内:ヨコナタ 外:タテシガタ	南	—	良	目録	
416	4	277	遺物群	朴葉	BH12	S00453 上縦	12.8	内:ヨコナタ 外:タテシガタ 内:ヨコナタ	南	1-3	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
417	4	276	遺物群	切削葉	BH13	S00453 下縦	11.0	内:ヨコナタ	南	中や難	4-6	良好	目録にて1-9
418	4	270	遺物群	朴葉	BH13	S00453 0.10cm	18.8	内:ヨコナタ	南	—	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
419	4	289	遺物群	長脚葉	BH12	S00453/S00454	6.9	内:ヨコナタ	南	—	内:有 外:有	良好	目録にて1-9 内に自然裂片
420	4	278	遺物群	面	BH13	S00453	—	内:ヨコナタ 外:ヨコナタト裏表	南	1-5	内:有 外:有	網羅にてどうす	
421	4	274	余生土器	面	BH13	S00453	—	内:ヨコナタ 外:ヨコナタト裏表	南	中や難	1-3	内:有 外:有	網羅のため不明
422	4	274	玉器群	林	BH13	S00453 0.10cm	23.4	15.8 3.6 網羅のため不明	南	—	良	目録にて1-9	
423	4	417	玉器群	鏡	BH15	S00453	—	網羅のため不明	南	—	明	目録にて不明	
424	4	273	玉器群	く球	BH13	S00453 0.10cm	16.6	内:ヨコナタ	南	1-4	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
425	4	272	玉器群	く球	BH13	S00453 0.10cm	17.8	内:ヨコナタ 外:ヨコナタ	南	1	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
426	4	049	余生土器	面	BC08	S00427	29.8	網羅のため不明	南	2-4	内:有 外:有	良好	目録にて1-9 横枝文あり
427	4	308	余生土器	面	BH08	S00427	14.6	内:ヨコナタ 外:ヨコナタ	南	1-4	内:有 外:有	良好	目録にて1-9 内:有 外:有
428	4	408	余生土器	長脚葉	BC08	S00427 剥離	—	内:ヨコナタ 外:ヨコナタ	南	中や難	4-6	良好	目録にて1-9
429	4	220	余生土器	面	BC08	S00427	4.2	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にてどうじ	
430	4	324	余生土器	面	BC08	S00427	—	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9	
431	4	318	余生土器	面	BC08	S00427 剥離	10.4	網羅のため不明	南	1-3	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
432	4	406	余生土器	面	BC08	S00427	—	網羅のため不明	南	1-5	内:有 外:有	網羅にて1-9	
433	4	222	余生土器	楕円	BH08	S00427	3.2	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にてどうじ	
434	4	055	余生土器	剥離	BH08	S00427 剥離	18.5	網羅のため不明	南	3-5	内:有 外:有	網羅にて1-9 剥離	
435	4	205	余生土器	く球	BH08	S00427 剥離	15.2	内:ヨコナタ	南	2-4	内:有 外:有	良好	目録にて1-9
436	4	362	余生土器	剥離	BH08	S00427 剥離	14.4	内:ヨコナタ 外:ヨコナタ 内:ハラ 外:ハラ	南	1-4	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:ハラ 外:ハラ	
437	4	225	余生土器	剥離	BH08	S00427 剥離	—	網羅のため不明	南	2-5	内:有 外:有	目録にて不明	
438	4	034	余生土器	台形	BC09	S00427 ベルト直曲	6.9	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9	
439	4	214	余生土器	台形	BH08	S00427 剥離	7.6	内:ハラ 外:ナナ	南	1-4	内:有 外:有	網羅にて1-9	
440	4	221	余生土器	台形	BH08	S00427 剥離	7.3	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9	
441	4	221	余生土器	台形	BH08	S00427	7.1	網羅のため不明	南	3-5	内:有 外:有	網羅にて1-9	
442	4	306	余生土器	楕	BH08	S00427 剥離	4.4	網羅のため不明	南	中や難	1-5	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:ヨコナタ
443	4	309	余生土器	タキモ	BH08	S00427 剥離	—	網羅のため不明 内:タキモ	南	1-2	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:タキモ	
444	4	207	余生土器	高杯	BH08	S00427 剥離	23.9	14.0 網羅のため不明 内:タキモ	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:タキモ	
445	4	223	余生土器	高杯	BC08	S00427	20.8	網羅のため不明	南	1-5	内:有 外:有	目録にて1-9 内:タキモ	
446	4	038	余生土器	高杯	BC08	S00427	13.0	網羅のため不明	南	2-6	内:有 外:有	目録にて1-9 内:タキモ	
447	4	033	余生土器	高杯	BC08	S00427 剥離	12.7	網羅のため不明	南	中や難	3-5	内:有 外:有	目録にて1-9 内:タキモ
448	4	407	余生土器	高杯	BC08	S00427 剥離	15.6	網羅のため不明	南	2-3	内:有 外:有	目録にて1-9	
449	4	307	余生土器	高杯	BC08	S00427	—	内:ナナ 外:ナナ	南	—	2-4	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:ナナ 外:ナナ
450	4	044	余生土器	高杯	BC08	S00427(31/31/0329/46) 内:タキモ	16.0	内:ヨコナタ 外:タキモ	南	2	内:有 外:有	網羅にて1-9	
451	4	041	余生土器	高杯	BC08	S00427	15.4	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9	
452	4	040	余生土器	高杯	BC08	S00427-31	13.4	内:ヨコナタ 外:タキモ	南	2-3	内:有 外:有	網羅にて1-9	
453	4	039	余生土器	楕	BH08	S00427 剥離	—	内:ヨコナタ 外:タキモ	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:タキモ	
454	4	405	余生土器	楕	BH08	S00425 剥離	4.9	網羅のため不明	南	2-5	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:タキモ	
455	4	418	余生土器	楕	BH08	S00425 剥離	16.8	内:ヨコナタ 外:タキモ	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9 内:タキモ	
456	4	233	余生土器	楕	BC08	S00442	—	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	目録にてばらばら	
457	4	283	余生土器	楕	BC08	S00442 剥離	—	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	目録にてばらばら	
458	4	421	余生土器	楕	BC08	S00442 剥離	5.0	網羅のため不明	南	2-3	内:有 外:有	目録にて1-9	
459	4	420	余生土器	楕	BC08	S00442 剥離	6.0	内:ハラ 外:タキモ	南	中や難	1-4	内:有 外:有	目録にて1-9 内:ハラ 外:タキモ
460	4	039	余生土器	楕	BH08	S00432	4.0	網羅のため不明	南	—	内:有 外:有	網羅にて1-9	
461	4	284	余生土器	楕	BH08	S00432 剥離	—	内:ヨコナタ 外:タキモ	南	1-3	内:有 外:有	目録にて1-9	
462	4	051	余生土器	台形	BH08	S00442 剥離	7.4	網羅のため不明	南	中や難	2-4	内:有 外:有	目録にて1-9 内:タキモ
463	4	046	余生土器	受	BH08	S00442 剥離	—	網羅のため不明	南	—	2-3	内:有 外:有	目録にて1-9
464	4	280	余生土器	台形	BH08	S00432	—	内:ハラ 外:ナナ	南	—	3	内:有 外:有	目録にて1-9

Tab.5-10 遺物觀察表

465	4	423	〔平土・土〕高	BF08	SOD044 剥離⑥	15.2	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形にはばか	
466	4	419	〔平土・土〕高	BF09	SOD042 剥離④	14.6	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形にはばか	
468	4	260	〔平土・土〕高	BF08	SOD042 剥離④	24.2	14.2	17.1	内・外・雨・風雨間	雨	1-2	既成形	既 / 2
469	4	283	〔平土・土〕高	BF09	SOD042 剥離④	24.2	14.2	17.1	内・外・雨・風雨間	雨	1-2	既成形	既 / 2
470	4	047	〔平土・土〕高	BF09	SOD044 1層	雨	剥離のため干す	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形にはばか	
471	4	332	〔平土・土〕高	BF09	SOD042 剥離④	雨	剥離のため干す	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形にはばか	
472	4	282	〔平土・土〕高	BF09	SOD042 剥離④	14.5	内・外・雨・風雨間	雨	3	既成形	既	既成形に完形	
473	4	050	〔平土・土〕留	BF09	SOD042 剥離④	雨	内・ナ・デ・タ・リ・テ・ル・モ	雨	2-3	既成形	既	既成形に完形	
474	4	038	〔平土・土〕留	BG10	SOD040 下層	17.4	内・外・雨・風雨間	雨	2	既成形	既	既成形に完形	
475	4	042	〔平土・土〕留	BF09	SOD040 剥離	19.3	内・外・雨・風雨間	雨	2-3	既成形	既	既成形に完形	
476	4	030	〔平土・土〕留	BF10	SOD040 剥離	7.3	内・外・雨・風雨間	雨	2-3	既成形	既	既成形に完形	
477	4	032	〔平土・土〕留	BF09	SOD040 剥離	14.0	内・外・雨・風雨間	雨	3	既成形	既	既成形に完形	
478	4	029	〔平土・土〕留	BF09	SOD040 剥離	25.2	内・外・雨・風雨間	雨	2	既成形	既	既成形に完形	
479	4	074	〔平土・土〕留	BG10	SOD044 剥離④	3.8	内・外・雨・風雨間	雨	2-3	既成形	既	既成形に完形	
480	4	031	〔平土・土〕留	BG10	SOD040 剥離	15.4	10.7	3.9	内・ナ・リ・ド・シ	雨	2-5	既成形	既成形に完形
481	4	227	〔平土・土〕留	BF10	SOD043 剥離	12.6	内・外・雨・風雨間	雨	3	既成形	既	既成形に完形	
482	4	231	〔平土・土〕留	BF09	SOD043 剥離	9.8	5.0	4.5	内・外・雨・風雨間	雨	3	既成形	既 / 4
483	4	310	〔平土・土〕留	BG09	SOD048 剥離①	13.2	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
484	4	423	〔平土・土〕留	BF10	SOD048 剥離①	5.0	内・外・雨・風雨間	雨	1-5	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
485	4	409	〔平土・土〕留	BF09	SOD044 剥離④	7.8	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
486	4	229	〔平土・土〕留	BF09	SOD044 剥離④	9.2	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
487	4	228	〔平土・土〕留	BF09	SOD044 剥離④	17.2	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
488	4	230	〔平土・土〕高	BF09	SOD044 剥離④	17.2	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
489	4	217	〔平土・土〕高	BF09	SOD021/SOD041	20.0	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形に完形	
490	4	215	〔平土・土〕高	BF09	SOD021/SOD041	10.8	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形に完形	
491	4	404	〔平土・土〕付荷	BF09	SOD041 剥離④	雨	内・ナ・リ・ド・シ	雨	1-3	既成形	既	既成形に完形	
492	4	214	〔平土・土〕付荷	BF09	SOD041/SOD041	8.8	内・外・雨・風雨間	雨	2-4	既成形	既	既成形に完形	
493	4	319	〔文土・土〕深	BF09	SOD042/141	雨	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
494	4	049	〔平土・土〕深	BF09	SOD047 剥離	19.8	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
495	4	048	〔平土・土〕深	BF09	SOD047 剥離	6.2	内・外・雨・風雨間	雨	2-5	既成形	既	既成形に完形	
496	4	043	〔平土・土〕付荷	BF09	SOD047 剥離	6.8	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
497	4	232	〔平土・土〕深	BG09	SOD040 剥離④	15.6	内・外・雨・風雨間	雨	1-7	既成形	既	既成形に完形	
498	4	410	〔平土・土〕深	BF09	SOD040 剥離④	3.5	内・外・雨・風雨間	雨	1-2	既成形	既	既成形に完形	
499	4	028	〔平土・土〕深	BF09	SOD041/SOD041	雨	内・ナ・リ・ド・シ	雨	1-4	内・外・雨・風雨間	既	既成形に完形	
500	4	218	〔平土・土〕高	BF09	SOD042 剥離	28.8	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形に完形	
501	4	142	〔平土・土〕高	BF10	SOD049 剥離	31.6	内・外・雨・風雨間	雨	1-2	既成形	既	既成形に完形	
502	4	401	〔平土・土〕高	BF12	SOD0411 剥離	33.2	内・外・雨・風雨間	雨	1-6	既成形	既	既成形に 1/4	
503	4	058	〔平土・土〕高	BF12	SOD0461 剥離	雨	内・外・雨・風雨間	雨	2	既成形	既	既成形に 1/4	
504	4	057	〔平土・土〕高	BF12	SOD0461 剥離	1.3	内・外・雨・風雨間	雨	2-5	既成形	既	既成形に 1/4	
505	4	067	〔平土・土〕高	BF13	SOD044 剥離④	6.8	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	既成形	既	既成形に 1/4	
506	4	312	〔平土・土〕高	BF09	SOD0405 剥離	17.0	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形に 1/4	
507	4	056	〔平土・土〕高	BF12	SOD0493 剥離	19.1	内・ナ・リ・ド・シ	雨	3	既成形	既	既成形にはばか	
508	4	053	〔平土・土〕高	BF12	SOD0493 剥離	6.8	内・ナ・リ・ド・シ	雨	2-4	既成形	既	既成形に完形	
509	4	054	〔平土・土〕高	BF12	SOD0493 剥離	9.6	内・ナ・リ・ド・シ	雨	1-2	既成形	既	既成形にはばか	
510	4	318	〔平土・土〕高	BF12	SOD0493 剥離	13.4	内・ナ・リ・ド・シ	雨	2-4	既成形	既	既成形にはばか	
511	4	411	〔平土・土〕高	BF11	SOD0405 剥離	23.0	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	既成形	既	既成形に 1/2	
512	4	235	〔平土・土〕高	BF12	SOD0405 剥離	13.4	内・外・雨・風雨間	雨	1-4	既成形	既	既成形に 1/2	
513	4	052	〔平土・土〕高	BF12	SOD0405 剥離	18.4	内・ナ・リ・ド・シ	雨	2-4	既成形	既	既成形に 1/2	
514	4	238	〔平土・土〕高	BF11	SOD0405 剥離	6.8	内・ナ・リ・ド・シ	雨	3	既成形	既	既成形に完形	
515	4	234	〔平土・土〕高	BF11	SOD0405 剥離	10.0	内・外・雨・風雨間	雨	3	既成形	既	既成形にはばか	
516	4	236	〔平土・土〕高	BF12	SOD0405 剥離	雨	内・ナ・リ・ド・シ	雨	1-3	既成形	既	既成形に 1/4	
517	4	069	〔平土・土〕高	BF12	SOD0408 剥離	12.0	内・外・雨・風雨間	雨	2	既成形	既	既成形に 1/4	
518	4	403	〔平土・土〕高	BF12	SOD0511 剥離	27.6	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形にはばか	
519	4	268	〔千土〕高	BF12	SOD049-6/7左面	11.8	2.4	内・ナ・リ・ド・シ	雨	既成形	既	既成形に 1/4	
520	4	267	〔千土〕高	BF14	SOD0409 内・外・剥離	雨	内・外・雨・風雨間	雨	既成形	既	既成形に完形		
521	4	331	〔壁土〕高	BG13/14	SOD0409	29.8	内・ナ・リ・ド・シ	雨	内・外・雨・風雨間	良好	既成形にはばか	既成形にはばか	
522	4	204	〔平土・土〕高	BF12	SOD0396 剥離	15.6	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形に 1/4	
523	4	402	〔平土・土〕高	BF12	SOD0396	15.0	内・ナ・リ・ド・シ	雨	既成形	既	既成形に 1/4		
524	4	269	〔平土・土〕高	BF12	SOD03121 剥離	5.7	内・外・雨・風雨間	雨	1-3	既成形	既	既成形に 1/4	

Tab.5-11 遺物観察表

525	4	139	隼人土器	高杯	S003110	20.2	内:内・外身 内:ナ・外:ナ・タテミ百キ→鉢輪 又:ミミタテミ百キ	直	1/2	にふ・鉢輪	直	1/8	内:内・外身	
526	4	203	隼人土器	高杯	H011	3003110	—	直	—	直	直	直	直:内:外身	
527	4	204	隼人土器	高杯	H011	3003110	12.0	内:コナナ・外:タテミ百キ	直	6	直	直	直:内:外身	
528	4	204	隼人土器	台付裏	H011	3003110	7.2	鉢輪のための内	直	1.3	内:直	直	直:内:外身	
529	4	304	隼人土器	直	中身丸	S003117	15.4	鉢輪のための内	直	1	内:直	直	直:内:外身	
530	4	304	隼人土器	直	中身丸	S003117	14.9	鉢輪のための内	直	1.3	内:直	直	直:内:外身	
531	4	128	隼人土器	直	中身丸	S003114	7.6	鉢輪のための内	直	2.5	直	直	直:内:外身	
532	4	055	隼人土器	直	中身丸	H011/2/13	29.0	内:ハラ・外:鉢輪のための内	直	2.5	直	直	直:内:外身	
533	4	085	隼人土器	直	中身丸	S003116	12.0	鉢輪のための内	直	2	直	直	直:内:外身	
534	4	084	隼人土器	直	中身丸	S003116	7.0	鉢輪のための内	直	2.5	直	直	直:内:外身	
535	4	084	隼人土器	直	中身丸	S003116	13.6	鉢輪のための内	直	3.4	直	直	直:内:外身	
536	4	323-2	隼人土器	高杯	H011/4	S003467	—	内:鉢輪のための内 外:ミミタテミ	直	1.3	直	直	直:内:外身	
537	4	071	隼人土器	直	中身丸	S003179	13.4	鉢輪のための内	直	1.2	直	直	直:内:外身	
538	4	066	隼人土器	直	中身丸	S003179	16.7	鉢輪のための内	直	2.5	直	直	直:内:外身	
539	4	073	隼人土器	台付裏	H011/4	S003179	6.0	鉢輪のための内	直	2	直	直	直:内:外身	
540	4	070	隼人土器	直	中身丸	S003178	15.2	内:直 内:内:外身(その多くは単位)を3段	直	2	直	直	直:内:外身	
541	4	073	隼人土器	脚付	H009	S003485	—	鉢輪のための内	直	3	直	直	直:内:外身	
542	4	075	隼人土器	台付裏	H009	S003485	7.0	内:鉢輪のための内	直	1.2	直	直	直:内:外身	
543	4	077	隼人土器	台付裏	H009	S003485	—	内:鉢輪のための内	直	2.5	直	直	直:内:外身	
544	4	076	隼人土器	台付裏	H009	S003485	7.0	鉢輪のための内	直	2	直	直	直:内:外身	
545	5	047	高脚	直	AV11	S005061	17.8	内:ハラ・ミミタテミ 外:ロコロナギ	直	—	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
546	5	375	土器類	羽釜	AE13	S005051	26.8	内:ハラ・ミミタテミ 外:ロコロナギ	直	—	直	直	直:内:外身 内:脚付	
547	5	092	高脚	直	BC14	S005058	15.8	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	—	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
548	5	109	土器類	直	BC14	S005058	12.8	1.9 鉢輪のための内	直	—	直	直	直:内:外身	
549	5	219	土器類	直	BC14	S005058	22.0	内:ハラ・ミミタテミ 外:ロコロナギ	直	—	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
550	4	018	高脚	中身丸	H012	P04291	10.6	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	—	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
551	4	018	高脚	台付裏	H012	P04220	8.8	鉢輪のための内	直	1.3	直	直	直:内:外身	
552	4	244	高脚	中身丸	H012	P04435	11.8	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	1.2	直	直	直:内:外身	
553	4	015	高脚	中身丸	H012	P04435	10.8	鉢輪のための内	直	2.5	直	直	直:内:外身	
554	4	016	高脚	直	H011	P04304	18.0	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	—	直	直	直:内:外身	
555	4	017	土器類	中身丸	H011	P04298	19.0	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	2.3	直	直	直:内:外身	
556	4	027	土器類	脚付	BC10	P04421	—	中身:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	2.4	直	直	直:内:外身 内:脚付	
557	4	028	真足	ヤマハ	H009	P04284	—	厚さ 5mm 程度	—	—	直	直	直:内:外身 内:脚付	
558	5	321	高脚	杯	AR13	P05051	—	内:ロコロナギ	直	—	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
559	5	322	土器類	杯	AS16	S405052 内 P05052	10.7	鉢輪のための内	直	1	直	直	直:内:外身	
560	5	084	高脚	中身丸	HP11	P05313	—	鉢輪のための内	直	2.4	直	直	直:内:外身 内:脚付	
561	5	410	高脚	中身丸	AV13	S405045 内 P05180	12.4	内:ロコロナギ	直	1.3	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
562	5	334	高脚	ハラ	AV11	P05140	14.0	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	—	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
563	5	331	土器類	台付裏	AT13	P05109	15.2	鉢輪のための内	直	1.5	直	直	直:内:外身	
564	5	076	隼人土器	直	中身丸	H014	P05224	—	鉢輪のための内	直	1.5	直	直	直:内:外身
565	5	411	高脚	直	中身丸	H014	P05224	10.8	鉢輪のための内	直	1.5	直	直	直:内:外身
566	5	077	隼人土器	高杯	H013	P05231	—	鉢輪のための内	直	1.4	直	直	直:内:外身	
567	5	335	土器類	中身丸	AV15	P05153	14.4	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	—	直	直	直:内:外身	
568	5	107	隼人土器	高杯	H013	P05233	27.7	鉢輪のための内	直	1.3	直	直	直:内:外身	
569	5	078	隼人土器	高杯	H013	P05240	—	鉢輪のための内	直	—	直	直	直:内:外身	
570	5	081	隼人土器	高杯	H013	P05240	21.7	鉢輪のための内	直	1.4	直	直	直:内:外身	
571	5	406	土器類	直	H013	P05235	33.0	鉢輪のための内	直	1.3	内:直	直	直:内:外身 内:脚付	
572	4	252	隼人土器	直	H009	S003409	—	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	1.3	直	直	直:内:外身 内:脚付	
573	4	248	隼人土器	直	H013	S003409	24.0	内:斜縫 外:斜縫	直	1.3	直	直	直:内:外身	
574	4	080	隼人土器	直	H009	S003409	16.0	鉢輪のための内	直	1.3	直	直	直:内:外身	
575	4	240	隼人土器	直	H010	S003409	5.1	鉢輪のための内	直	—	直	直	直:内:外身	
576	4	239	隼人土器	直	H010	S003409	4.1	鉢輪のための内	直	1.2	内:直	直	直:内:外身	
577	5	001	土器類	台付裏	AS16	P05100	17.0	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	1.3	直	直	直:内:外身 内:脚付	
578	5	292	土器類	台付裏	AS16	P05100	8.0	内:オカリ・外:ナ・タデ	直	1.3	直	直	直:内:外身	
579	4	318	土器類	台付裏	H012	P05102	9.8	内:オカリ・外:ナ・タデ	直	—	直	直	直:内:外身	
580	4	176	隼人土器	直	H013	P05100	10.0cm	内:斜縫	直	1.3	直	直	直:内:外身	
581	4	176	隼人土器	直	H013	P05100	7.4	内:斜縫	直	2.6	直	直	直:内:外身	
582	4	246	高脚	脚	HF14	P05100	—	内:ロコロナギ 外:ロコロナギ	直	3	直	直	直:内:外身	
583	5	415	脚付	脚	AV15/15以上	H009	—	内:ナ・外:ナ・タデ・オサエ	直	1.6	直	直	直:内:外身	
584	5	220	隼人土器	高杯	H013	P05100	18.0	鉢輪のための内	直	1.3	内:直	直	直:内:外身	
585	4	249	隼人土器	高杯	HF08	46.0	—	内:ナ・外:タデ・タガキ・内ル	直	2.5	直	直	直:内:外身	

Tab.5-12 遺物観察表

586	4	177	土御印 高柄	BF113	笠置(10cm 地下)	10.8	網のため不明	南	2.3	網用	直 旗面にて 1/2	
587	4	062	土御印 高柄	BF113	笠置(10cm 地下)	11.2	網のため不明	南	3	網用 黄緑	直 旗面にて 1/3	
588	5	002	土御印 高柄	BF113	笠置(10cm 地下)	11.2	網のため不明	南	2	網用	直 旗面にて 旗面	
589	4	315	土御印 せん 高柄	BF113	笠置(10cm 地下)	10.6	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	1.3	灰	直 旗面にて 1/8	
590	4	061	土御印 せん 高柄	BF113	笠置(10cm 地下)	10.8	49 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	灰青	直 旗面にて 1/6	
591	5	221	土御印 せん 高柄	BF113	笠置	11.1	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	灰	直 旗面にて 1/4	
592	5	053	土御印 せん 高柄	BF113	笠置	10.0	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	1.2	灰	少半面 旗面にて 1/4	
593	4	314	土御印 せん 高柄	BF112	笠置(10cm 地下)	13.0	5.5 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	灰	直 旗面にて 1/6	
594	4	242	土御印 せん 高柄	BF112	笠置(10cm 地下)	11.6	4.5 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	1	黄灰	直 旗面 1/3	
595	4	253	土御印 せん 高柄	BF112	笠置(10cm 地下)	14.0	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	灰	直 旗面 1/6	
596	4	324	土御印 せん 高柄	BF112	笠置(10cm 地下)	12.8	3.5 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	1.3	灰	直 旗面 1/6	
597	4	317	土御印 旗高柄	BF108	被出	15.0	内 ロココラデ 箱 文灰	南	—	灰	直 旗面 1/2	
598	5	201	土御印 旗高柄	BF108	被出	9.4	内 ロココラデ 箱 文灰	南	1.2	灰	直 旗面 旗面にて 1/4	
599	5	102	土御印 せん 高柄	BF108	被出	12.2	4.6 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	灰	直 旗面 1/3	
600	5	003	土御印 せん 高柄	BF108	被出	13.0	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	白	直 旗面 1/2	
601	5	004	土御印 せん 高柄	BF108	被出	14.0	4.4 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	2	南灰	直 旗面 1/4	
602	4	319	土御印 せん 高柄	BF108	被出	11.4	8.0 4.5 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	白	直 旗面 1/8	
603	4	059	土御印 旗	BF114	笠置	12.4	内 ロココラデ	南	—	灰	直 旗面 1/8	
604	5	203	土御印 旗	BF114	笠置	21.2	内 ロココラデ	南	—	灰	直 旗面 旗面にて 1/4	
605	4	178	土御印 旗	BF112	笠置	21.4	内 ロココラデ	南	—	灰	直 旗面 1/8	
606	4	251	土御印 旗	BF111	笠置(10cm 地下)	21.6	内 ロココラデ	南	1.10	灰	直 旗面 1/8	
607	4	241	土御印 旗	BF108	笠置	7.0	内 ロココラデ 一輪	南	—	灰	直 旗面 1/6	
608	5	036	土御印 せん 旗	BF108	笠置	12.6	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	1.2	南灰	直 旗面 1/8	
609	5	048	土御印 せん 旗	BF108	笠置	12.3	4.0 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	白	直 旗面 1/4	
610	4	081	土御印 せん 旗	BF108	笠置	11.9	4.4 内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	—	灰	直 旗面 1/4	
611	4	085	手土上旗 旗	4次調査	表4	4.6	網のため不明	小中南	3.4	096	直 旗面 1/6	
612	5	051	手土上旗 旗	表5	表5	—	網のため不明	南	—	白	直 旗面 旗面にて 1/2	
613	5	049	手土上旗 高柄	表5	表5	—	網のため不明	南	—	白	直 旗面 1/2	
614	4	086	手土上旗 高柄	サトレンジ	サトレンジ	16.0	網のため不明	南	—	白	直 旗面 1/4	
615	4	086	手土上旗 高柄	サトレンジ	サトレンジ	11.0	内 ロココラデ	南	1.3	南灰	直 旗面 1/8	
616	4	083	手土上旗 高柄	サトレンジ	サトレンジ	—	網のため不明	南	2.4	白	直 旗面 1/4	
617	4	082	手土上旗 有り縫	リフラン	直角へり取り	13.4	直角へり取り	南	2.4	白	直 旗面 1/4	
618	4	322	手土上旗 受け縫	14.4	受け縫 ハーフタブレーン	14.2	内 ハーフ	南	1.3	網用	直 旗面 1/4	
619	5	046	土御印 旗	BF103/14	笠置(10cm 地下)	14.0	内 ロココラデ 箱 ロココラデ 直角へり取り	南	1.2	灰	直 旗面 1/6	
620	4	079	土御印 旗高柄	BF108	笠置	9.6	内 ロココラデ 箱 直角へり取り	南	—	白	直 旗面 1/4	
621	5	052	土御印 旗	表5	表5	30.0	内 ロココラデ 一輪	南	—	白	直 旗面 1/8	
622	5	246	土御印 旗	BF113	笠置	14.2	5.1 内 ロココラデ	南	1.2	灰	直 旗面 1/3	
623	4	石御印 石	BF110	P04307	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.4cm × 1.4cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
624	4	石御印 石	BF112	7号	下部のS	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.4cm × 1.4cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
625	4	石御印 石	BF113	S90455	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.4cm × 1.4cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
626	4	石御印 石	BF108	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.4cm × 1.4cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4		
627	4	石御印 石	BF109	SDD0421/41	直角部分	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
628	4	石御印 石	BF111	S90474	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
629	5	053	石御印 石	AS15/16	S90502	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4
630	5	055	石御印 石	AV12	S90533/36	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4
631	5	056	石御印 石	BA12/13	S90559 正方	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4
632	4	石御印 石	BF112/13	S90460	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
633	4	石御印 石	BF112	S90430	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	1/3	白	直 旗面 1/4	
634	4	石御印 石	BF113	S90466	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	1/2	白	直 旗面 1/4	
635	4	石御印 石	BF113	S90446	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
636	4	石御印 石	BF114	S90456	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4	
637	5	055	石御印 石	AX12	S90535	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4
638	5	055	石御印 石	AZ10	S90554	直角へり取り	—	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	—	白	直 旗面 1/4
639	5	056	石御印 石	AK10	S90516/30	内	内 ハーフ 幅 2.8cm 厚 1.2cm × 1.2cm × 0.8cm	南	2/3	白	直 旗面 1/4	

Tab.5-13 遺物觀察表

※ 創開式は生土窓に分類した

640	5	石製品	台石	BA12	S40559-409-0		<p>15×40×厚2×高2.23.9cm× 17.8cm×7.3cm × 重3.850kg</p>		完形	骨質、表面の剥離 が見られる
641	4	石製品	台石	BF-11	S40559-409-0	⑤	<p>15×40×厚2×高2.23.9cm× 17.8cm×7.3cm × 重3.850kg</p>		ほぼ完形	骨質、表面剥離が 見られる
642	4	石製品	台石	BL13	S40453-1000-1		<p>15×40×厚2×高2.23.9cm× 17.8cm×7.3cm × 重3.850kg</p>		完形	骨質、表面の剥離 が見られる
643	4	石製品	台石	BL11	S40474-409-0		<p>15×40×厚2×高2.23.9cm× 17.8cm×7.3cm × 重3.850kg</p>		完形	骨質、表面の剥離 が見られる

第VI章 調査の成果

磐城山遺跡は、第1・2次の発掘調査の成果から、大溝（SD0104とする）を持つ弥生時代後期の山中式期の集落址と、5世紀末から6世紀頃の古墳時代の集落址、古代の樅立柱建物群、木田塚に係る中世の城館跡が中心となっている複合遺跡として周知されてきた。

この状況下で行われた平成22年度からの発掘調査は、遺跡の北東側に当たることから、環濠とされている大溝と内部の集落とがどのような関係を有しているのかを確認することを主な目的として調査を実施した。

なお、届出された対象地は膨大な面積があるため、現在も調査進行中である。そのため、遺跡の全体会像が判明したわけではないが、これまでに得られた知見を中心にまとめておきたい。

1 環濠について

今回の第5次調査区は、磐城山遺跡がの丘陵平坦面の北端まで及んでいる。そのため、第1次調査区で確認したSD0104が弧状にそのびて集落を囲繞すると仮定すると、地形的に考えて第5次調査区の北端を東西方向に検出されるととなる。このように、SD0104の西側に展開する山中式の集落が、環濠で囲まれているか否かが一つの大きな検討課題であった。

しかしながら、調査の結果、第5次調査区では環濠らしき大溝を確認することはなかった（Fig. 65）。このことから、SD0104は集落を囲い込むものではなく、南東方向に伸びる丘陵の先端を遮断するように掘られたものだと理解することが可能となった。これを査証するように、SD0104は検出された約20mの間、南西から北東方向へ直線的に伸びている。

従来、弥生時代後期の集落は、大溝で開いた構造が環濠集落の典型的とされてきたが、丘陵を遮断するような事例も存在する。周辺地域でも津市大城遺跡等が該当する。大城遺跡では幾筋かの大溝によって集落が区割りされており、磐城山遺跡も今後の調査が進展すると同様の構造をとるかもしれない。

2 集落の継続時期

さて、磐城山遺跡の中心が山中式にあることは既に述べたが、今回の調査区ではそれを認める可能性のあるSH0455やSH0404、SH0559等が確認された。これらはいずれもにぶい黄褐色を呈した埋土であり、山中式以降の埋土とは一見して異なっていた。ここから出土した

土器群は、他の遺構のものと混在するものの、盤状高杯や壺、受口壺を主要な器種とするようで、山中式以前の八王子古宮式や松阪市川原表B遺跡等に併存する資料になろう。今のところ、この時期に該当しそうな竪穴住居は3棟のみであるが、類例の少ない時期であり、磐城山遺跡が後期初頭まで遡ることが明らかとなった点は重要な成果であった。

また、今のところ磐城山遺跡では集落しか確認されていないが、眼下に約1kmしか離れていない八重垣神社遺跡（第6次）において、ほぼ同時期の方形周溝墓SX078やSX080が確認されている。集落と墓域との関係も窺え、今後総合的に考究していくべきではない。

このように八王子古宮式併行から始まった磐城山遺跡の集落は、山中式期に盛行し、廻間式の古・中段まで継続することも明らかとなった。終焉がいつか判然としないが、他の集落でもこの時期に終焉を迎える遺跡が多く、磐城山遺跡も同じ動向をもつ点を評価しておきたい。なお、環濠SD0104の内容が明らかではないので、ここでは詳らかにできないが、集落と環濠との併存時期がいつなのかを詳細に検討する必要が生じてきた。この点は、今後の課題としておきたい。

この後、いくらかの空白期があった後、再び5世紀末頃から集落址として機能するようになる。この時期以降の中心がより西側にある可能性が高いと観測となるが、概ね6世紀にかけて盛行して7世紀代に衰退していく様が認められる。ただし、7世紀代に集落が衰退していく様は、SD0453やSD0308で画される大きな区画に起因する可能性がある。この点については、より西側の調査を待って言及したい。

3 古代について

今回の第4・5次調査区では、目立った古代の遺構はSD0453、SK0474を除き確認されていない。古代の遺構の中心はより西側にあるようである。

幾度か述べたように、SD0453はSD0308やSD0164と同一の溝であり、何らかの重要な施設を区画する重要な溝である可能性が高い。この溝は幅が約1.2mで、深いところの深さは0.6mを測る。約4~5°程度西へ振りながら、30m以上直線的にびて調査区外へと続いている。

また、この溝は第1次調査区にて直角に西へ折れて、約60m以上のびた後、再び調査区外へと続いている。

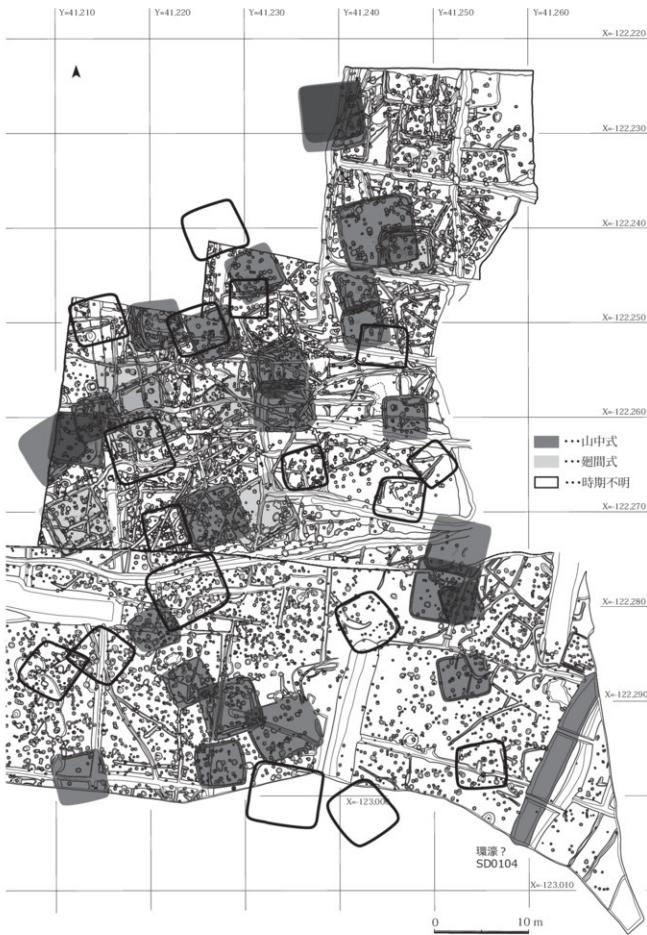


Fig.65 山中式から勢間式期の変遷 (S=1/400)

南東隅を基点に南辺の 32.38 m の間（中世から近代の溝が重複しており、6 m という意味ではない）が開口しており、出入口のための施設があつたものと推測される。今所、この区画溝の北辺と西辺は未確認である。

これらの溝の帰属時期は、混在遺物が多いことから特定することは難しいが、概ね 7 世紀後半から 8 世紀頃である可能性が高い。この時期は律令制を整備し、各地に官営の施設が築造される時期にある。これらの施設が直線的な溝や柵列で囲まれることが多いのは周知の事実であり、磐城山遺跡も何らかの官営施設が包蔵されている可能性が指摘できる。

4 中世城館にかかる遺構

磐城山遺跡の西側には、隣接して中世城館である木田城跡が登録されている。調査地内には、SD0354 や SD0501、SD0563、SD0524 等、比較的規模の大きい溝が幾筋も確認されている。これらは羽釜や土器器皿を出土するところから、15 ~ 16 世紀代の遺構で、木田城に係る区画溝だと考えられる。ただし、SD354 の南側には溝の芯々で約 3 m の間隔を保って併行して走る溝 SD0141、SD0189 があり、道路が通っていた可能性もある。

また、この他にも現代の車輪とほぼ同じ位置に溝が確認されるものがある。現代の地割溝の埋土は一見してしまがなく、岐別されるが、これらの溝の基底部にややしまりがあり、中世まで遡り得るものがある。SD0409 等が該当するが、このようす溝も城館にかかるものであり、その溝が現代まで地割りとして踏襲された可能性がある。

さて、これらの区画に囲まれた内部に屋敷等が展開することが容易に想像される。しかしながら、実際の調査では十分に把握することができなかった。中世のビットが古代に比して小規模である点に加え、無数の遺構が濃密に分布していることが、それを見つけることを困難にしている。拳程度の疊を多く含むビットが礎石建物の根柢になるのではないかと推測しているものの、規則的な配置をるとに至らず十分に建物として認識できないのが現状である。

なお、建物以外の遺構は希薄であり、井戸はもちろん土坑も少ない。僅かに SK0139 や SX0328 等が確認されている程度であるが、これらはいずれも土坑墓である可能性が高い。

このように中世のあり方は、比較的単純な様相を呈す。木田城の本体はよりに西方にあるのであろうが、中世の遺構が丘陵の東端まで広がっていることが確認できた。

参考文献

- 赤塚次郎 1990 「廻間遺跡」 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1992 「山中遺跡」 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1997 「西上免遺跡」 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 2001 「八王子遺跡」 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 2003 「八王子古跡式と近江湖岸型櫛」 『研究紀要』
第 4 号 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
浅野隆司ほか 2007 「境谷遺跡第 1 次発掘調査概要報告」 鈴鹿市考古博物館
浅野隆司ほか 2008 「境谷遺跡第 2 次発掘調査概要報告」 鈴鹿市考古博物館
伊藤 洋 2010 「宮古里遺跡発掘調査報告」 鈴鹿市考古博物館
伊藤裕俊 2004 「河曲の遺跡」 三重県埋蔵文化財センター
上村安治 2002 「伊勢・伊賀地域」 「弥生土器の編年と様式」
木耳社
大場範久・仲見秀雄 1972 「鈴鹿市高岡脇遺跡調査報告」
『神戸史談』第 8 号 三重県立神戸高等学校
岡田雅幸 2000 「磐城山遺跡（2 次）」 『鈴鹿市考古博物館年報』
第 1 号 鈴鹿市考古博物館
岡田雅幸・林和範 2003 「一反遺跡（4 次）」 『鈴鹿市考古博物館年報』第 4 号 鈴鹿市考古博物館
小倉 整 2005 「扇北遺跡（3 次）発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター
角正淳子 2000 「扇北遺跡発掘調査報告」 三重県埋蔵文化財センター
清水政宏 2003 「山奥遺跡 I」 四日市市教育委員会
清水政宏 2004 「山奥遺跡 II」 四日市市教育委員会
杉立正徳 1998 「磐城山遺跡発掘調査概要」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』V 鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市教育委員会編 1980 『鈴鹿市史』第一巻 鈴鹿市
田部剛士 2011 「磐城山遺跡（3 次）」 『鈴鹿市考古博物館年報』
第 13 号 鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2013 「磐城山遺跡（4 次）」 『鈴鹿市考古博物館年報』
第 14 号 鈴鹿市考古博物館
田部剛士 2014 予定 「磐城山遺跡（5 次）」 『鈴鹿市考古博物館年報』第 15 号 鈴鹿市考古博物館
新田 剛 1998 「一反遺跡（3 次）」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』V 鈴鹿市教育委員会
新田 剛 2010 「八重垣神社遺跡（第 6 次）」 鈴鹿市考古博物館
藤原秀樹 1996 「大坂上遺跡（2 次）発掘調査報告」 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』IV 鈴鹿市教育委員会
藤原秀樹 2007 「山中遺跡（第 4 次）」 『鈴鹿市考古博物館年報』
第 9 号 鈴鹿市考古博物館
穂積裕昌 2005 「葛上遺跡発掘調査報告書」 三重県埋蔵文化財センター
松阪市教育委員会 1991 『中部平成台園地理蔵文化財発掘調査報告書』
三重県史記さと事務局 2005 『三重県史』資料編考古 I 三重県
森川常厚 1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
吉田隆史 2011 『岸岡山遺跡』 鈴鹿市考古博物館
吉田隆史 2013 『平田遺跡（第 19・22 次）・平田送水場改築に伴う発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館

写 真 図 版



1 第5次調査区航空写真
(西上空から)



2 第5次調査区航空写真
(南上空から)



1 第4次調査区全景（南西から）



2 第4次調査区全景（北西から）



1 第5次調査北区全景（西から）



2 第5次調査中区全景（西から）



1 第5次調査区全景（南西から）



2 第5次調査南区全景（西から）



1 第5次調査西区全景（東から）



2 SK0474・SH0484 完掘（西から）



1 SH0404 完掘（南から）



2 SH0455 完掘（北から）



1 SH0428/29 完掘（南から）



2 SH0462-65 完掘（東から）



1 SH03138/139 完掘（北西から）



2 SH0561 完掘（北西から）



1 SH0560/66 完掘（北から）



2 SH0565 完掘（北西から）



1 SH0559 完掘（北西から）



2 SH0551/53 完掘（南東から）



1 SH0547/57 完掘（西から）



2 SH0545 完掘（西から）



1 SH0535/36 完掘（南から）



2 SH0542/44 完掘（南から）



1 SH0533/34 完掘 (南西から)



2 SH0517/27・SH0516/30 完掘 (南から)



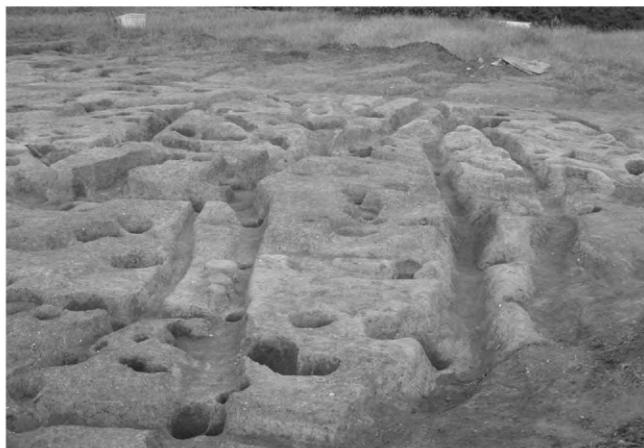
1 SH0508-14 完掘 (南から)



2 SH0507/15 完掘 (南から)



1 SH0504/05 完掘（南から）



2 SD0425/27 ほか完掘（西から）



1 SD0453 完掘（南から）



2 SD0442/32 ほか完掘（南から）



3 SD0405 挖削状況（西から）



4 SD0441/44 暗渠完掘（西から）



1 SD0409 碓出土状況（西から）



2 SH0428 南辺周壁溝完掘（東から）



3 SH0560/66/65 完掘（西から）



4 SH0559 遺物出土状況（南から）



1 SH0428/29 遺物出土状況 (Fig.32-33 東から)



2 SH0428/29 遺物出土状況 (Fig.32-41 北から)



3 SH0428/29 遺物出土状況 (Fig.32-31 西から)



4 SH0428/29 遺物出土状況 (Fig.33-63 南から)



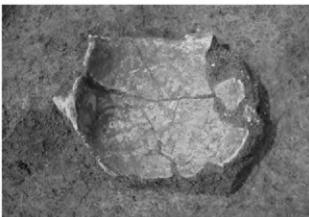
5 SH0404 遺物出土状況 (Fig.35-91 西から)



6 SH0404 遺物出土状況 (Fig.35-99 東から)



7 SH03138/139 遺物出土状況 (Fig.40-206 北東から)



8 SH03136 遺物出土状況 (Fig.40-183 東から)



1 SH0421/22/23 遺物出土状況 (Fig.35-88 東から)



2 SH0559 遺物出土状況 (Fig.43-250 東から)



3 SH0560 遺物出土状況 (Fig.41-217・222 北から)



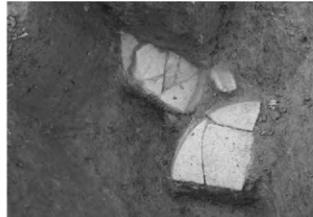
4 SH0566 遺物出土状況 (Fig.40-176・181・191 東から)



5 SH0547/57 遺物出土状況 (Fig.45-283 西から)



6 SH0507/15 遺物出土状況 (Fig.51-382 北から)



7 SD0405 遺物出土状況 (Fig.59-511 東から)



8 SD0405 遺物出土状況 (Fig.59-514 西から)



1 SD0405/11 遺物出土状況 (Fig.59-502・516 南から) 2 SD0442 遺物出土状況 (Fig.57-468 南から)



3 SH0535/36 排水溝遺物出土状況 (Fig.47-317 東から) 4 SD0501 遺物出土状況 (Fig.61-546 北西から)



5 第5次南西区遺構検出状況 (北から) 6 SH0547/57 検出状況 (北から)



7 SH0404 遺物取上風景 (西から) 8 SD0441/44 暗渠掘削風景 (西から)























報告書抄録

ふりがな	ばんじょうざんいせき (だいよじ・ごじ) はっくつちょうさほうこくしょ						
書名	磐城山遺跡（第4・5次）発掘調査報告書						
副書名	農地改良工事に伴う緊急発掘調査						
編著者名	田部 剛士						
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館						
所在地	〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL 059(374)1994						
発行年月日	2014年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号					
磐城山遺跡 (第4次)	鈴鹿市木田町字上條 2265.2266-1.2272	24207	34° 90' 15"	136° 57' 18"	2011年4月4日 ～ 2011年10月2日	315 m ²	緊急 発掘調査
磐城山遺跡 (第5次)	鈴鹿市木田町字上條 2261.2262-1.2263				2012年6月25日 ～ 2013年1月11日	620 m ²	緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
磐城山遺跡 (第4次)	集落跡	弥生・ 古墳・ 中世	竪穴住居・溝・ 土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗・ 石器・鉄器・土製品	主に弥生時代後期と 古墳時代後期の竪穴 住居を多数検出した。		
要約	弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居が多数検出された。正確な棟数は不詳だが、少なくとも50棟以上が著しく重複している。この他、竪穴住居から続く排水用の溝や、中世の区画溝等も確認されている。特筆されるのは、弥生時代後期初頭（八王子古宮式併行）の竪穴住居が確認されたことで、磐城山遺跡の集落の開始が弥生時代後期後半（山中式）よりも遅ることが明らかとなった。						

磐城山遺跡（第4・5次）発掘調査報告書

発行日 平成26（2014）年3月31日
編集・発行 鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒513-0013
三重県鈴鹿市国分町224番地
TEL 059（374）1994
FAX 059（374）0986
E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

印 刷 株式会社 三ツ星

Excavation Report
Suzuka City, Mie Pref., Japan

Banjyozan Site (4th・5th)

March, 2014

Suzuka Municipal Museum of Archaeology